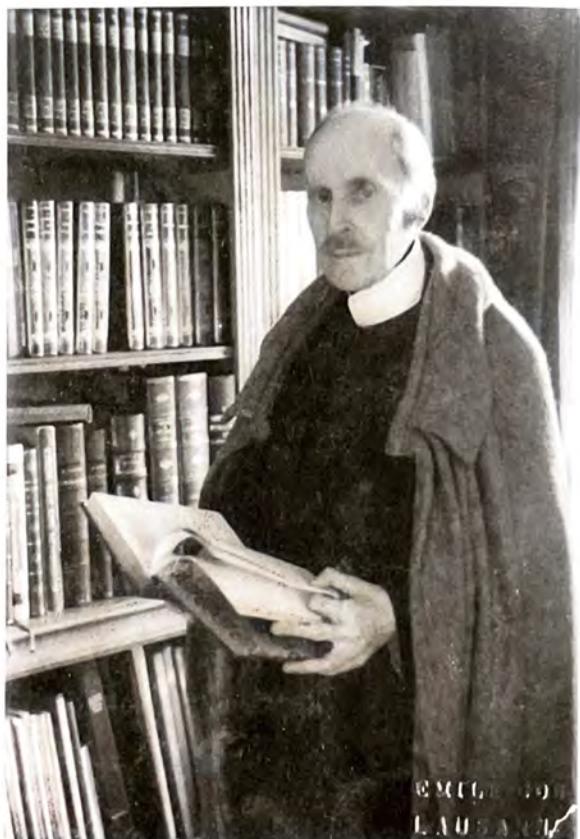


ユニテ

2007. 4

ロマン・ロラン生誕 140 年記念

財団法人 ロマン・ロラン研究所設立 35 年記念



Sourire

*Épuisé de travail
Je relis Colas Breugnon
Je suis seul à ma fenêtre,
Entre le sourire et les larmes.
Maître Colas Breugnon
Rit, se résigne, et cause. (. . .)
Comme lui je reviens trente années en arrière,
Et je revois ma jeunesse
La joie et l'allégresse au cœur
Et je pleure, à ma fenêtre qu'inonde la lumière du mois d'août,
Je pleure ma jeunesse.*

『ピエールとリュース』と今藤政太郎さんと……………	岩坪嘉能子……………	70
「平和のカノン」……………	清原章夫……………	72
半鐘山開発問題 和解……………	宮本エイ子……………	75
ロマン・ロラン研究所の活動報告……………		83
ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書……………		88
二〇〇六年度 賛助会員、寄付者名簿……………		89
あとがき……………		90

日本におけるロマン・ロラン受容史¹⁾

デイディエ・シッシュユ

訳 シッシュユ由紀子

ロマン・ロランの思想と著作は二十世紀の日本の有識者に多大な影響を与え、それがいかに多岐に亘ったかをたどることは非常に示唆に富む。

ロマン・ロラン受容の背景には、十九世紀終盤から二十世紀初頭にかけて顕著であった、外国文化との接触・吸収という大きなうねりがある。当時、フランスの知的文化は特別の威光を放ち、フランスを愛す知識人が活躍した。一八九九年には政治的・社会的考察雑誌「中央公論」が刊行され、「白樺」はヨーロッパの思想・芸術を紹介し、一八九五年から一九二八年の間に出版された「太陽」は、五三一号を数え、主に外国文学紹介に貢献した。

1. 一九一〇年代から三〇年代にかけての黄金期

このような文脈でロマン・ロランは日本に紹介されていくが、大正時代をはさんだ一九一〇年代から二〇年代は、後に「大正デモクラシー」と呼ばれる様に、はかなくとも、ある程度の民主化が見られた。

日本で、ロマン・ロランの紹介に大いに貢献するのが二十人ほどの優れた翻訳者たちだ。彼らの多くは、単に翻訳

家ではなく、自らが社会的に参画する識者・作家・芸術家だった。中でも象徴的な名前を幾つか挙げてみたい。

まず、高村光太郎（一八八三—一九五六）。彫刻家・詩人である高村光太郎はロランの信奉者の中でも最年長で、一九〇八年にはパリに滞在している。彼は一九一一年に、日本で初めて、ロランの『今日の音楽家たち』の部分訳を発表し、一九一三年には『ジャン・クリストフ』第四巻の冒頭『流沙』を訳している。

次に、大仏次郎（一八九七—一九七三）。彼は非常に興味深い人物で、大衆文学の代表的作家であり、近代フランスの实情に詳しく、一九三〇年に『ドレフェス事件』、三五年に『ブーランジェ將軍の悲劇』、五九年には『パナマ事件』を書いている。大仏は、一九二二年に『先駆者たち』、一九二三年には『クレランボー』を訳し、軍国主義を痛烈に批判する。一九二四年には『ピエールとリュース』を訳しているが、原作の発表からあまり待たずに翻訳が出ていることがわかる。ロランの真の信奉者として、大仏は左派的・革新的な思想を隠さず、一九三三年の五月二十八日付の読売新聞紙上で、ナチスがゲッベルスの指揮で断行した焚書（ふんしょ）に抗議し、尊厳あるドイツ人に訴えた。次に、片山敏彦（一八九八—一九六一）。詩人であり、ドイツ文学者であった片山は日本で最初の「ロマン・ロランの友の会」の創設に尽力し、一九二六年に『愛と死の戯れ』、一九三八年に『ペーラーヴェンの生涯』を訳し、一九三二年にはロマン・ロラン自身の要請で、雑誌『ヨーロッパ』の一一二号にフランス語で『ゲートルに捧ぐ』日本からの贈り物』という題でゲートルに関する考察を寄せている。

以上、ロマン・ロラン紹介に貢献した人物として、高村・大仏・片山を挙げた。

作品に注目すると、『ジャン・クリストフ』は、一九二七—一九一八年に、国民文庫刊行会から全訳六巻が出版され、一九二〇年から一九二四年にかけて、豊島与志雄（一八九〇—一九五五）による新訳四巻が新潮社から刊行される。その後一九三五年に岩波文庫に収録され、今日も店頭に並んでいる。その他、一九二五年に『狼』、一九二六年に『愛と死の戯れ』（一九二七年に岩波文庫）、『ペーラーヴェンの生涯』（一九三八）などの邦訳の発表が続く。

文庫本の出版で、読者は急増する。終戦前までの販売部数を見ると、『ジャン・クリストフ』は二十万四千五百部に上り、次いで『魅せられたる魂』が九万三千部、『愛と死の戯れ』が八万三千五百部、『ベートーヴェンの生涯』三万六千部、『ミレー』二万六千部、『獅子座の流星群』一万七千五百部と続く。

そして、前述のように、ロランの思想の浸透には知識人向けの雑誌『中央公論』や『改造』などが大いに貢献しており、『改造』を主宰した山本実彦（一八八五—一九五二）は後に、フランスでロランと面会するが、詳細については後述する。

日本におけるロラン人気は、間もなく作家自身の知るところとなり、一九一五年には、初めて日本人読者と書簡を交わす。相手は成瀬正一で、東京帝国大学の学生だった成瀬は四月十五日付でロランに敬意に溢れる感動的な手紙を書き、五月二十三日付のロランの返事には以下のようにある。「ヨーロッパの言葉や思想を学び続けなさい。でも、アジアの偉大な思想も十分に吸収されますように。我々は、この二つの世界の宝が共有されるように働かなくてはなりません。ヨーロッパとアジアはそれぞれほどお互いを必要としていることを確信しています。この二つの大河は合流しなければならぬのです。」¹¹ これを読むと、ロランが、一九一九年に書いた『精神の独立宣言』を日本で紹介するようにタゴールに託したことも驚きではない。その後、ロランは数々の日本人と書簡を交わし、何人かとは実際に会い、その記述が日記に残されている。一九二三年四月九日付の尾崎喜八（一八九二—一九七四）宛ての手紙には日本への大きな関心が示され、ロランが、当時のヨーロッパで通っていた誤解や先入観とは無縁だったことがわかる。彼は日本と外国の交流を歓迎しているが、イギリスのみが優先されぬようお願い、以下のように書いている。「日本がイギリスの言葉や思想のみを通してヨーロッパを知ろうとしたのは遺憾なことでした。私はイギリスを賞賛しますが、一部のエリートを除けば、およそアングロ・サクソン人は、ヨーロッパ諸国の中で、他の民族の魂を感じ友好を深めることにおいて最も劣っているのです。」彼は続けて、他人を認めないアングロ・サクソン人とは逆に、ラテ

ン民族は国家主義的な傾向はあるとしても、人種差別的先入観を持たず、日本人とよりうまく付き合っていけるとして、日本人の本質はラテン民族に似ているという。「日本人はイギリス人やアメリカ人たちより、フランス人やイタリア人、またはスラブ人の方が気が合うのではないのでしょうか。日本人の本質は繊細で神経質であり、彼らに非常に近いのです。」一九二五年十二月十六日付の尾崎宛の手紙を読むと、翌年一月二十九日に、ロマン・ロラン友の会のメンバーが集まることを知らされていたロランが、彼らへのメッセージとして、当時未発表であった『内面の旅路』の中の『周航』という章から二、三ページを抜粋して送っていることがわかる。

ロランの信奉者の中で、最も多くの書簡を交わしたのが片山敏彦だ。日本がよく知られていないことにロランは不満で、一九二五年三月十日の手紙には「一刻も早く、日本という悠久の国の新しい思想を知らしめるべきです。ヨーロッパで日本ほど知られていない大国はないでしょう。日本は賞賛されても、賞賛の対象は的外れで、偏っているのです。日本人の知性と力に驚くあまり、その内なる瑞々しさ・感情の深さ・誠実さを全く見過ごしているのです。」¹⁰ロランは更に続け、友の会が集うことを喜び、遙か遠くの信奉者とロランをつなぐもの、それは孤独であると書く。そして、日本でロランの友たちが感じている孤独感をロラン自身も感じていると言う。片山に宛てた一九二六年八月一日付の手紙で、ロランは彼の著作の翻訳許可を与えている。「友よ、ロマン・ロランの友の会のメンバーよ、尾崎喜八、貴方、倉田百三・高田・吉田はもちろん、貴方の友人に、いつでも、私の作品のどれでも翻訳し出版する許可を与えます。」¹¹この手紙の中で、ロランは友人であるシャルル・ヴィルドラックの日本滞在について語り、ヴィルドラックが日本の国家主義台頭を懸念していると伝えながらも「人々の最良の部分こそ最も隠されているものです」と、日本の国家・国民に関して悲観的になることを拒否している。ロランは既に来日を果たしていた友人タゴールとの対話について語り、タゴールは日本を賞賛し、日本人のことを「アジアそして世界の天性の貴族たち」と呼んでいると伝えている。

さて、ロランに会った翻訳者としては、一九二八年九月八日に上田秋夫（一八九九—一九九五）、一九二九年七月二日には片山敏彦がロランを訪ね、日記に詳細が残されている。¹⁵ ロランは日本人とのフランス語による会話には苦勞している様子だが、片山の人柄に強い印象を受け、「彼の男らしく優しい気高さ（精神の美しさ）」という言葉で、片山の知性とヨーロッパの伝統への造詣の深さに感心している。「彼はとても好感の持てる理知的な顔をしている。率直で過度の遠慮がなく、ちょうどいい。ヨーロッパ芸術を熟知し、ヨーロッパ人以上に我々のことに通じている。」¹⁷

一九二九年十月、フランス語に傾倒する一人の青年から本が送られる。宮本正清からであった。彼についても後述するが、この本はロランの六十歳を祝って書かれたもので『ロマン・ロラン物語・ジャン・クリストフ』という表題だった。一九二九年十月四日のロランの日記を読むと、遙か彼方から届いたある信奉者からの贈り物についてこう記している。「宮本正清から本が届く。ジャン・クリストフの抜粋を彼自身が訳したようだ。吉江喬松の序文あり。東京で一九二六年に出版。ライン河流域の人々が日本風に描かれたおかしな口絵が付いている。（六日）宮本正清は私への敬意に満ちたフランス語の長い手紙を同封していた。この手紙を八年間温め、やっと送る決心をしたという。私の著作がきっかけで、片山・高村・尾崎・上田・高田・吉田と知り合ったそうだ。彼は片山と上田と同郷らしい。」宮本の言葉として、「でも、私たちは、東京で、ジャン・クリストフの友愛の手に導かれ、永遠の光への愛の中で出会ったのです。」と書き留めている。

宮本の綴ったエピソードはロランの作家としての自尊心を大いに喜ばせたに違いない。それは、片山がヨーロッパに立つ前に、宮本と二人で奈良の寺に行き、非公開の仏像の見学許可を求めたときのこと、「これからロマン・ロランに会いに行く」と言ったことで、寺側からすんなりと許可を得たという話だ。宮本との交流によって、ロランは未だよく知られていない国への関心を募らせ、日本の教育制度に対して、宮本が、「科学的知識を偏重し、人間性に欠け、子供の才能の開花に貢献しない」と批判していることなどを書き留めている。ロランは同時に、日本の青年た

ちのある傾向への驚きを隠さない。それは中国の青年たちにも通じることで、彼の著作の中でも、特に悲観的な作品『アエルト』や『敗れし人々』を好んで読んでいたことだ。ロランは、彼らの精神的抑圧がいかに大きいかを物語ると推測している。¹⁹一九二九年十一月十四日付けの宮本宛の返事にも、日本の青年たちが『敗れし人々』をこれ程好むのは抑圧感からだろうと書き、自らが希望の使者になり、彼らが悲観論に陥らぬよう望んでいる。彼は、宮本に、そして宮本を通して全ての日本の青年たちに希望を失わないようにと、続ける。「私の『敗れし人々』が若者を惹きつけるのは、かの地に、大きな悲しみと精神的抑圧があるからでしょう。私の青春時代もそうでした。私はそれに打ち勝ったのです。友よ、私と一緒に打ち勝ちましょう。魂の軍勢は無数です。」²¹

一九三一年十二月、ロランはヴィルヌーブにガンジーを迎えるが、これに立ち会った日本人彫刻家がいる。当時フランスにいた高田博厚（一九〇〇—一九八七）だ。彼は『ミケランジェロの生涯』の訳者でもあり、ガンジーとロランの胸像を残している。ロランは一九三二年には、英語で読んでいた倉田百三（一八九一—一九四三）の『出家とその弟子』のフランス語訳に序文を載せている。

こうしたことを見ると、ロランが自分の著作が日本で広く読まれることを強く望んでいたことは明白である。日本人と交わした書簡からは、しばしば父親のような眼差しが感じられ、作家の姿を浮き彫りにしている。ロランは、日本の独自性を尊重し、気遣うのと同時に、日本が、侵略と支配という欧米諸国の悪の最たるものに執着することが、この国とアジアの未来にどんな影を落とすかを漠然と危惧している。『戦時の日記』の一九一八年七月二十日には、成瀬の来訪に期してこう書いている「日本は国家マキアヴェリズムを標榜し、軍国主義国家ドイツに酷似している。日本はその最悪の教義をドイツ以上に容赦なく実行していくだろう。」²³

さて、ここで、一つ重要なエピソードがある。フランス語とフランス文学に傾倒し、一九三八年から外務省の嘱託であった落合孝幸は、開戦直後のフランスにおいて、一九四〇年の春、パリで雑誌「改造」の社長山本実彦に会う。そ

して、もう一人の日本人、高田博厚を伴って、ロランのいるヴェズレー行きを決める。高田はガンジーとロランの対面に同席した彫刻家だ。落合は、後にこの面談の席で政治の話になった時のことを書いている。

以下抜粋。

……思わず口をはさんだ。

「ソ連の指導者たちはほんとうに民衆のためを思うことで行動しているのでしょうか。どうも疑われてなりません。」

すると、ロランはコーヒーカップを受け皿において、「なぜですか」と私に向き直った。そして、今日出会ったばかりの異国の若者の云い分にもじっくり耳を傾けようとする誠意のこもったまなざしで、私を見つめた。

「なぜなら同じ理想を実現するために、ともに命をかけてきたはずなのに、革命が成功するとすぐに疑いあったり、憎み合ったり、はてはかつての同士を殺したりします。それではいわゆる政治屋が私利私欲のために互いに術策や陰謀をたくましくして争い合い、打倒し合うのと余り変りはないのでしょうか。」

と、私は言葉を選びながら、ぼつりぼつりと述べた。そうしているうちに、それまでに若さの余り、世の中には醜い争いが多すぎると思いつめていた気持ち、胸一ぱいにこみ上げてくるのを覚えた。まじろきもせず私の眼に見入っていたロランの顔が、そのとき不意に人なつこく、やさしくほほえんだ。

“Ce que c'est que la politique, monsieur.”

〔それはね、政治はどういうものかということなんですよ、きみ。〕

私の胸の奥底まで見とおしたこの的確簡潔な回答を耳にして、私はあたりがぱっと明るくなるのを感じた。日ごろロランの作品を読んではばらばらに得ていた知識が、その瞬間さっとより集って生きものになったといおうか、

不意に生き生きと動き出した思いであった。その上、私は、ロランの慈父のような眼差しに、「しっかりとたまえ、負けるんじゃないよ」という無言の励ましも読み取っていた。²⁴

若き落合は師であるロランの前で緊張した様子で、崇拜とも言える調子で彼の感動が伝わって来る。落合の記録にもあるように、この四月三十日の面談は、単なる表敬訪問ではなく、様々な重要なテーマが議論された。実は、このときのことをロラン自身が書き残している。

二〇〇六年三月、フランス国立図書館で私が閲覧したこの日の日記の内容を以下に記す。「パリから彫刻家高田が日本の著名な雑誌社社長を連れてきた。東京の月刊雑誌『改造』を主宰する山本実彦で、秘書の落合孝幸を伴って来た。」ロランは落合を山本の秘書だと勘違いしている。「山本はイタリア、イギリス、フランスなど西洋諸国を歴訪している。五十代であろう。小柄でがっしり。顔は大きくまじめ。利発で自由な判断ができることは中国に対する見解を聞くだけでわかる。彼は中国を四十回以上訪れ、蒋介石など著名な政治家や文化人の全てと会っている。彼らが知性と政治的手腕において、いかなる日本の政治家より優れていることは明らかだと言う。戦争が中国と日本の両国にもたらす結末を案じている。私はこれに意見できるほどの知識はなく、第一、両国に親愛なる友がいる。その代わり、ヨーロッパでの戦争についての彼の質問には自由に答える。特に三人の独裁者について。ヒトラーについては、これまで既に私は十分に敵意を表明し、打倒を訴えてきたが、三人の独裁者の中では一番の天才だろう。ただ、その根本はバランスに欠け、不安定。ムソソリーニは最も平凡だ。頭はいいが化粧の濃い、差し詰め喜劇役者か悲劇役者か。²⁵ スターリンは革命の金床で四十年間打たれ抜いた鋼鉄のような男で、自ら革命を体現する。一日たりとて舵（かじ）を離したことはなく、想像を絶する不屈さで戦いと陰謀の地獄の真っ只中を生き抜いている。ゴリーキーについても長々と話す。文学・芸術・科学の権威としての彼の役目について、私たちの深い友情について。山本いわく日本の知

識人たちは西洋の知識人のような地位にない。ファシズム政権下のイタリアでさえ、ムッソリーニはベネデット・クロチエに手を出せないことに彼は驚愕している。数年前に、彼はアインシュタインを日本に招き、アメリカで再会したばかりだそうだ。方程式の世界に生きる偉大な科学者が漏らす現実的な失意の言葉は、しばしば私を驚かせてきたが、アインシュタインは山本に『この戦争には何の目的もない。』と漏らしたそうだ。(ウエルズも、人類の未来は三から四の帝国主義国家間の執拗な対立に要約されるだろうと、悲観的だ。) 私は彼に言った。『ヨーロッパ合衆国、もしくは、星座にならって、フランスと英国を究極の基軸とするヨーロッパ連合国家の建設が進むことを願う。』ここ数年の経緯を見ても、もはや統一なしに小国家が単独で存続する道はない。

山本は、私に日本で講演するよう勧める。私の著作もよく読まれ、ジッドやヴァレリーも読まれているらしい。スタンダールの愛読者の会もあるが、不思議なことにバルザックは根付かなかったという。山本は東京でクロードとも面識があり、近日中にまた会うそうだ。』

以上は一九四〇年四月三十日の記録の全部である。この面談が決して儀礼的な堅苦しいものではなかったことがわかる。戦争という切迫した問題はもちろん文学の話など、話はあらゆるテーマに及び、ロランの先見の明を示す見解が見られる。例えば、今日、超国家と呼ばれる帝国主義国家間の紛争に言及し、ヨーロッパ合衆国と言う連邦型統一か、星座のような連合型統一化という表現が見られる。彼は、大戦後の冷戦構造を予知し、ヨーロッパ統一論議の争点となる統一概念の相違を認識している。

2. 戦時期の試練の時代

一九四〇年になると、政局の変化はロラン信奉者に数々の試練をもたらす。

軍国主義・強権主義は三〇年代から顕著になるが、日本が枢軸国に加わったことで、ロランの著作及びその読者たちは当局から警戒されることになる。ロラン信奉者たちの中にも、高村光太郎のように、ロランに背き、国家主義に傾いた者も出てくる。しかし、最も真摯で信念ある者達は、彼らの知性にも劣らない強さで、この試練に耐え抜いて行く。三国同盟の締結後もフランス文化の威光は保たれ、二つの公的機関が存続した。それは、偉大な駐日大使ポール・クローデルによって開設された東京日仏会館と京都の関西日仏学館だ。時局の悪化にもかかわらず、フランス文化と触れる機会が保たれたことは、国家権力から危険視された多くの日本人知識人にとって大きな支えであったはずだ。当時の警察の調査資料を見ると、関西日仏学館で行われる「文化運動」と「人民戦線」運動との接触が警戒される一方、数ヶ国語を話す知識人たちが名指して警戒されていたことがわかる。

これら知識人の多くは学者だった。宮本正清（一八九八—一九八二）について詳しく述べよう。彼を見れば、抵抗のために、ロランの言葉がいかに大きな支えになったかがわかる。²⁷

一八九八年に高知に生まれ、東京の学生だった宮本は、一九二七年、関西日仏学館設立のために京都に来、その後、学館の教師となる。フランス文学者として、宮本は長年のロランの読者であり、一九二九年に彼がロランの交わした書簡については前述の通りだ。

宮本正清は、四〇年代の困難な時代に大役を果たして行く。国家総動員法の時代に、『魅せられたる魂』の初の全訳に取り組むのだ。検閲は日常的で、一九四〇年十月、『魅せられたる魂』の第一巻が岩波文庫から出版され、四一年には治安維持法の強化で更に思想弾圧が強まる。それにもかかわらず、宮本はこの年、第二・三・四巻を四二年には五・六・七を出す²⁸が、白抜き部分など、検閲箇所がいたるところに見受けられる（当局の指示や出版側の配慮で削除されたのは、六巻では五箇所、七巻では二十三箇所）。その一例が、アンネットとマルクの会話で、「戦争がお前を捕まえにきたらどうするの？」と、問うアンネットに、「僕は『ノン』というでしょう²⁹」と、マルクが答える場面だ。

戦時下の国家にあるまじき問答として削除されたのだ。³⁰

後の一九五四年の秋、『魅せられたる魂』の文庫本再版に際して、宮本はあとがきに書いた。「この翻訳は、一九四〇年から四二年にわたって、戦時中に岩波文庫として、日本で最初に刊行された。このことは多くの意味を持っていた。当時の日本を覆っていた排他的、反ヨーロッパ的な、重い、窒息的な空気の中で、日に日に深刻になって行く鎖国的な、狭量な、軍国主義と国家主義の圧迫と、酷しい、窮屈な物質上の統制の下で、ロマン・ロランの作品を出版すること自体がすでに一つの大きな抵抗であった。……」³¹

一九四二年八月、『魅せられたる魂』第七巻、一万三千部が印刷出版される。この年、「横浜事件」が起きる。共産主義者の疑いをかけられた六十人ほどの編集者・記者が逮捕され、拷問を受け、十分な審議もないまま有罪を宣告され、更に四人が獄死した事件だ。一方、「中央公論」や「改造」が廃刊に追い込まれる。一九一九年創刊の「改造」の主宰者こそ、一九四〇年四月にロランを訪問した山本実彦だ。ここに至って、ロランに傾倒することは密かな非法的な行為となるが、ロランの火は灯し続けられる。一九四五年六月十五日、宮本は関西日仏学館の教師ジャン・ピエール・オーシュコルヌと共に不当に逮捕され、拷問を受ける。終戦の翌日、八月十六日に釈放された宮本は彼の味わった苦しみと取り戻した自由への歓喜を二篇の詩にしている。その一つは「焼き殺されたいとしらへ」という題で、逮捕時に押収され、焼かれた資料をさしている。³²

3. 一九四五年以降の復興の時代

日本人にとって、敗戦は政治的・知的・精神的自由の獲得を意味した。敗戦に打ちひしがれながらも、再び外国に開かれたこの国で、ロランの普遍主義・平和主義のメッセージが再び注目を集め、読者の心を掴む。戦後のロラン人

気の再燃の背景には、みずず書房創設者である小尾俊人の、精力的で忍耐強い仕事があった。小尾は、「ロマン・ロラン全集」の編集に取り組む。

戦後の出版界は占領軍の監視下にあり、軍事政権下で体制転覆を煽ると危険視されたロランの著作は、占領軍からも敵対視される可能性があった。

みずず書房は、忍耐強く何年もかけて翻訳家たちの努力を結集し、目的は達成される。

その陰に、ロラン自らが日本の友人に宛てた一通の手紙があった。前述の一九二六年八月一日付の手紙で、ロランは片山に宛てて、彼の著作のどれでも訳してよいと、書いていたのだ。³³「ロマン・ロラン全集」は、一九四七年から一九五四年の七年の歳月をかけて、第一期五十巻が予定され、その後、第二期を経て、一九七九年から一九八五年にかけての第三期には四十三巻にまとめられた。³⁴

みずず書房からの出版が、ロランの著作への反響を大いに高めたことは明らかだ。ロランの書簡・日記の全部は入っていないので、正確には「全集」ではないが、フランスでは未発表の原稿（日本人に宛てた多くの手紙など）の邦訳が収められている。これらを読むためには、ロマン・ロラン財団の資料を管理するフランス国立図書館で閲覧するか、みずず書房の邦訳に当たるかのどちらかだ。一九七五年の数字によると『ジャン・クリストフ』の延べ販売部数は五十五万四千部、『魅せられたる魂』は六十二万七千九百部であり、反響の大きさを十分物語っている。³⁵

戦後のロランの影響は文学界に留まらず、音楽界・演劇界・映画界にも及ぶ。一九五〇年『ピエールとリュース』を今井正監督が映画化した『また逢う日まで』が大ヒットしている。

このように、戦後の復興期はロラン研究にとっても再生（ルネッサンス）の時代となる。一九四九年には「日本・ロマン・ロランの友の会」が創立され、参画した著名な知識人や学者の中にはラブレエの研究でも知られる渡辺一夫（一九〇一—一九七五）がいる。後のノーベル賞作家大江健三郎も彼の教え子だった。渡辺は一九四八年に、「ロマン・

ロランを偲びて」という文章を書き、戦争に至った経緯を振り返りながら、ロランの志を熟考し、「かつての愚かさを繰り返さぬために」と、訴えている。

先に述べたように、京都がロラン研究の拠点になったのは、宮本正清の功績が大きかったからに他ならない。検閲や投獄という戦時中の試練を耐え抜いた後、宮本は、関西日仏学館に復職し、その後大阪市立大学教授になる。一九五〇年には大学教授としてフランスへ招聘され、研究の傍ら、アルバン・ミッシェル社との交渉に当たった。『魅せられたる魂』の他に、『コラ・ブルニョン』などを訳した彼は、一九八二年十一月十六日に亡くなるまで、ロマン・ロランの思想の普及に努め、一九七一年、収集したロラン関係の資料が分散しないように、京都に財団法人「ロマン・ロラン研究所」を設立した。

☆ ☆ ☆

「ロマン・ロラン派」とも呼べる日本の知識人の典型が宮本正清であるとしても、幸い彼は一人ではない。日本でのロマン・ロランの存在の大きさが証明するのは、いかなる状況でも、自由で断固とした勇敢な人たちがこの国にいたと言う事実だろう。彼らは、その知性にふさわしい強さを持っていた。ロランが作家として幸運だったのは、時代に翻弄されながらも、試験に立ち向かい、信念を行動に移せる信奉者たちに恵まれたことだろう。今日の状況は、もちろん三十年前とは変わった。しかし、時として、彼の影響を再認識する機会はある。最近では、二〇〇六年十二月に、宮本正清の邦訳をもとに三味線奏者今藤政太郎の作曲・演出、竹田真砂子脚色、吉行和子の朗読で、『ピエールとリュース』が東京で上演された。今藤は学生時代にこの作品を読み感銘を受けていたという。「抵抗」の作家ロマン・ロランの姿は、日本の今後の時勢にかかわらず、永遠に生き続けるだろう。

- 1 本稿は「Association Romain Rolland (ロラン・ロラン協会) 主催で、二〇〇六年三月十日にパリ高等師範学校で行われた講演「Présence de Romain Rolland au Japon」を短縮し、加筆・訂正したものである。(講演内容は、同タイトルで *Etudes Rollandiennes* Numéro 16「ロラン研究第十六号」として同協会から二〇〇六年十月に発行。)
- 2 前記講演に先立ち、みずす書房創設者である小尾俊人氏より、ロマン・ロラン受容史を総括する大量の手書き資料を戴き、貴重な原典となった。脚中では「小尾手書き資料」と記す。また、フランス国立図書館のブレヴォ女史には、ロマン・ロラン財団所有の未発表書簡や日記の閲覧のため協力を戴いた。勅ロマン・ロラン研究所からは、宮本エイ子夫人のご厚意で、宮本正清先生の蔵書を拝借し、機関誌「ユニテ」の全号を頂戴するなど、情報収集のために多大なご支援を戴いた。全ての方々に感謝し御礼申し上げます。
- 3 小尾手書き資料
- 4 ユニテ二十三号(一九九六年三月)小尾俊人「ロマン・ロランと日本人たち②」pp. 32-33
- 5 小尾手書き資料
- 6 ユニテ二十八号(二〇〇一年四月)小尾俊人「ロマン・ロラン全集の出版の頃」(参考資料ロマン・ロラン邦訳出版年表 pp. 31-33)
- 7 ユニテ十七号(一九九〇年三月)小尾俊人「日本におけるロマン・ロラン受容史」p. 16
- 8 *Les Voix. Kyoto* 51号(一九九〇年夏)Marie-Laure Prévost "Rencontres Japonaises" (ブリー||ロール・ブレヴォー「日本人との出会い」) p. 16
- 9 *Journal des années de guerre 1914-1919*, Albin Michel, Paris, 1952, p. 369 (戦時の日記一九一四—一九一九) p. 369で「手紙に(こ)記述」
- 10 同上 p. 370
- 11 一九二五年三月十日付、片山宛の手紙
- 12 ロランは手紙を送る前にタイプコピーさせていた。フランス国立図書館に残された資料にはタイプミスか八月九日とある。
- 13 フランス国立図書館、ロマン・ロラン財団所有資料中一九二六年八月九日付の手紙

- 14 同上
- 15 フランス国立図書館ロマン・ロラン財団 *Journal* 一九二八年九月八日
- 16 同上 一九二九年七月二日
- 17 同上
- 18 同上 一九二九年十月四日
- 19 同上
- 20 フランス国立図書館ロマン・ロラン財団一九二九年十一月十四日付け宮本宛の手紙
宮本による邦訳は『ロマン・ロラン全集』三六、p. 473 (一九七九、みすず書房)
- 21 同上
- 22 例えば、一九三〇年二月四日付の片山宛の手紙は愛情のこもった語りで綴られ、一九三〇年五月八日の上田宛の手紙では自ら「父親」という言葉を使っている。*Journal des années de guerre* 『戦時の日記一九一四―一九一九』には“petit Naruse” (成瀬君) という表現がある。
- 23 *Journal des années de guerre* p. 1538 (『戦時の日記一九一四―一九一九』p. 1538)
- 24 ユニテ二十三号 (一九九六年三月) 落合孝幸「ロマン・ロランの面影」pp. 48-49
- 25 ナポレオンを指して当時のローマ教皇が用いた表現
- 26 ユニテ三十二号 (二〇〇五年四月) 園部逸夫「加古祐二郎と瀧川事件など」p. 9
- 27 宮本正清の生涯については、ユニテ十六・特集宮本正清追悼号 (一九八八年十一月) に詳しい。巻頭に略年譜。
- 28 ユニテ二十八号 (二〇〇一年四月) 小尾俊人「ロマン・ロラン全集の出發の頃」(参考資料ロマン・ロラン邦訳出版年表 pp. 31-33)
- 29 *L'Âme enchantée*, Albin Michel, Paris, 1951 (初版一九三四) p. 723
- 30 ユニテ二十号記念特集 (一九九三年三月) 宮本正清没後十年記念講演小尾俊人「ふしぎな静けさ」pp. 54-55
- 31 『魅せられたる魂 (一)』宮本正清訳 (岩波文庫 一九八九) p. 476

- 32 ユニテ十六号（一九八八年十一月）pp. 2-3
- 33 戦後の出版諸事情についてはユニテ二十八号（二〇〇一年四月）小尾俊人「ロマン・ロラン全集の出発の頃」に詳しい。
pp. 15-18
- 34 小尾手書き資料
- 35 ユニテ十七号（一九九〇年三月）小尾俊人「日本におけるロマン・ロラン受容史」p. 17
- 36 ユニテ二十三号（一九九六年三月）小尾俊人「ロマン・ロランと日本人たち(2)」pp. 36-37

（甲南大学助教授・仏文学）

戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン

山口俊章

戦間期ヨーロッパの諸状況との関わりにおいて、この時代のロマン・ロランの文学・思想をめぐる三つのテーマについて論究したい。

一つは、第一次世界大戦後の仏・独・伊関係、とりわけドイツおよびイタリアの動向に対するロマン・ロランの見方である。『ジャン・クリストフ』の作家は、この時期、『魅せられたる魂』などの作品を書きつつ、イタリアのファシズム、またドイツのナチズムの動きをどう見ていたか、ということであるが、要は、それがロランの文学・思想にどう影響を及ぼしたかということである。

二つ目は、ロシア革命とその後のソ連の動向に対するロマン・ロランの見方である。ロランは、ロシア革命を擁護し、レーニンやゴリキーに共感を寄せ、ロランなりに社会主義やその社会についてのイデー、イメージを描いたが、やがてスターリン体制となったソ連をどう見たかという問題は、みずから訪ソしてスターリンとも会見しているルポルタージュ『モスクワ紀行』が公刊されている現在、なお明らかにされるべきであろう。そしてここでも、ソ連および社会主義ないし共産主義に対するロランの見方は、彼の文学・思想にどう作用したか、というところに帰着する。

そして三つ目のテーマは、戦間期のロマン・ロランが、ガンジーなどインドの思想に関心をもつにいたった内面のプロセスはどうであったのか、その関わりにおけるロランの思想・信条、あるいは精神の内奥を窺うことはできない

か、ということである。

戦後と『自由芸術』

ヨーロッパでは、戦間期ないし兩大戦間という言葉、フランス語でいう l'entre-deux-guerres という言葉が定着し、こともなげに使われることがあるが、これは実に恐ろしい言葉で、二つの世界大戦の間に二十年ほどの間隔しかなかったことから生まれた言葉であろう。ヨーロッパでは多くの人びとが兩次大戦を経験したわけで、しかも先の大戦が終わって結ばれた講和条約が、次の大戦の原因ともなりかねないことが確実視されるという現実があった。この時期、すなわち第一次大戦が終結した一九一八年十一月から、第二次大戦が勃発する一九三九年九月までの年月、ロマン・ロランは五十二歳から七十三歳の年齢を生きることになるが、そこにおける彼の文学的・思想的営為はどのようなものであったろうか。

第一次大戦の終結直後、一九一九年三月、ヨーロッパの十字路ともいへべきベルギーのブリュッセルにおいて、『自由芸術』*L'Art libre* と称する雑誌が発行された。これは、フランス生まれの画家ポール・コラン Paul Colin (一八九二—一九八五)、当時二十七歳の編集によるもので、最初は半月刊、後には月刊となつて一九二二年六月まで、五十三号にわたつて発行されたものであるが、ロマン・ロランはこの雑誌について、「戦後の当初数年間の国際的な芸術・思想に関するフランス語による最も貴重なもの」と評価した。

芸術の独立を主張する『自由芸術』の指針の一つは、大戦中のロマン・ロランの「戦いを超え」たヒューマニズムとインターナショナルイズムであった。「西欧の知識人の共感の絆」をつくりだすことを謳う『自由芸術』は、戦後の「世界の再生に協力する」ことを主張するが、しかしまだヴェルサイユ講和会議が進行中で、フランスではドイツへ

の報復熱で世論が沸騰しているさなかに、昨日までの敵国との融和を求めることは、多くの敵をつくることでもあった。ポール・コランは、すでに第四号（一九一九年五月）において、同誌が「敗北主義」*défaitisme*の烙印を捺されていることを取り上げ、これに正面から反駁した。

すなわち、コランは、「われわれの指導者ロマン・ロラン」を擁護することが敗北主義ならば、われわれはたしかに敗北主義者であるといい、「ロマン・ロランはヨーロッパの良心を裏切らずにわれわれの世代の魂を救った唯一の指導者である」という。そしてまた彼は、バルビュス *Henri Barbusse*（一八七三—一九三五）や、年代のより近いデュアメル *Georges Duhamel*（一八八四—一九六六）のように、戦場にあつてなお「自己の最良の部分との崇高で内密な対話を中断しなかった」人びとに敬意を表しつつ、「人道主義と平和主義のユートピア」を信じていることが、あるいはまた「武装解除されて勝利者の意のままにされている敵を侮辱する連中」を侮ることが敗北主義ならば、われわれはいかにも敗北主義者であると論じた。

このように、『自由芸術』は、ロマン・ロランを師表としつつ、平和によって解放された人間と芸術の自由を叫び、インターナショナルの旗幟を掲げるとともに、諸国の芸術・文学・思想の動きを報じるほか、各国の芸術家・知識人らに誌面を提供し、その後のヨーロッパ規模の運動の先鞭をつけたのである。

とりわけ、ロマン・ロラン自身の関わりを挙げれば、第八号（一九一九年七月）に、ロランの起草になる『精神の独立宣言』がロランほか十二カ国五十名の作家・知識人らの署名とともに掲載されたが、そこには、アインシュタイン、ヘルマン・ヘッセ、エレン・ケイ、ハインリッヒ・マン、ジュール・ロマン、バートランド・ラッセル、シュテファン・ツヴァイクら、戦間に活動する国際的な自由主義知識人が名を連ねている。ヴェルサイユ講和条約調印と同時に公表されたこの『宣言』は、大戦中のロランの孤独な闘いの結晶として生まれたもので、戦後のロランの言論活動のスタートであり、戦後ヨーロッパ世界への訴えであった。

『自由芸術』はまた、同じ一九一九年八月号を手始めに、バルビュスを中心とするクラルテ運動について大々的に報じたが、これが機縁となって、やがてこのクラルテ運動に加わることを留保するロランとバルビュスとの間に論争が生まれることになる。

この論争について少々触れると、発端は一九二二年十二月の『クラルテ』*Clarté*誌に、バルビュスが『義務の他の半面——ロラン主義について』と題する論説を発表し、クラルテ運動に加わることを留保するロランに対して、精神の独立を信奉する知識人には政治行動への無関心、いな嫌悪さえあることを指摘し、それは「超脱」あるいは象牙の塔への隠遁であると批判したことであった。そしてバルビュスは、知識人の義務は古い社会組織を破壊すべき批評活動とともに、新しい秩序の建設に積極的に参画することであるとし、その後者の義務に関わろうとしない傾向をロラン主義と決めつけたのである。

これに対して、ロランは、『自由芸術』（一九二二年一月）に寄せた公開書簡でこう述べた。「私を知り私の著書をただの一冊でも読んだ人なら、その語調が（超脱した）人間のものであるか——それとも逆に、世界のさまざまな苦しみに心を引き裂かれ、そのような苦しみを少なくするか、あるいは和らげるかするために闘っている人間のものであるかが分かるでしょう」。そしてロランは、『クラルテ』の発足当初から創設者たちの精神とは一致しないことを感じてきたとしつつ、バルビュスの文章を引用し、『クラルテ』の一般的諸原則が（……）規定している革命的社會幾何学に誤算はありえない」とする、そうしたいわば教条主義を批判する。そしてさらに、「私はまた、あなたが共產主義の大義のためになしうる最大の奉仕は、その弁護をおこなうことではなく、率直かつ真正な批判をそれに加えることであると固く信じています」と直言したのであった。

この論争は、当時の状況を反映し、知識人の在り方のいわば倫理性を強く問うものとして記憶される。つまり、彼らの前には、一方で革命の生みの苦しみの中からソヴェエト連邦を樹立しつつある国があり、またスバルタクス団の

蜂起が鎮圧されて革命と反革命がせめぎあう中でワイマール共和国が誕生するという状況があった。そして他方、米英仏日の四連合国がロシア革命に対する干渉戦争を起こし、あるいはヴェルサイユ条約にもとづく賠償問題で苛斂誅求する疲弊した戦勝国のナショナリズムがあった。そうした現実には、正義とヒューマニズムを国境の内側にのみとどめることができない知識人にとって、座視しえないものである。バルビュス||ロラン論争は、そうした諸状況の倫理性のもとで理解されるべきであるが、当時誕生して間もないコミンテルンの影響下にあったバルビュスに対して、理想主義者であるがゆえに特定のイデオロギーや現実に妥協しえないロランの懐疑が作用し、二度の応酬があったものの、争点是对立したままに終わった。だが、ここには、両者の対立を超えて、その後のヨーロッパ、ひいては世界における人間の「当為」あるいはアンガージュマンをめぐる争点の原型が見出されるという点で、忘れがたいものであった。

『自由芸術』は、ほかに、ジョルジュ・デュアメル『戦争と文学』という戦争体験者ならではの痛切な論説、あるいはマルセル・マルチネの『ロマン・ロランの作品への序説』と題する連載ものなど、いまなお有意義な論稿を掲載し、歴史の評価に耐えうる成果を残したが、これをいわば発展的に継承したものが、創刊者としてロマン・ロランの名をとどめる雑誌『ヨーロッパ』である。

『ヨーロッパ』に拠る言論活動と『魅せられたる魂』

一九二三年二月、月刊誌として誕生した『ヨーロッパ』Europeは、編集主幹に作家のルネ・アルコス René Arcos（一八八一—一九五九）とポール・コランが当たり、当初はロマン・ロランの名を掲げていないが、ロランの慫慂のもとに発行されたことは周知の事実であろう。

戦間期のロランの言論活動は、主としてこの『ヨーロッパ』誌を舞台に展開されるわけであるが、一九二〇年代と三〇年代前半に同誌に発表された論説の多くは、『鬪争の十五年』*Quinze ans de combat*（一九三五）として一冊にまとめられている。それらの内容を見れば、その間のヨーロッパの現実が如実に示されていると言ってよいが、一九二〇年代においては三つのライトモチーフがあって、第一は独仏和解のために、第二はイタリアのファシズムに抗して、第三はソ連擁護のために、というものである。

第一の独仏和解のためにということでは、『ジャン・クリストフ』の作家の考えはきわめて明瞭である。以前の両大戦間、すなわち普仏戦争が終わった一八七一年から第一次大戦勃発までの大戦間を舞台に、ドイツ人の音楽家を主人公とする大河小説を書き、作者自身とほぼ同時代の独仏間の歴史的運命を超克ないしは克服すべき人間像を描き上げたロランは、独仏の戦いを「兄弟殺し」として糾弾したのであるから、一九二三年のルール占領（ドイツの賠償義務不履行を理由としてルール地方にフランス軍を進駐させた）に際し、これは「独仏間の戦争再開と両国相互の破壊をもたらすであろう」と強く批判した。フランスの「抑圧者たちは、恐るべき未来に彼らの子どもを陥れている」というロランの声は悲痛であった。

そしてまた、ロランは、同じ一九二三年の冬、『ドイツの不幸な人びとの救援を、フランス人に訴える』というアピールを発し、「苦悩を前にしては、もはや勝者も敗者もない」としてこう訴える。「ドイツの民衆が餓死しようとしている。罪のない多数の人びとが戦争の災厄の結果をむこたらしくも償っている。（……）いにしえの騎士道のフランス——力強いユゴーはその最後の歌い手であった——は、戦場に手を差し伸べ、その傷に包帯をしたものだった。四年前に戦争は終わった、と人びとは言い、大地の新たな生命がその収穫物による盛んな風化で戦場を覆い隠している。しかし敗者は依然として横たわっており、救いの手もなく死んでいるのである。」

こうして、ジャン・クリストフやオリヴィエたちの次の世代を案じ、かつ彼らに訴えかけるロランは、第二のライ

トモチーフ、つまりイタリアに台頭するファシズムに抗して声を上げなければならぬ。

イタリアのファシズムは、終戦直後の一九一九年三月に結成されたイタリア戦闘ファッシを起源とするが、これはムッソリーニらの〈革命行動ファッシ〉のグループが中心となって結成したもので、やがてファシスト党を名乗り、ローマへ進軍して一九二二年十月にムッソリーニが政権を掌握した。この政権は以後二十年にわたる長期支配を続けることになるが、一九二五年一月にはムッソリーニによるファシズム独裁宣言、翌二六年には統領（ドゥーチェ）就任というように独裁体制を確立した。

ロマン・ロランはその年、一九二六年四月、ムッソリーニのトリポリにおける戦争挑発行為に抗議して、『戦争とその挑発の手先らに抗して』という一文を書いたのを初めとして、イタリア・ファシズムへの批判を展開していくが、『闘争の十五年』の序文として載せた「パノラマ」にこう書いている。

「イタリアは、私の青年時代、私の心情と思想の生活、また私の友情において、非常に大きな位置を占めていたので、私の運命とイタリアの運命とはからみあわないではいかなかった。(……) イタリア人に対するイタリア・ファシズムの罪悪に、ヨーロッパに対する罪悪、すなわちムッソリーニが振りかざした戦争の脅威が加えられた。(……) 戦争に反対する者は、戦争挑発の手先との闘争に入るべきであった。ムッソリーニがトリポリで戦争をおおらたてた翌日、——私は(……) その闘争に入った。」

ロマン・ロランの読者はよく知るように、大作『魅せられたる魂』が書かれたのは、一九二一年六月から一九三三年九月にかけての十二年間であり、これはいまま少々振り返ったイタリア・ファシズムの台頭から独裁的支配の確立にいたる時期とほぼ重なっている。そして、『魅せられたる魂』は、一八七五年生まれとされている主人公アンネット・

リヴィエールの二十三歳から六十歳までの生涯を描いていることからして、実際の歴史の年代では、一九〇〇年のパリ万国博覧会あたりから、この作品が完結された一九三三年までを背景としている、ということになる。言い換えれば、この作品の舞台背景は、作者ロランが生きてきた、そして現在なお生きている二十世紀の現実であり、同時代史なのである。ロランは作家としてもっともむずかしい方法を選び、あえてそれに挑戦した。それゆえ、作品の第六巻、もう終わりに近い『予告する者』の第二部「フィレンツェの五月」において、主人公の息子マルクがファシストによって刺殺されるといふ場面が描かれもすることになる。

このように、ロランは評論なり論説なりで取り上げるファシスト批判を、小説に描きこむという手法、第二次大戦後に流行する言葉を用いるならば、いわゆる *literature engagee* を先取りしていると言ってよいであろう。

ロランのロシア革命観・ソ連観とインド思想

ここで本論の二つ目のテーマであるロマン・ロランのロシア革命およびソ連についての見方（これは前記第三のライトモチーフであるソ連擁護と重なる）に移りたい。

ロランは、二十一歳のとき、トルストイに手紙を書いて以来、トルストイを通してロシアの魂ともいうべきものに触れ、戦前一九一一年に『トルストイの生涯』を著していたが、トルストイの深い大きな愛への心服によって、ロシア民族、ロシアの民衆に対するいわば愛着を感じていた。ロシア革命に対するロランの共感は、イデオロギーや革命思想によるものではなく、トルストイという鏡に映した鏡像によるものであったと言ってよい。すでに一九〇五年の革命の敗北を知るロランは、『トルストイの生涯』においてこう書いている。

「特にロシア民族はすべての民族の中でも真のキリスト教が浸透した国民であり、したがって来るべき革命はキリスト教の名によって結合と愛の掟を実現すべきである。(……)とところでこの愛の掟は、悪に対する無抵抗の掟にもとづくのでなければ成就されえないのである。」

これはロマン・ロランならではの高邁な革命観である。ロランはこの美しい眼鏡で一九一七年の十月革命を見、これを「新しきヨーロッパ」の出現ととらえ、たとえば一九一九年十月には、『ロシアの兄弟のために——飢餓封鎖に反対して』という一文を『ユマニテ』紙に寄せたのである。彼はそこでこう述べる。

「連合国であるとゲルマン国であると中立国であるとを問わず、ヨーロッパ諸国の結束したブルジョワジーによるロシア革命の鎮圧行動は忌まわしい犯罪である。(……)古びて腐敗した秩序を更新する試みはいずれも押し潰されるであろう、ロシアのわれわれの兄弟の混沌とした、しかも壮大な努力が今日押し潰されているように。しかし、より正しくより人間的な新しい秩序に対する永遠の憧憬は、決して消えないであろう。千回絞め殺されても、それは千一回よみがえるであろう。」

このロシア革命論は、先に見たバルビュスの歴史的必然論ないし共産主義無謬論とは似而非なるものであるが、ともかくこの頃のロランの見方はそうしたもので、そのファシズム観の厳しき、厳密さに比べて、革命観はかなり主観的で、ロマンティックでさえあると言ってよいであろう。

さて、このロシア革命観との関わりで、本論の三つ目のテーマ、インド思想についてここで触れなければならない。ロマン・ロランはなぜ、この時期、インドの思想に深い思い入れを示し、タゴール、ガンジー、ラーマクリシュナ、

あるいはヴィヴェカーナンダについての著書をあらわしたのであろうか。明らかなことは、大戦によってヨーロッパがずたずたになりながらも、なおみずからの力で対立を克服することができず、禍根を残している現実を前にして、ロランが必死に出口を求めていることである。

終戦直後、ロランはアメリカのウィルソン大統領に宛てて公開状を書き、「大統領閣下、こんにち諸国の政治を指導するおそるべき名譽を担っているすべての人びとの中で、ただあなただけが、世界的な道徳的權威を享有しておられます。すべての人があなたを信頼しております」として、「みずからの道を見出そうとし、(……) 模索しているこれら諸国民に助力をいただきたいのです」と、いわば哀願した。しかしアメリカは、モンロー主義の伝統ということか、ヨーロッパから身を退いて国際連盟にも加盟しなかった。

ヨーロッパは自己救済をすることができない——この絶望的ともいえる認識が、ロランにロシア革命の可能性に期待を抱かせたと同時に、もう一つ、非暴力・不服従の思想によってイギリスと戦うインドが、ロランの言葉を引用すれば「ガンジーの遠い星が私の思想の地平線にあらわれ、私は西欧に向かってその光を投射する鏡になろうとしていた」(『闘争の十五年』)のである。

「その数年間、私の精神を支配していた大きな影響は、ガンジーの影響であった。彼に捧げた私の小著は、一九三三年二月に脱稿したばかりであった。」

ロランはいう。「私は、私が愛する人たちのために、われわれの西欧のために、嵐を防ぐにはどういう避難所が、どういう胸壁がよいか探し求めていた。その時、私は、インダスの平原から、弱々しいがしかし不屈なマハトマがうちたてた城砦が立ち現れるのを見た。そして私は、ヨーロッパにその城砦を再建しようと努めたのである。」(同書)

その間の事情をもう少し見ておきたい。タゴールらとの親交などを通して、「私はインド思想の内奥に一層深く入ることができた。私がある所に類似の特質を見出したことは、かなり大きな発見であった。(……) 出獄直後で、重症の治療中であつたガンジーが、一九二四年三月、最初の手紙を私に送つてきた。(……) 私は続く数年の間、西欧におけるガンジーの思想の代弁者となり、彼の論説集『若いインド』のフランス語版の序説で、彼の思想をヨーロッパの社会活動に結びつけようと努めた。」

しかし、とロランは強調する。「どういふ時でも、私はロシア革命の大義と、闘争の中で新しい世界のヘラクレス的建設を見捨てず、また後方に追いやりさえしなかつた。私は水と火を融合させ、インドの思想とモスクワの思想とを調和させるという、逆説的な仕事に献身していた」。そして彼は、『若いインド』の序説においても、こう断言した。「マハトマの非暴力と、その明白な反対者である革命家たちの暴力との隔たりは、この英雄的な不服従と、あらゆる王政のコンクリートでありあらゆる反動のセメントである、永遠の服従者の卑屈な不動心との隔たりよりは小さい」と。

ロランはまた、戦前の苦い思い出に立ち返りつつ語る。「私は先駆者『ジャン・クリストフ』の終わり、戦争勃発の二年前、フランスとドイツが手を結ぶよう懇請した。というのは、この二国は『西欧の二つの翼であり、片方が折れると片方では飛べなくなる』からである。——それと同じように、戦後、私は、ソヴィエト連邦の戦闘的共産主義とガンジーが組織し指導する不服従運動のなかに、革命の二つの大きな翼を見たいと思つた。(……) ソ連とガンジーのインドとの二つの理論は、現在まさに陥ろうとしている破滅から人間世界を引き出すことができる、二つの最も壮大で最も有効な実験、ただ二つの有効な実験であるように思われた。」(同書)

ロランは、そうした願望は少しも実らなかつたと言ふが、しかし、ロシア革命とインドの非暴力・不服従抵抗とを両眼に収めつつ、これら二つの戦いが新しい時代を切り開いていくであろうと期待する、そのような見方をしていた

人が世界に二人といたであろうか。ロランはインドの独立を見ることはできなかったとはいえ、彼の期待の正しさは歴史が証明しているところであり、またロランのこの正しさは、時のイデオロギーや政略論からのタンポレルなものではなく、人間と世界についての深い思索と認識にもとづく普遍的かつ恒常的な正しさであるからこそ、今日なお意味を持ち得ていると言つてよい。

一九三〇年代

一九三〇年代に入つて、経済恐慌、ナチスの政權獲得、ファシズム対反ファシズムの対立の激化、人民戦線の高まり、ソ連への信望とそれへの反動、新たな戦争の危機の顕在化、といった諸状況が相次ぎ、かつ輻輳していく中で、ロマン・ロランの世界認識、言論活動にも変化が表れてくる。

一九三〇年一月、ロランは『パン・ヨーロッパについて』と題する一文を草し、クーデンホーフ・カレルギーの運動である「パン・ヨーロッパ」の名譽会員に推されたがこれを断つたとした上で、カレルギーの「理想主義的無邪気さの後光を著せている誠実な善意にもかかわらず、私は（パン・ヨーロッパ）の衣の下に、あまりにも多くの巨大な利害と未来に対する脅威の敷物を見る」としてこれを警戒し、翻つてソ連の誤りを非難するヨーロッパに対してこう断言する。「当初の大きな夢、剣のように鋭利で純粹なレーニンの思想がぶつかった失敗が、たとえいかなるものであるにせよ——ソ連はつねにヨーロッパの『反動』に対する不可欠の障壁、あらゆる形のもとに西欧の血脈の中に忍び込むファシズムに対する必須の抑止力としてとどまっているのである。」（『闘争の十五年』）

当時、欧米諸国は経済恐慌に見舞われ、とりわけドイツ・ワイマル共和国は、アメリカから流入した資金で賠償金を支払っていた実情であったから、アメリカの恐慌による資金の引き揚げによって経済が急速に危機状態に陥つた。

公務員給与の支払いが困難になり、失業者が増大する中で、とりわけ国粹主義派は恐慌の原因を賠償負担のせいであるとして騒ぎ立てる。そうした状況のもとで一九三〇年九月に行われた総選挙において、ナチ党はそれまでの十二議席から一躍一〇七議席を獲得し、投票総数の一八％に相当する六五〇万票を得票した。ワイマル共和国の崩壊は間もなくである。二年後の一九三二年七月の総選挙では、ナチ党は全体の三七・二％の得票をし、二三〇議席で第一党となる。しかしまだ過半数には達していなかったため、右翼の中央党との連立政府という形で、翌三三年一月、ヒトラーパーベン政府が成立し、ヒトラーは念願の政権獲得を実現したわけであった。

この間の社会状況を見ると、失業者の数が増えるのに比例してナチ党への投票数が増え、三三年のナチ党員は三九〇万人を越え、とりわけ若い世代、十八歳から三十歳までがその四二・七％、三十一歳から四十歳までが二七・二％、合わせるとほぼ七〇％にのぼった。一般に、ヒトラーは当時のドイツ人の価値観や庶民感情の過激な代弁者であったとか、ヒトラー神話の秘密は民衆自身の心の中にあつたと言われるが、特に忘れられないことは、ヒトラーは若い人たちによって支持され、政権を獲得したという事実である。若者が不安定な社会は危険である。政権についたヒトラーが、その後ただちに憲法の基本的人権を停止したり、あるいは全権委任法を通して政党政治を崩壊させ、ナチ党を唯一の合法政党としたことなど、第三帝国のいわゆる国民革命が始まることはここに改めるまでもない。

ロマン・ロランは、当時『ヨーロッパ』の編集長であつたジャン・ゲエノ Jean Guéhenno (一八九〇—一九七八)に、次のような手紙を書いている。

「『ヨーロッパ』誌がドイツの諸事件に決して無関心にならず、ヒトラーのファシズムの、とりわけ自由思想や知識人に対する未曾有の暴行に対抗するイニシアチヴをとることが不可欠であると私には思われます。」

そしてロランは、その手紙を書いた翌日、すなわち一九三三年三月二日付の論説、『ヒトラーのファシズムに抗して』を手始めに、矢継ぎ早におよそ二十篇のファシズム批判を『ヨーロッパ』に掲載した。前記表題の論説はこういうものである

「褐色のベストが初手から黒色のベストを凌駕した。ヒトラーのファシズムは、数週間のうちに、その師であり手本であるイタリアのファシズムが十年間かけてした以上の、卑劣な暴力を積み重ねた。(……) われわれは世界の世論に、これらの陰謀、これらの虚偽を告発する。すなわち、——暴力的反動の一派派の手中に収められたすべての公権力、——あらかじめ犯罪とするあらゆる公的な承認、——息の根を止められた一切の言論と思想の自由、——各種のアカデミーにまで政治が傲慢に干渉し、自己の意見を守る勇氣を持ったまれな作家や芸術家を追放した事実、——革命的諸党派のみならず、社会主義者やブルジョワ自由主義者のもっとも思慮深い人びとの逮捕、——ドイツ全土にわたる戒厳令の施行、——近代文明すべての基盤である基本的な自由と権利の停止である。」

ロランはまた、ケルンの新聞がロランについて取り上げたことに関して、こう反問した。

「私がドイツを愛していること、そして私は外国の不正や無理解に対して絶えずドイツを擁護してきたこと、それは確かな事実です。しかし、私の愛するドイツ、私の精神を培ってくれたドイツは、偉大な世界市民のドイツ、——他民族の幸福や不幸を自国民の不幸として感じとった人たちの、——そしてさまざまな人種や精神の交わり（コミュニオン）のために働いた人びとのドイツなのです。」

そのようなドイツは、今日の《国家的》政府により、鉤十字のドイツによって、踏みにじられ、血まみれにされ、侮辱されているのです。この鉤十字のドイツは、自由主義精神、ヨーロッパ人、平和主義者、イスラエル人、社会主義者、「労働のインターナショナル」を樹立しようとする共産主義者を外へ排除しているのです。——この《ナショナル・ファシスト》のドイツが真のドイツの最悪の敵であること、——このドイツが真のドイツを破壊させていることが、どうしてあなた方には分からないのでしょうか。(……) あなた方は、ドイツに対する陰謀について語るほうを好んでおられる。あなた方に対して陰謀をたくらんでいるのは、あなた方、あなた方自身、ただあなた方だけなのです。(一九三三年五月十四日)

自国に対する陰謀を語るほうを好む、というのは、言論の自由を失っている国か、あるいは他国の自由を尊重しない国かの通弊であろうが、ロランは、偉大なコスモポリタンの国ドイツがそうした有様になったことを憂えつつも、彼が信じる真のドイツへの愛着を抱き続けると述べるのであった。

ファシズムとの闘い

こうして次々と発せられるロランの批判の矢は、すでに六十代の後半に入ってしまったかも知れぬ病気がちのロランの決意のほどを示しているが、それは「ファシズムとわれわれの間には、死闘あるのみ！」(三四年二月十日)という言葉が示すように、第一次大戦時の「戦いを超えて」という立場とは異なるものであることを明らかにしていた。

ここで想起されるのは、バートランド・ラッセルの場合である。よく知られているように、ラッセルも第一次大戦に反対して平和主義の立場を貫き通したが、ナチズムを批判して第二次大戦は支持した。これには当然、二つの大戦

の原因や経緯、ひいては本質の違いが関係しているわけであるが、ここではその問題に深く立ち入ることは控えたい。ただ、ロランにせよラッセルにせよ、先の大戦は理性的に考えて、双方に正義も正当な理由もなく、まさしく帝国主義的な利害得失の争いであるとして反対した。少なくともその争いは政治的に解決されるべきであった。理性とヒューマニズムの立場を貫くことからは、そうした考えが導かれるであろう。両者ともに、ナショナリズムという感情の操作から超脱しえた存在であった。

しかし、ファシズムとなれば、これは理性とヒューマニズムの立場ゆえに、単に客観視しえない、打倒すべき対象に違いなかった。ロランのファシズム観はこういうものである。

「ファシズムは、資本主義的反動の最後の痙攣——おそらくは致命的な痙攣である。国家とその政治的生命に害毒を伝染させている腐りつつある政体のあらゆる病原体——帝国主義、国家主義、人種主義、植民地の犯罪行為、国際的財界による労働界の搾取、いかがわしい利権あさりのあらゆる巨大な形態、墮落したブルジョワ的知能がドゥーチェやフューラーたちに捧げている高慢と隷従のあらゆるイデオロギー的痴呆化、これらが何倍もの力で活動しているのである……」（『パリの民衆に訴える』二月六日のファシスト暴動ののちに）

これが書かれたのは一九三四年であるが、ロランはおそらく、レーニンの著名な『帝国主義論』を読んでいたであろう。レーニンと同様、彼も資本主義の最終段階としての帝国主義という見解をとり、その特徴としての独占、そのイデオロギーの形態としてのファシズムの特質である全体主義、議会政治の否定、一党独裁、市民的・政治的自由の抑圧、対外的侵略政策、さらにはもっぱら感情に訴える国粹的思想といった要素をやや文学的な表現によって指摘している。そして『魅せられたる魂』の後半、『予告する者』には、そうした見解が示されていることを読者は知って

いよう。アンガージュマンの文学としての『魅せられたる魂』は、ファシズムとの闘いでもあったのである。

ロマン・ロランのファシズムとの闘いは、論説集『革命によって平和を』*Par la Révolution, la Paix*（一九三五）にまとめられているが、このタイトルに端的に示されているように、ロランは「闘争し建設する革命的平和主義」というアクティヴな姿勢で、実際に体を運ぶことはないとしても、数々の運動に参画していった。一九三二年四月、バルビュスが「戦争に反対する全党派世界大会」の計画をロランに持ちかけ、その発起委員会に加わるよう求めたことから、アムステルダム＝ブレイエル運動が始まる。ロランは、終戦直後に、バルビュスから、行動しない純粹モラリストとしてロランデイストと批判されたが、いまやあの時はバルビュスが正しかったとして、積極的に共同歩調をとった。こうして二人の署名によるアピールが発せられ、八月二十七日から三日間、アムステルダムに三十八カ国から二、一九六名の参加者を得て開かれたのが「世界反戦会議」である。これには、注目すべきことにドイツからの出席者が最も多い七五九名に達し、ナチ党が第一党に躍進した直後という時期に、そのドイツの労働者や政治家が大挙して反戦・平和の意思表示に馳せ参じたのであった。

ここで『アムステルダム会議の宣言』が採択されたが、それは、一九一四年の苦い経験を忘れるべきではないこと、報復的なヴェルサイユ条約が国際的不和とドイツ・ファシズムを助長した元凶であること、国際連盟は帝国主義列強の力の発現の場に過ぎないことを挙げ、いまや帝国主義は資本主義体制から発生した経済危機を武力闘争に変貌させつつあり、それは各植民地や中国大陸で現実のものとなって、いずれはソヴィエト連邦を共通の敵とするであろうことを指摘し、「帝国主義戦争が全世界に波及しないとはいえない」と警鐘を鳴らした。

この宣言はロマン・ロランの筆になるものであった。そしてロランは、このメッセージは執筆中の『魅せられたる魂』の「プログラムそのもの」であったと言っているのである。

こうして始まった「世界反戦会議」の第二回会議がパリのブレイエル会館で開催されたことから、以後、アムステ

ルダム・ブレイエル運動と呼ばれることになるが、この運動が次の革命作家芸術家協会を中心とする文化運動と相まって、フランスでは「人民戦線」の大きな推進力となり、ファシズムを阻止することに成功する事實は、歴史に刻印されて忘れられないであろう。

ロランと革命作家芸術家協会

革命作家芸術家協会 Association des écrivains et des artistes révolutionnaires (略称 A.E.A.R.) は、一九三〇年十一月、ウクライナ共和国の首都ハリコフで、第二回国際プロレタリア・革命作家会議が開かれ、その時の決議によって、国際革命作家同盟フランス支部として、一九三二年三月に結成されたものである。

協会は、翌三三年七月、機関誌『コミュニヌ Commune』を創刊したが、その監修委員会に名を連ねているのは、アンリ・バルビュス、アンドレ・ジッド、ロマン・ロラン、ポール・ヴァイアン・クーチュリエの四名、そして編集主幹はルイ・アラゴンとポール・ニザンの二名である。この雑誌は月刊で、一九三九年九月まで、つまり第二次大戦が勃発するまで発行されるが、監修委員ないし編集主幹として、最初から最後まで名をとどめるのはロランとアラゴンの二人だけである。

ロランはこの雑誌に、不定期に文章を載せているが、注目すべきものは、一九三五年五月の第二一号に掲載された『今日の社会における作家の役割について』という一文である。

ロランはここで、作家の役割について語るには、まず「作家が現在いかなる条件の下に生活し、行動し、かつ創作しなければならぬか」ということを決定することであると述べ、現在は「文明全体、人類が、激しい変化の状態、——戦争の状態にある」として、「それゆえわれわれに課された真の問題は」、「戦争状態の社会における芸術家の役

割について」というものであると言う。

「われわれは運命によって大きな闘争のさなかに生まれたのです。われわれがその闘争から遊離することは許されません」。それが今日の作家・芸術家が置かれた条件である。だが、「芸術家の大多数はまさに闘争から身をひいています。そしてそのことを誇り高い精神の道義であるとし、また当然に身をひく特権のある芸術の使命（誰から授かったものか？）であるとしています。もっともらしい理由にはこと欠きません。真の芸術家には、自己の内面の世界に沈潜する権利があり、また義務があるという言い分に対して、誰も異議を申し立てずにはいません。（……）しかし、その場合に真の芸術家にとって大切なことは、内面の世界に閉じこもったまま再び出でず、自分だけ安全な場所に身を避けているということではなく、その内面の世界から新しい力を汲みとって、次には行動の世界へと立ち戻らねばならないということなのです。ところが今日の西欧では、非常に多くの芸術家たちが、あらゆる手段をつくし、あらゆる口実を設けて、そのことから逃れようとしているのです。精神の独立とか、唯美主義とか、作家の品位とか、永遠なる芸術とか、芸術自体とか——鎖を引きずって媚びへつらう奴隷のいろいろな玩弄物が大手を振っています。云々」

明らかなように、ロマン・ロランはファシズムとの闘いととも——加齢とは反比例して——アンガージュマンの旗幟を鮮明にしてきた。そして、しかし、この時代には、ひとりロマン・ロランのみならず、あるいはフランスの作家のみならず、世界の多くの作家・芸術家が同じような危機意識を抱き、こうした問題にぶつからざるを得なかったわけで、ロランはその先駆者であったとすべきであろう。

革命作家芸術家協会は、一九三五年六月、パリで、三十八カ国から二三〇名の作家らが参加した文化擁護作家会議

を開催した。「われわれ作家有志は、幾多の国々で文化を脅かしている危機に直面し、文化擁護の手段を検討し討議するための会議を開催することを提唱する」というのがその趣旨であったが、そこでは、文化遺産、ヒューマニズム、民族と文化、個人、思想の尊厳、社会における作家の役割、文学創造、文化擁護のための作家の行動、という八項目のテーマが論じられた。いずれも時の現実と対峙することなしにはすまされない喫緊の諸問題であり、五日間にわたった会議では、ナチ・ドイツから亡命した作家らも交えて、危機感に充ちた白熱の論議が展開された。

ロマン・ロランはこの会議に参加しなかったが、開会の冒頭に彼の電文によるメッセージが読まれ、また幹部会員に選出されるなど、その存在は重きをなしていた。なお、この会議から、文化擁護国際作家会議が誕生し、一九三七年七月には、スペイン戦争さなかのマドリッドとバレンシアにおいて第二回会議を開催し、人民戦線擁護に立ったほか、国際義勇軍を組織する一翼を担ったことも特筆しておかなければならない。

ロランのソヴィエト旅行

最後に、ロマン・ロランの一九三五年のソ連訪問について触れておきたい。

ロランは、すでに一九二七年に、ソ連から十月革命十周年記念の祝祭に国賓として招かれていたが、その際は健康上の理由で訪ソが実現しなかった。その後も、作家ゴリーキーの招きが何度かあったようであるが、この一九三五年、六十九歳の年に、六月から七月にかけてのおよそ一カ月間、ソ連を訪れることになった。この訪ソは、ゴリーキーの招きという形であったが、ロランの希望でスターリンとの会談がセットされ、なかば公式訪問というべきものであった。

この訪問に関連して、まず二つのことを見ておく必要がある。その一つは当時の仏ソ関係であり、他の一つはソ

連の政権周辺の事情である。

一九三三年のヒトラー政権の成立は、フランスとソ連の接近を促した。ナチ・ドイツの再軍備の要求を拒否したフランス政府は（すでに三二年十一月に仏ソ不可侵条約が結ばれていたが）、三四年九月にソ連の国際連盟への加盟を支援し、また三五年五月には仏ソ相互援助条約を締結した。外相ラヴァルは同月十三日に訪ソし、スターリンら首脳と会談して友好関係を確認し合ったが、明るる六月二十三日にモスクワ入りしたロランの訪問は、そうした仏ソ関係の雰囲気の中でなされたのであった。

だが、他方、当時のソ連政権の内外では、容易ならぬ権力闘争が陰に陽に進行しつつあった。三四年十二月に起きたレニングラード・ソヴィエト議長キーロフ暗殺事件を契機として、三六年に本格的に始まるいわゆるモスクワ裁判で裁かれる一連の「反革命陰謀」は、ロランの訪ソ時にはまだ一般には明らかではなかったと思われるが、しかしロランは滞在中にそうした事態を徐々に認識したと見受けられる。

ところでこの旅行には、スイスでロランの秘書を務めているロシア人のマリイ（マリイヤ）・クーダチェヴァが、ロシアで生活している息子のセルゲイに会いに行くなどの私的な目的もあった。実はロランは、一年前の三四年四月、二十九歳年下のマリイと結婚しており、ロラン夫人となったマリイはフランス国籍を取得していたが、一九二二年に彼女が初めてロランに手紙を書いて以来の文通に始まる両者の関係は、いくらか機微に触れるところがあって、簡明ではない。

ここで必要な限りをいえば、文通を始めてから七年後の一九二九年八月、マリイはロランに招かれ、ゴーリキーの仲介でパスポートを入手して初めてスイスを訪れた。それから二度の短い滞在を経て、マリイは三一年八月からロランのもとで秘書として居住したのである。ロランは同じ月、「ソ連の友の会フランス支部」の名誉会長を引き受けているが、彼のソ連への共感と支持はマリイを得ていよいよ熱烈となり、『魅せられたる魂』に登場するアーシャ（亡

命ロシア人でマルクの妻となる）には、マリイ（ロランは彼女をマーシャと呼んだ）の面影や思想が投影されている。そして、他方、ロランの周辺では、マリイはクレムリンの「使命」を帯びていると断ずる向きさえあって（デュアメル、イストラティ、ギルポーら）、ロランはこれらに対してイストラティと絶交するなどの対抗措置もとらなければならなかった。

ともあれ、そうした重任をも背負ったロラン夫妻は、一九三五年六月十七日、スイスを出発し、ウイーン、ワルシャワを経て六日後にモスクワに着いた。老体にはやや苛酷な鉄道の旅であった。それからの一週間、ロランはモスクワに滞在し、その間にスターリンとの会見などの日程をこなしたのち、郊外のゴリキーの別荘に移って、七月二十一日まで多忙な日々を過ごした。

その間の日常は『モスクワ紀行』*Voyage à Moscou*に克明に記述されているが、この旅行の歴史的な意義は、ロランにとっては、西欧の作家・知識人として長年熱い眼差しを向けてきたロシアの地を初めて訪れ、自分自身の目で、革命を経たソ連とその国民を見たことである。そしてとりわけソ連の最高指導者スターリンと会見し、その人間とじかに接したことは、理念的になりがちなソ連観をただすためにも有益であったろう。

翻って、ソ連もしくはスターリンにとっては、社会主義国家として躍進しつつあると同時に、反体制勢力が台頭する難局にある時、西欧の高名な同伴者が訪れてソ連を称えてくれることは、何ものにも代えがたい慈雨であった。会見の冒頭、スターリンは、「世界で最も偉大な作家とお話することができて光栄です」と挨拶したが、それは真情であつたらう。

これに対して、ロマン・ロランは次のように応じた。「私の健康が許さず、もっと早くこの偉大な新しい世界を訪れることができなかつたことが大変に残念です。貴国は私たち全体の誇りであり、私たちは貴国に希望を託してまいりました。もしお許しただけますれば、私はソヴェト連邦の古くからの友人であり同伴者であるという二重の資

格において、また西欧の証人、フランスの青少年やシンバサイザーのオブザーバー、親友として、あなたとお話させていたきたく存じます。」

こうして始められた二時間にわたる会談は、国際的な経済危機、道徳的危機から、ソ連のキーロフ事件や裁判などの国内問題に及び、またマルクス・エンゲルスの理論へと展開されたが、総じてロランの問いにスターリンが答える形で、率直な対話に終始し、兩人ともに満足した様子が窺われる。ロランはとりわけ、ソ連の政治が公開性に欠け、そのことが西欧諸国に誤解や疑念をもたらしかねないことを指摘したが、スターリンは、キーロフ事件を詳しく説明しつつ、国内外のテロリスト集団がソ連政権の打倒をめざしてさまざまに暗躍していること、ツァー時代の残滓の存在は傍目と思うほど簡単なものではないことを挙げ、それぞれの国に固有の条件があるとして理解を求めた。そして彼は、ソ連は世界の資本主義諸国に存在する二つの体制、すなわち自由民主主義諸国とファシズム諸国とのうち、前者と連携して後者とは対決していくとして、最近の仏ソ相互援助条約の締結を説明した。

ロランは、その日の日記に、スターリンは写真とは違ふと記し、「絶えずまっすぐな力強い視線を向け、謎めいた微笑をたたえている」が、その微笑は真心のこもったものか、あるいは冷淡さか、うかがい知れないところがあるとし、しかし「気さくな男」で、しかも自制心を失うことがないと、その人柄に複雑な強い印象を受けたことを書きとめている。

その後、ロランはゴリキキーと対面し、ソ連を代表する作家に国家から貸与されていた郊外の別荘へ案内され、そこで二十日ほど滞在した。ここでは、ソ連の多くの作家や政治家の訪問を受け、対話や意見交換をしているが、ロランは疲労のために休養を余儀なくされたほどであった。

そしてまた、ここでは、いまやマリー・ロランとなった妻の息子夫妻との出会いがあり、ロランは初めて義父の立場に置かれることになった（こうしてロシア人の身内を持ったことが、この先、ロランの言論活動に多少とも掣肘を

加えることになる事實は、いずれ明らかにされよう。

このように内容の詰まった四十日間ほどのモスクワ旅行は、単にロラン個人の思い出にとどまるものではなく、いわば歴史的な出来事として正確に再認識されるべきである。この翌年、すなわち一九三六年六月、おなじくソヴィエトを訪問したアンドレ・ジッドの旅行記『ソヴィエト紀行』（一九三六）と『わがソヴィエト紀行修正』（一九三七）が世に喧伝されたのは、ジッドの文学的・思想的問題もさることながら、何よりも彼がソ連に失望し、そのことを率直に書いたからであった。それに引きかえ、ロランの場合は、ソ連擁護の先入観ゆえであろうか、その証言の貴重さにもかかわらず、長らく世に問われることもなかった。

さて、ジッドのソ連訪問は、ゴリキーの葬儀に遭遇することとなったが、その死を悼む哀切きわまりない弔辞を『ヨーロッパ』に載せたロランも、モスクワ裁判の進行につれてさまざまな事実を知り、やがてゴリキーの死も暗殺であったことを認めざるを得なくなる。この頃からのロランの世界認識や心情については、いまだ公刊されていない『日記』を披見することなしには、正しくは分からないとすべきであるが、しかし研究者によってすでに明らかにされている部分もあり、また紙誌に公表されている文章から推して、ロランがなお決して絶望せず、その理性の光と理想の炎を輝かせていることは確信できる。「私が擁護しているのはスターリンではない。それはソ連なのだ。」（一九三七年十二月の日記。『モスクワ紀行』序文でのベルナル・デュシャトレ氏の引用による）という言葉は、それを物語って余りある。

だが、しかし、ヨーロッパ内外の情勢は、スペイン戦争、フランス人民戦線の崩壊、ミュンヘン協定、そして一九三九年八月の独ソ不可侵条約締結へと、平和と希望を打ち砕きつつ、人びとの願いを裏切っていく。そうして同年九月三日、第二次世界大戦の勃発である。

ロマン・ロランは、その日、ダラディエ首相への公開状を書いた。

「フランス共和国が、全ヨーロッパに押し寄せるヒトラーの暴政の行く手をさえぎるために立ち上がった、この決定的な日々に、——これまででもつねに第三帝国の野蠻、不実、狂った野望を告発した、老いた平和の闘士にお許しいただき、——今日危機に瀕しているフランスと世界の民主主義の大義に対する全面的な献身を、あなたに表明させていただきます。」

こうして兩大戦間という時代が果てた日に、七十三歳にしてこのようなペンを握ったのは、ロマン・ロランその人の運命であったかと考えさせられるのである。

(関東学院大学大学院教授・仏文学)

『最後の扉の敷居で』から 6

村上光彦

『最後の扉の敷居で』は、資料三十一から一九四二年に入る。極東では、日本軍の東南アジアでの《緒戦の勝利》に、国民こそぞっていい気になっていた時期だ。なぜか、この本には太平洋戦争への言及がない。推測でしかないが、真珠湾奇襲の報道を知ったとき、ロランは日本に落胆を覚えたことだろう。落胆といえ、ロランはその晩年にいたって、落胆の苦杯を飲みつづけていたのだった。彼は苦渋のあまり、日記帳にたいしてさえ、日本への思いを書きつける気になれなかったのかもしれない。あるいは、今後研究が進めば、貴重な証言が発掘されるのだろうか。

だが、ロランはアジアそのものへの関心をなくしたわけではない。資料三十一は、ロランが妹のマドレーヌに書き送った、一九四二年一月八日付の手紙の抜粋だ。ロランはそのなかで、『両世界評論』誌の一九三九年三月および四月に掲載された、ゴワヨー神父による教皇ピオ十一世をめぐる論考について感想を述べている。ピオ十一世は、信じられないほどの数の布教団を組織し、アジアおよびアフリカ諸国に派遣した。そのさい教皇はそれらの国に、できるだけ速やかに現地人の独立した聖職者を育成させ、自前の司教や修道院を持たせようとした。しかも、それぞれの国の伝統があり、祭儀さえもある固有の土壌に、カトリック教会の新しい枝が伸びてゆくようにした、というのだ。「彼は古い国である中国と、そのもろもろの美德にたいし、敬意のこもった高邁なメッセージを送りさえしたのだよ。――ほくは若い修道士たちや、《異教徒》にかんする最近の数々の書物のうちに、これまでにない広やかな精神が見

られるのに気づいたのだが、以上のことはその点とも関係している」。

資料三十には「へわたしの告白」もしくは、わたしの「へわたしはなにを信ずるか」と題された、一九四二年一月十九日付の覚え書きだ。この資料は、ロマン・ロランの晩年の思念のありどころを知るうえで、またとなく重要な文章といつてよい。

「わたしたちは十二分の十一まで目に見えない世界に生きている」と、彼は書き起こしている。なぜなら「十二オクターヴの鍵盤上、赤外線の見えないスペクトルが八オクターヴあまり、紫外線の目に見えないスペクトルが三オクターヴを占めている」からだ。残りは一オクターヴに満たないこととなる。

可視・不可視の問題からさらに進んで、彼は魂の認識に移る。「暗闇が魂の世界に充滿しているというのに、わたしたちに命令を下す目に見えない〈現存〉を見定めようにも、わたしたちは諸世紀を通じて人々の魂を導いてきた、もろもろの重力および圧力に頼るほかないありさまなのだ」。

ここで《諸世紀を通じて人々の魂を導いてきた、もろもろの重力および圧力》と語ったとき、ロランは人間の覚醒した意識による統御の届かない領域、つまりフロイト的な無意識の世界を念頭に置いていたのではなからうか。「魅せられたる魂」を読み直すなら、ロランにおける無意識の役割の重要性がわかってくるはずだ。つぎの段落で用いられている《引力と斥力》なるものも、この《重力および圧力》と関連しているのだろう。さて、ロランは覚え書きを続けてこう述べている。

「われわれにとって、理性はもっとも確実な道具なのだ。——それは奇跡的な道具であって、科学はこれを用いることで、近づきようのないものに近づくことも、また二つの無限〔極大方向の無限と極小方向の無限〕の深

淵の奥底を目に頼らずに読み取ることさえも、可能となったのだ。しかも魂は（そしてその歴史は）引力および斥力に引き渡されている。そうであつてみれば、この二通りの力のじつに膨大な領野を調査する作業に従事することを理性にたいして拒否したりするのは、理性を放棄することといえるのではなからうか」

ロランはさらに思考を進める。このあたり、直訳するとわけのわからない文章になりそうだ。引力と斥力との領野の調査といった研究は、目的原因説（世界の進行は目的によって決定されており、したがって自然および歴史のなかに現出することはすべて、理にかなつた目的を有する、という哲学説）を科学のなかに組み入れ直すことになつてしまふのではないか。ところで、科学は目的原因説に与することを恥としている。それというのも科学は経験的帰納法と結びついているのであつて、近いところから順次、原因の連鎖を遡つてゆくものなのだから。だがロランは、科学が目的原因説と無縁ではありえないのではないかと疑っているらしい。彼はこう語る。

「しかし科学は、こつそりと目的因に助力を求めているのではないのか。科学が重大な仮説に頼るときがそうなのだ。それらの重大な仮説は、結果から原因への緩慢な登攀に先行し、それを眼下に見下ろしたものだと思はれてゐるからだ。そしてケプラーとかニュートンとかいう偉大な学者は、精神世界も物理世界も同じことで、双方の世界の大きな謎を解く鍵を回す仮説は同一物だと知覚していたのではなからうか。すなわち、同じひとつの太陽を中心とする重力と、その諸法則、とみなしていたのではなからうか。

仮説は自分の道を進み続けるための助けでしかない。仮説は一時的性格のものであつて、より有能な助けが現れたらいつでも席を譲る準備がある。そのことは、けつして忘れないほうがよい。しかし、それらの相対的説明はそれぞれ、たとえ用を足したあとで席を譲るにしても、けつして虚偽だと判明するわけでなく、ただ不完全だ

とわかるだけのことだ。それぞれの仮説が、真実の一端を保持しているのだ。そして真実は、螺旋状の星雲のようになり、宇宙空間に突入して逃げてゆく。それにしても、目でそのあとを追おうとしても、その本体に追いつくことはおそらくできてない。だが、その痕跡には追いつけるから、たとえその本体が消え失せたあとであっても、それは現存していた、と確言できるのだ。

われわれのいのちは〈相対性〉のしるしのもとに展開してきた。われわれは衰くずのように、〈相対性〉の洪水に運び去られてしまった。われわれはそのなかで溺れそうになり、足が水底に着かなくて息がつまりかけていた。ところが、そのなかで生きるのに——漂ってゆくの——慣れてくるにつれて、われわれはこういうことを発見するのだ。つまり〈相対的なもの〉は——たとえそれが普遍的に広がっていようと——自分で勝手にそう思っているほどは絶対性を損ねているわけではない。相対的なものと無とを比べたらどうだろうか。物差しはどこにあるのか。精神のなかにか。精神が測定する宇宙のなかには、いったい精神のなかに以上のものであるのだろうか。精神はこの目立たない力をどこからもらい受けることができるのか。人間の精神は、なんらかの絶対性に支えられるのでなかったら、一歩たりとも前へ進み出ることができないだろう。しかも、絶対性は精神から擦り抜けてゆく。ところが、精神は絶対性からはけって擦り抜けるわけにいかない。両者間には階層制度があるのだとも言えそう。人間は相対的なものにたいしてしか支配力を振るえない。人間は絶対性に支配されている」。

「それにしても、人間にはみずからを把持するもの——その初源——まで遡る手段があるのだろうか。

啓示された〈信仰〉とは、まるきり信用状を持たずに家に入り込んでくる麗しの外国女のような。それという

のも、彼女はなにか書かれた文章を支えとしてはいるが、その文章自体が信用状を必要とするものだからだ。そしてその文章には信用状がない「信仰は聖書を根拠としているが、その聖書の絶対性を保証するものはない、という意味」。その文章は、それ自身——その声、その信仰——以外のなものも不要だという。その麗しの外国女は、われわれの愛を勝ちとることならでき。——しかし、わたしの信頼を勝ちとれるのか。愛は真実を保証してはいない。もしかすると、真実とは正反対なのかもしれない。そういうものが相手だと、わたしは疑念をかき立てられかねない。——わたしは承知しているが、こういうのはローエングリンに非難される考え方だ。目隠しされた古代的〈愛〉の教理だ。——だが、わたしが目を受け取ったのは、いったいなせだろうか。

《Zum Sehen geboren...》 [「見るために生まれて」] *

*ゲート「ファウスト」第二部第五幕「深夜」の冒頭から。

参考「望楼守（城の望楼にありて歌ふ）」

物見に生れて、／物見をせいと言ひ附けられて、／塔に此身を委ねてゐれば、／まあ、世の中の面白いこと。／遠くも見れば、／近くも見ると。／月と星とを見る。／森と鹿とを見る。／万物を永遠なる／飾として見る。／そして総てが己に氣に入るやうに、／己自身も己に氣に入る。／幸ある我目よ。／これまで見た程の物は、／何がなんと云つても、／兎に角皆美しかつた」〔森鷗外訳〕。

「麗しの外国女」を異邦の女性とは思わない男女が西欧には大勢いる。彼らはすでに子どもものころに、家の

なかで彼女を見つけたのだ。彼女は父母にとって昔なじみの友だちだった。それに、父母の父母にとってもそうだった。彼女は住まいの守護聖女だった。彼らは彼女の膝に乗って育ったのだ。それだからこそ、彼女を疑ってかかることなど、彼らは思いつきもしなかった。彼女は家族の一員だった。彼女を擁護し、彼女を尊ぶことに、家族の名譽をかけたのだ。

ところがわたしのばあい、同じふうには行かなかったのはなぜだろうか。わたしは母を愛していたし、母の感受性からじつに豊かなものを——そして音楽も——受け継いだのだった。わたしが信仰をも受け継がなかったのはどういうわけだったのか。信仰は母を守って絶望に陥らせなかったのに。わたしは、信ずるのをやめようとなにかをしたわけではない。信じようとして、どんなことでもしたのだ。わたしは信じなかった。畏れからも、希望からも、わたしは信じたいと願った。わたしは信じなかった。わけもわからずに、尊敬心から、わたしはミサ典書を読んだ。尊敬をこめ、哀れみをこめて、わたしは〈受難〉についての福音書を読んだ。わたしは悲傷の〈人〉「キリスト」に向かつて、哀れみを覚え、優しさをいだいた。しかし、あの方が〈神〉だと、皆からそう言われたし、自分でも素直に議論しないで、心のなかでそう繰り返した。だが、そう感じたことはついぞなかった。〈神〉でありながら、三位一体「父と子と精霊とが一体」を保ちながら、人として化肉けいじくしたこの〈神〉となると、ついぞわたしの思念のなかに入り込んだことがなかった。信仰の土台をなす秘儀ともなると、なおのこと、そのどれひとつとして入り込んでこなかった。いかにもそれらの秘儀は、最初の敷居、つまり詩的・形而上学的敷居をたしかに越えて出ていた。——そしてこの形をした秘儀にしても、もつとのちになって、その深遠さや美しさに感嘆することができるようになった。しかし、第二の扉、すなわち *«adsum»* 「わたしはおります」という扉のところまで止まってしまった。美しさか、それとも奥深さか。問題はまさしくそこにある！……「わたしはおります」両者のあいだはもろもろの世界で隔てられている。両者は同じ実質でできているのではない。そう

でなかったら、わたしはフィディアス〔紀元前五世紀のギリシアの彫刻家。古代ギリシア最大の彫刻家と見なされている〕のプロメテウスなり（処女たち）なりを信じないわけがなかっただろう。これらの美しい宗教的神話のなかに、生きている（神）との赤裸の燃えるような接触をわたしに与えてくれる者が、だれかいるだろうか。

生きている（神）。そう、わたしは一度ならず、その（神）との火と燃える接触を受けとったことがある。——それは、あのいくつかの（閃光）『内面の旅路』第二章「三つの閃光」参照〕体験のいずれかにおいてだ。わたしはそれを物語ろうと努めたことがある。——しかし、聖書の（神）を介してそういう接触を受けとったことは絶えてなかった。（神）のもとへ行くには、それはよからぬ道なのだ。聖書の語る物語は、そのひとつとして信仰の場ではない。「……」相対性と可能性とに関わることでしかない。——蓋然性の極限まで近づけることがあるとも。だが、その極限から確信までは、まだ遠く隔たっている。物語で読んだところで、確信できることとして受け入れる気にはなれない。なぜかというところ、そこには魂の生死に関わることがないからだ。ところで、信仰がある場では、生と死とが問題になるのだ。

わたしが深淵のまえに立って覚える心細さや恐怖をあてにしている人たちは、まさにその場でわたしを待ち受けている。彼らはわたしに言うだろう。——『渡り板を出してあげますよ、いいから渡りなさい』。

わたしはその気になれない。恐怖から（神）を信じたりしたら、神聖な（事柄）への、また（神）への敬虔と尊敬とが欠如していることを示す、最悪のしるしとなってしまおう。愛なり認識なりによって（神）を信ずるか、そうでなければ『いいえ！』と言うがよい。わたしは（主）に気に入られたくて嘘をついたりほしくない。

〈主〉がいるとしたら、また〈主〉がわたしを作ったのだとしたら、嘘をついたりしたら〈主〉を裏切ることとなる。わたしは自分の受けとった守則を忠実に守る。——（もし〈彼〉から受けとったのではないとしたら、〈彼〉より偉大なほかのいかなる〈神〉から受けとったのだろうか。）——たとえわたしが〈彼〉を誤解したのだとしても、わたしは自分にできることをなし、自分のなすべきことをなしたのだ。《Ich kann nicht anders...》「わたしにはほかのことはなにもできない」わたしは自分がそうである以外の者にはなれない。

一九四二年五月十日「おそらく、この文章を書き終えた日」

資料三十三は、ロマン・ロランから妹のマドレーヌにあてた、一九四二年三月十二日付の手紙だ。ロランはそのなかで、ある若いドミニコ会修道士「この本の資料—その他に出てくるビシャル神父のことらしい」のよこした手紙について語っている。

「キリストを十字架にかけた者たち、つまり死刑執行人の下僕たちさえ、もし良心的に職務を行ったのであれば、救われる資格を確実にわがものにできるといふのだ。すてきすぎるほどの話だから、〈教会〉が人類とのあいだで締結した協定がずっと有効で、公的に批准されているものと、信頼する気になれそうだ」。

資料三十四は、ミシュル・ド・バイユレ神父からロマン・ロランあての、一九四二年四月七日付の手紙だ。その前月、ロランがド・バイユレ神父に『内面の旅路』を送ったので礼状をよこしたのだ。神父はその手紙のなかで、この新著にはロランが『ジャン・クリストフ』において提示した重大問題が見いだされるとして、さらにこう続ける。

「これらの問題の解決はともかくとして、その提示の仕方そのものに、先生とキリスト教的思考——その光り輝く鮮明さにおいても、また〈秘儀〉の受容の仕方においても——とを隔てているすべてのことが目に映るのは確かです。しかもなお、そこにはさらにいっそう見えてくることがあります。すなわち、なにがどうあろうと、先生がキリスト教的態度とごく親近である所以が、です。それは、先生が冒頭の数ページで早くも明確に語っておられる、あの〈生〉への情熱なのです」。

「……」先生のために〈いのちの主〉にお祈り申し上げても、またもしお許しただけでしたら、恭しい友情の気持ちを申し上げてもよろしゅうございましょうか」。

神父は追伸中でこう付け加えている。「奥様からお聞き及びの通り、わたしはクロードに会い、先生に幾重にもよろしくとの言つてを言いつかりました。クロードは、状況とご自分の孤立とに苦しい思いをしておいでです。わたしとたっぷり二時間話し合うことができて、氏は喜ばれたことと思えます」。

ロマン・ロランは一九四二年四月十二日付のド・パイユレ神父あての手紙（資料三十五）で、神父のこの手紙に答えている。

「そうですとも、〈いのちの主〉に、わたしのために祈ってください。『わたしが来たのは、彼らが「羊が」命を受けるため、しかも豊かに受けるためである』〔ド・パイユレ神父がロランにあてた手紙に引用されていた聖句、「ヨハネによる福音書」第十章第十節〕というその美しいことはどこにあるのですか」。

わたしはしばしば主に祈りました。——それも人格的な形のもとに。——ところが主は、非人格的な形のもと

でしか、ついぞわたしに答えてはくありませんでした。わたしは生涯をつうじて、その非人格的な形に包まれたのです。まるで空か、それとも光の大海原に包まれるように。それはわたしのまわりを流れ、すべてを満たすのですが、でもわたしはそれを掴めないのです。ただそれだけが実在するのだと、わたしは盲目的に感じとります。そしてわたしが実在していることが疑わしくなり、わたしはそのなかで溺れそうになるのです。わたしが存在し、行動し、創作し、愛し、また戦うのは、逆説的な生の本能によってです。——いかなる疑惑も顧慮することなしに、またしばしば、精神と心情との情熱に運ばれ、そして運び去られるに任せつつ。

キリスト教の人格神への信仰をじかに知覚するための扉をわずかでも開けようとして、わたしはあらゆることをいたしました。わたしの仲間のクローデルとベギーとがそれを受けとったようにです。徒勞でした。わたしの宿命は〈光〉を受けとって渡すことではありながら、ただし非人格的で宇宙的な充実においてであり、顔のないそのまったき現存においてなのです……」。

ド・パユレ神父の追伸に答えるように、ロマン・ロランもまた追伸のなかでクローデルに触れている。「わたしたちはクローデルから、聖金曜日のカードを二枚もらいました。——美しくも心打つカードでした」。

資料三十六は、ルイ・ベルナル神父がロマン・ロランに寄せた、一九四二年四月十六日付の手紙だ。この手紙も『内面の旅路』の読後感を記したもので、『コンストリュイール』誌に掲載された同書の書評が同封されていた。ベルナル神父は手紙の冒頭で『内面の旅路』を《音楽詩》と呼んでいる。だが彼は、「三つの閃光」と「射る者」の章については、しっくりこないと率直に述べている。それでもなお、「あらゆる食い違いを越えたところで、先生の内面にはある宗教的渴望が感じられ、それがわたしの渴望と一致しているのです。そのことを申し上げるのはすばらしく喜ばしいことです」という。

さらに彼は、ロランが消極的諦念に陥るカトリックの《苦痛礼賛》を拒否し、愛もなく人間としての同情もないキリスト教を拒否するのはじつに当然至極だ、としている。ただし、ベルナル神父に言わせれば、そのようなキリスト教は真実のキリスト教、すなわち《福音書と聖人たち》とのキリスト教ではない。神父にとってのキリスト教とは、《変容をめざす絶大な努力（あるいはむしろ絶大な恩寵）》なのだ。「キリストによって、またキリストにおいて、死は生の源泉となり、悪は善の源泉となるのです。試練をくぐり抜けることで真新しい地平線が見えてくるのでありまして、わたしは悪をそのような試練と見ております」。

神父が信じているのは《宇宙の人格的絆である〈お方〉》なのだから、彼にとって「三つの閃光」の章がしっくりこないと感じられるのは当然だ。彼はこう打ち明ける。「人格的で受肉した〈神〉を断念するようなことがあったら、わたしは退行することとなります。わたしにとっては、その神は宇宙全体を照らしだしてくださいなのです。『……』」
拡散した宗教性に陥ったりしたら恐ろしいことです。そのような宗教性は、わたしを解放するどころか、外見と自分の利己的欲望とに従属させることでしよう」。

前項で触れた『コンストリユール』誌所収の書評が、この本の資料三十七として再録されている。ここではその後半を紹介しよう。

「叙事詩的な息吹がこの本のページを運んでゆく。これは自伝であるとともに一編の詩なのだ。自然がかわるがわる愛撫と打撃とを注ぎかけるさなかにあって、みずからの宿命と格闘しているひとりの人間がいる。われわれはそこに、その人間の数々の希望、夢、願望が脈打っているのを感じる。

この宿命のうちに、われわれはまさしく〈神〉を予感する。その証言の偉大さはそこに由来する。ロマン・ロ

ランは幼年時をつうじて、〈神〉は人間にたいして力を乱用している、と感じていた。彼は一度として信仰をもったことはないと思つて、母親が祈っている〈神〉から解放されると夜明けの挨拶を送った。人格的な〈神〉から切り離されて、彼の宗教的渴望は、とくに音楽をつうじて、普遍的生命と合一するなかで自己を達成しようとする。そしてアガペーの冠を脱がされたエロスは感覚世界という閉ざされた地平をめざして羽ばたく。この幼児は、彼が向かつていった自由に到達したのだろうか。知恵と諦念とは、悪にたいする真実の勝利なのだろうか。存在が高次の次元へ近づくには苦悩を通り抜けなくてはならない。そのことは生命の法則でもあるし、愛する〈神〉の法則でもある。この大作家の感動的な打ち明け話の最後の何ページかを繙読したあと、キリスト教徒は〈神〉に向かつて謙虚にこうお願いする。種子が死ぬことこそその芽生えの条件にほかならないことを、また十字架を通らないかぎり輝かしい歓喜に行きつけはしないことを、あらゆる人間に理解させてくださいますよう」。

ベルナルド神父の以上の感想にたいして、ロマン・ロランは四月二十七日付の手紙（資料三十八）のなかでこう答えている。

「ヘレニズムのエロスはたしかにキリスト教のアガペーとは異なるものです。しかし、キリスト教のアガペーと『ギータ』のいう《神的結合》との隔たりはそれほど大きくはありません。後者は情念による染みも汚れもない、（変わる）ことなき靈的淨福」なのです。それはあらゆる存在のうちに《神的自我》を見、〈神〉のうちにあらゆる存在を見ます。そして存在するすべてのもののうちに〈神〉を愛し、つねに《生ける〈神〉》（原文には《わたしとして》とあります。それというのも、〈神〉がみずから話しかけているからです）として生きまた行動します」。

話は変わりますが、あなたが書いておられるような聖トマスのお考え方は、わたしとたいそう親近性があります。思想上の二大陸のあいだにかけられたアーチといった観があります。

ボッシュエとフェヌロンとの論争についていえば、ボッシュエはいまのところ厄介な局面を過ごしているようです。世紀の変わり目からこちら、カトリックの考え方に完全な方向転換が行われたのではないでしょうか。一般的にいて、神秘は長らく圧迫され、疑わしく思われていたのに、宗教的合理主義——それは十七世紀中葉からこちら魂を嚴重に支配していましたが——にたいして仕返しに出たのではありませんか。この神秘主義の自由化がおよそ何年くらいに始まったのか、それをまっさきに始めたのがどういう人たち、どういう作品だったのか、おおいに知りたいものです。わたしの感じでは、ほぼ時を同じくして世俗思想においても、硬直した合理主義的概念論に対抗する同様の反乱運動が（さらにいっそう強い仕方です）堤防を決壊させたのです。ブレモン「アンリ・ブレモン神父（一八六五—一九三三）」。『フランスにおける宗教感情についての文学史』（全十一巻）の著者。『フェヌロンのための弁論』（一九一〇年）において、ボッシュエおよびジャンセニスムを批判し、神秘主義的傾向を明らかにした」がその問題を語ったにちがいないと思うのですが。

あなたが〈三つの閃光〉の〈神〉を嫌っておいでなのはごもっともです。人格的で受肉した〈神〉への正しい信仰をどういう仕方でも揺るがそうと試みるようなことは差し控えたいと思います（そうする手段がすこしでもわたしにあるとての話ですが——そんな力はありません）。しかし、〈神〉はすべてではありませんか。〈神性〉は一種類しかなくて、ほかのは違うなどと、だれにそんなことが言えましようか。同じ日光が、ありとあらゆる水滴の反射をほとばしらせるのです。わたしは日光が飲んだそれらの水滴中のひとつにすぎません。わたしはわたしの歌を歌います」。

資料三十九はロマン・ロランの一九四二年の日記から抜粋した文章で、編者によれば同年五月に書かれたものだ。ロランは一、二年前から、ロラン夫人のおかげでクローデルの詩に親しむようになっていた（同時にクローデルのほうも、ロランの作品を読むようになっていた）。彼はそれまでクローデルの作品については、一九一四年以前のものしか知らなかった。彼は「わたしには、一九二〇年以後の作品のほうが、比べようもなく美しく、とりわけずっと真率に思える。いっさいの粉飾を去った彼、全人としての彼が出ている」と記し、さらにこう続けている。

「わたしはカトリシズムに接近しようと試みて、これまでそれをよく知らなかったのを認めた。そこでわたしは、目についたものをすべて、それについて啓発してくれるものをすべて読んでみた。おおいに驚いたことに、一連の注目すべき本を読んだところ、幅の広い精神、普遍性のある欲求が、あらたな幾世代もの偉大なカトリック信者に靈感を与えているのを発見した。彼らはほかの岸に住む人々の思考を理解し、包摂しようと高邁な努力をしている。彼らは別種の精神の持ち主にたいしてきわめて寛容だが、その寛容さは〈神〉の好意に満ちた正義への惜しみない信頼にもとづいている。その信頼は、誤謬のなかにさえ——それが公正で純粹な誤謬でありさえすれば——永遠に至る種子を認めることができるていものものだ。そしてわたしは、わたしの出会った若い司祭や修道士たちのうちにも、同じ知的高邁さを見いだした。——（それも正規の聖職者に追隨する世俗の信心家のあいにもまして、まさしくその正規の宗教家——ドミニコ会、イエズス会、その他の——のあいだのほうが多く多い。）わたしは彼らとの対話からも、また聖書や、またごく最近に出た聖書注釈書を読んだことによっても、ななが彼らの信仰からわたしを隔てているのか、そして、どこへ行けば、またどうすれば、わたしにとっても扉がわずかなりとも開くのかと、真剣に探ってみた。——しかし、わたしは挫折して數居きわに留まっている」。

ロランが言うには、彼をキリスト教の信仰に近づかせないのは、反キリスト者の批判ではない。彼らによる批判はたいていのばあい、皮相で、粗雑で、あまり知的でなく、公正さに欠けている。それゆえ、そうした批判に影響されて信仰に入らないわけではない。彼は語る。「わたしはキリスト教の信仰から隔てられているように感ずるのは、まさにその信仰によってなのだ。キリスト教徒のうちでも最高に優れた人たち（彼らの性格からいっても、知性からいっても、わたしがもつとも敬意を払っている人たち）における、その信仰の性質によってなのだ。その信仰がなによりもまず絶大な〈欲求〉であり、高揚した〈愛〉に養われた燃えるような〈希望〉であることが、わたしにとつては——彼らの告白そのものによって——明白になっている。その信仰は理性のうちに補助役を探すことはできる。しかし、その信仰にとつて、理性はいつも決まって二流の使用人ではない。彼らの信仰はけっして理性にもとづくものでなく、愛にもとづいているのだ」。

ロマン・ロランは直観を支える仮説を確信だと言いくるめることができない。信者はみずからの存在のありったけの力で、仮説を確信だと主張する。生きていくにはそれが必要なので、信者はそれを切望するのだ。すると、幻覚に憑かれたような彼の呼びかけに、それが応答してくれる。彼はそれを〈恩寵〉と名づける。じつは、それは自分が自分のためにこしらえた恩寵なのだ。ロランはインド思想に深く参入し、マヤー（幻）のこともよく知っていた。ヴェーダンタ思想においては世界そのものも実体のない幻だという。まして、みずからの切望に応じて〈神〉が答えてくれたような気がしても、それはつまるところ幻聴にすぎない。彼はそのことを承知していたから、インドの魔術師のように、自分が空に向かって放りあげた縄切れにすがって天に昇ろうと試みたりはしなかった。

日記に書き留められた、この断章の末尾数行を紹介しよう。

「わたしの必要、わたしの欲求がどれほど強かろうと、わたしは自分のためにそれ『恩寵』をこしらえるわけ

にはいかない。わたしは否定したりはしない。『おそらく』と言うのだ。——〈神〉は、もし実在せられるのであれば、公正という第一の義務をわたしに与えてくださった。みずから経験したうえで知っていること以外は、なにことも言わず、また断言しない。人間のうちにないがしか神的なものが存するとしたら、それはこの、精神の正直さそのものうちにあるのだ。それは自分が欲していることとか、自分の利益になることとかを願ったりはしない。わたしは〈神〉によって人間精神の敷居きわに配置されて、勤務中に自分の見たことを忠実に報告するように命じられた。わたしは歩哨として指示された命令しか願慮しない。それ以上のことはしない。最高会議で起こっていることを語るのは、一介の兵士の役目ではない。

一九四二年六月に、ロランはパリへ出かけたらしい。ルイ・ベルナル神父からロラン宛の六月十七日付の手紙（資料四十）には、残念ながらヴェズレー行きを断念せざるをえなかったので、ロランのパリ滞在中にお目にかかりたいという趣旨のものだ。その追伸に、「先生の『ベギー』は進捗していますか」とある。この夏、ロランは『ベギー』と取り組んでいたのだ。

資料四十一もベルナル神父からロラン宛の手紙で、日付は七月七日、ジェルメーヌ・ベギー嬢の住所を教えるためのものだ。「彼女は喜んで、先生に全幅の信頼を寄せて文通するでしょう」と保証している。手紙の末尾には、毎朝のミサのあいだに約束どおり「ロランのために」祈っている、と書き添えてある。

資料四十二は、ロランからミシェル・ド・バイユレ神父あての、一九四二年七月三十一日付の手紙だ。神父から長らく借用していた、マルセル・ベギー著『シャルル・ベギーの運命』を返却するにあたり、礼に添えて感想を記した

ものだ。よく知られていることだが、シャルルの長男のマルセル・ペギーは民族主義的心性の持ち主だった。ロランは、「ペギーの神秘主義はたしかに民族主義の土台に立っていました」として、その点でもこの本に《真実の種子》が見られるのを認めている。彼は、この書物にはおかしな箇所があるのを心得たうえで、得るところが多いと述べている。さらに、こうある。「しかし、ペギーを知るためには、ペギーを読むに如くものはありません。——そのすべてを読むことです。彼のうちには、どうでもよいことはほとんどないのです。一語（良いのも悪いのも）として、誠実でないことばはありません。まさにその点で、彼は比類がないのです」。

資料四十三は、ロランからレーモン・ピシャル神父あての手紙で、日付は一九四二年八月二十七日だ。この手紙を読むと、ロランにとってパリへ出るのがたいへんだったことがよくわかる。「パリでお目にかかる機会は、この先なかなか得られそうもありません」と言って、彼はこう説明している。「それというのも、いまや車を使うことを禁じられているからです。行ける機会はほとんどありません。鉄道は、わたしにとってひどく疲れますし。それに、列車に乗るのに、まず十キロ先へ行かなくてはなりません。——セルミゼルです」。

ここで筆者の思い出を挿入させていただこう。たぶんオートタンだったと思うが、ブルゴーニュ地方のどこかの町からヴェズレーへ向かうことにした。ところがその駅は無人駅で、切符を買うには、券売機を相手にロボットと話すような問答をしなくてはならなかった。さいわい、そばに親切な人がいて、ヴェズレーへ行くにはセルミゼル・ヴェズレー行きの切符を買うようにと教えられた。おかげで切符を買い、かなり遠回りをしてセルミゼルに行きついたので。セルミゼル駅は有人で、親切な駅員にヴェズレー行きのタクシーを呼んでもらうことができた。本誌第三十二号所載の拙稿「ロマン・ロランの燔祭」からも、ロランの若い友人ブイエの証言をつうじて、戦時中のヴェズレー近辺における鉄道事情をうかがうことができる。ヴェズレーは丘のうえに形成された町で、周囲が平原でなくて海原だっ

たら島のように見えるだろう。タクシーの窓から丘が近づいてくるのを見ていて、まるで江ノ島だと感じたのを憶えている。戦時中には、その丘は絶海の孤島にも似た状況に置かれたのだ。

そのころ、ロランはペギーと並行してベートーヴェンとも取り組んでいた。彼がこの手紙で《超人》を問題にしているのは、ベートーヴェンのことがかたときも念頭を去らなかつたからだろう。彼はピシャル神父にこう語っている。

「あなたと同様、わたしも《超人》が好きではありません。——彼らの度外れさが、自分は弱い人間だという、奥深い、悟りに似た気持ちで補われていない——あがなわれていない——ばあいのことですが。ベートーヴェンにせよ、ミケランジェロにせよ、かつてわたしはその守護的例として取り上げた人たちは、この気持ちを悲痛なまでに持ち合わせていました。しかし彼らは、人々にたいして兄らしく振る舞う義務があるとも、ジャン・クリストフのように生の大川の岸から岸へと《渡す》使命があるとも、感じていたのです。そしておそらく、彼らが道の途上で倒れずにすんだのはなぜかという点、ほかの人たちを運ばなくてはならなかつたからです。人間らしい弱さのゆえに人の助力を求めつつも、そうした弱さがあることで、ひとはかえって強くなるのです」。

資料四十四は、「一九四二年九月」という日付のあるロマン・ロランの日記だ。

「パリ・カトリック学院教授で参事会員のシムテルが来訪。彼の訪問の目的（隠してはいるが）は苦もなく看破できた。これら、《教会》の連中は、老人を回心させよう、再征服して《主》のもとに取り返そうとして、ハエの群れのようにそのまわりに駆けつけてくる。わたしはこれこれの聖職者と話し合ったらしいということを、

彼らは口伝えに時をおかずに聞きつける。——そして、彼らの希望が目覚めたのだ。捕まえたなら、すてきな獲物だ！狩りに成功するのはだれだろう、というわけだ。わたしはいっさい隠し立てをしない、隠すことはなにもない。だが、わたしには見てとれるのだが、わたしがなにか言うと、なにもかも言質として引っ捕らえられる。彼らは自分に厄介なことは憶えておかないようにする。——わたしがキリストの神性を信じていないと公言していることなど。「……」わたしがキリストの神性を否定したり疑ったりすることにたいして、わたしの会うこれらの聖職者はだれもかも弱い反発を示すにすぎない。これには驚いてしまう。彼らは、合理的明証はいっさい不可能だということ（それはそうだろう、——わたしにも、それはわかりすぎるほどわかっている）に立てこもる。そしてシムテール参事会員は、《賭け》という逃げ場のほかには、掴まるところが見つからない始末だ（バスカル流の《賭け》——そうではあるが、バスカルのいくぶん粗野な、利益がらみの賭けのかわりに、思想上の、確信上の《賭け》を持ちだしてくるのだ）。しかしこういう手段に出て、ルーレットに乗せようというわけだ。こういう賭け事では、なにを選ぶにせよ、なにを手に入れるにせよ、《ほかに仕方がない！》という、ずいぶんお粗末な調子に見える「……」。

ロランは、これらの聖職者が、キリスト教の《神》に固執して、《わが仏尊し》という姿勢を崩さないのを見苦しく思ったらしい。《自分たちのキリスト教的・カトリック的会社——ただそれだけ、ほかのものはいっさいなし》という表現が用いられているから、《わが社》のことしか念頭にない会社員といった印象を受けたのだろう。ロランは嘆く。「イエスキリストに先立って、ほかにも救い主たちがいた、ほかにも福音を告げることがあったと立証されることにたいして、彼らは子どもじみた恐怖を見せる。「……」彼らは自分たちが排他愛国主義者なのを白状しない。彼らのカトリシスム以外のものとは、いかなるものか。——それとは正反対であってしかるべきだろう。すなわち、

あらゆる光を受け入れ、呼び寄せ、包摂する偉大な総合でなくては。——それらの光が東洋から来ようと西洋から来ようと。——〈神〉があるとすれば、すべての光は〈神〉から来るのだ」。

同じ資料四十四の最後の数行として（一九四二年十月二十日）付けの断章が加えられている。

「数年前から、わたしが〈教会〉に近づくようにと——また、わたしが〈教会〉を誠実に理解する努力をするようにと——努めている人たちがいる。わたしはそのために、そこからいっそう遠ざかってしまった。わたしの死後、〈教会〉がわたしを自分のものと主張しようとしなければよいが！

わたしは信じない。Haud credo [まったく信じない]。反証はできている。信者たちの埒外に留まっていたあいだ、わたしは自分の無信仰にいくらかの保留を残しておいた。最高に優れた信者たちにおける信ずる理由が見えてきてからは、それらの保留をやめてしまった。カトリシズムの美的構築を認めるについては、わたしはやぶさかではない。それはおそらく、もろもろの偉大な宗教的建造物の美しさを越えている。しかしそれは美的領域内でのことだ。『テンペスト』の美しい詩句が語っているように、それは《夢を織り上げている》布地だ。土台は希望と欲望のセメントで固めてある。それはもろもろの世界に注がれる《メガレ・ヘ・モイラ》[大いなる宿命]の視線のまえでは、まったく空しいのだ」。

資料四十五はロマン・ロランからピシヤール神父あての、一九四二年十月三十一日付の手紙だ。ロランはそのなかで、ピシヤール神父が送ってよこしたポール・ルノーダンの著書『十七世紀フランスの偉大な女性神秘家、受肉のマリー』（一九三五年刊）について感想を述べている。

ここで注をつけておくと、フランスには〈受肉のマリー〉と呼ばれる十七世紀の修道女が二人いた。ここでは、フランスのカルメル女子修道会の創始者のひとり、アカリー夫人（一五六六—一六一八）を指す。死後、福者に列せられた。ロランは以前から、ブレモンの著作によって、この〈受肉のマリー〉のことを知っていて、西欧の宗教学家のなかでも、神秘的結合と行動とを示す好例として彼女に感嘆していたという。「ルノーダンの、この資料に裏打ちされた丹念な著書のおかげで、彼女に感嘆する理由がまたあらたにもたらされました」と、ロランはピシヤール神父に謝辞を述べている。

ただし、彼女が天上の夫であるキリストを崇敬し、熱愛して、夫婦か恋人どうしの間柄を思わせる文体で心情を吐露していることには、ロランはいささか辟易した模様だ。この無邪気そのものでいて肉欲的な表現は、ロランによるとフランソワ・ド・サール（一五六七—一六二二、聖人、『敬神生活序論』『〈神〉への愛を論ず』などの著作がある）から始まったものだという。ロランはこの手紙のなかで、ことのついでに「わたしのキリストはジオットとレンブラントのそれです」と語っている。

それはそれとして、ルノーダンの本を読んだおかげで、ロランはこういうことを知ったのだった。「この恋する魂といった状態は、この英雄的な女性の神秘的行動の生涯において、一時期のものでしかなかったのです。上昇の途上で的一段階にすぎなかったのですね。超克すべきものだったのです」。

（成蹊大学名誉教授 仏文学）

新春コンサート 東洋・西洋の出会い プログラムノートより

大谷祥子

ロマン・ロランの、「東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のためにいかに必要であるか、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重するべき」との考えに深い尊敬の念を覚えました。私の演奏する箏

(こと) という楽器は、内なる情熱を秘めやすい楽器です。古くは埴輪にも残されている、立琴を爪弾いて神の儀式を司った日本の神々の祈りの音楽でした。それが鎖国の江戸時代に日本独自の音楽として花開きました。「六段」で有名な八橋検校は江戸時代の作曲家です。彼の没した年に西欧ではヘンデルが誕生しています。まだ交流のない異国間の曲ですが、彼の組歌と、バロック音

楽には多くの共通点があります。時代は流れ明治維新後は、西洋音楽を取り入れ発展します。それは異国への憧れととまどい、共感の歴史でもありました。西洋と、東洋の楽譜の記譜法、そして戦後の邦楽演奏家の試みを一部ですが述べさせて頂きます。

1 日本伝統音楽の記譜法

日本伝統音楽では一般に秘伝的傾向が強く、さらに盲人の専業となった音楽もあったため、ヨーロッパにみられるような記譜法の発達は近世まではみられません。日本の記譜法は大部分が奏法譜で数字譜、弦名・勘所（かんどころ）や孔名または管名を文字や数字で表されています。各々家元は、自ら作曲した曲を広める為に自作を

楽譜にして継承し弟子の数を拡大させました。生田流でいえば正派、米川流、当道会、宮城会、筑紫流、江藤流などです。私は邦楽家にとって、不即不離の關係とは邦楽の本来の姿なのだと感じ、五線譜では表しきれない、つかず離れずの音楽は改めて不思議で魅力的な時間進行、旋律進行なのだと認識しています。能を見ると、例えば笛の旋律線が、謡曲とどういふ關係を持つのか、不思議さを感じる人が多いと思いますが、簡単に言えば、笛方は笛方の時間をもって、謡は謡の時間を持って進んでいるということなのです。つまり、謡に笛が『あしらわれる』時には、まず、謡のある個所から、ある個所まで、という地点が定められており、笛はそこで入り、終わるまで、謡曲のテンポヤリズムとは無關係に進行します。厳密に言えば、洋楽のように直接的な縦の關係を持たずに、相互に不即不離の關係を保ちながら進行するということになるのです。与えられた「入り」から終了地点までの間で『みはからい』ながら『あしらう』のです。これは洋楽のように、原則的に常に縦割りの垂直的時間を拍子でシンクロナイズしていく、モノクロニクな『單層的時

間』構造の上には成立し得ないものです。これは本来邦楽家が得意とする分野であり、箏曲譜、尺八譜、能狂言の譜で書けば理解できます。それは「おとし」（漸増リズム・漸減リズム）であったり、息づかい（間・無拍・沈黙）なのです。繰り返しになりますが、小節線で縦割りの出来ない音楽、それが箏曲なのです。それを支えているのは、口伝スタイルで確立された何十通りもある音のパターンの組みあわせや付かず離れず進む、唄と手のバランスなのです。それらを洋楽界の作曲家はゆらぎを持った音楽、あいまいさをもった音楽と認め、評価するようになりました。

同じような特徴を持つ楽譜を書く一人にE. サティが挙げられます。小節線があると、小節内でフレーズを考えてしまい、小節線をまたがった場合などに小節線にとられてしまう事が起きます。E. サティや西村朗、松村貞三、吉松隆、入野義朗の楽譜に見られるような小節線や拍子記号を書いてないものからは奏者が自由にうたい小節線にとられずフレーズに沿った表現ができるでしょう。

2 序破急について

音楽評論家の植崎洋子はこう述べておられます。「東洋の序破急は一方向の流れであって、それ自体回帰性をめざしたものではない。川の流れのように過ぎ去るものは再び帰らず、去年の春は今年の春と同じではない、といった流動感も、日本の諸芸に共通している。こうした一方向の序破急的リズム感は空間における建築や造園の相称性の否定や、プロポーショナルな拡大、縮小の否定とともに、大きな視野からとらえることができそうである。序の間の長さ、準備にかける時間の長さ、長ければ長いほど、観客はいまかいまかと緊張感の中で待ち、期待する。そこから出てくる音には精神性があり、深みがあり、その一音で満足するかのようである。その待つ時間が序の部分である。邦楽の音には一音一音に精神が込めやすく、その音を発するまでの動作、準備に時間がかかることが多い。」

序破急について調べ始めるとその奥の深さにとまどい、方向性を見失いそうになりますが、普段あたり前と思っている感覚、演奏法が序破急だったのです。三絃の撥で

音を発するとき、筆の余韻を出来るだけ長く伸ばそうとヒキイロや押しはなしをしている時、空間が生まれ、それが音楽に変わっていきます。その音楽は全てを包み込む自然を描写しています。邦楽器は様々な自然の描写に富む楽器であり、そこに存在する序破急は私達日本人のありのままの姿なのでしょう。私が三絃を弾く時いつも気をつけることがあります。撥のふり上げから糸にあたりそして胴に張ってある皮に撥があたるまでの瞬間のことです。葉の先についた滴が葉にとどまらず、たえきれずそのまま池にポチャンとおちるその一瞬、またししおどしに水が溜まり自身の重みに耐えられず竹が向きを逆さに変える瞬間と撥の動きは似ていると私は感じるのです。地唄用の撥がとても重いのは撥の重みをよく感じて、ふりあげた撥の重みに耐えられなくなった瞬間に撥を振り糸にあて音を出すと深く澄んだいい音がするからではないでしょうか？ 胴の裏の皮にもよく反響している感じがします。撥を振り上げる動作、これも「破」にはいる前の準備「序」であり重みのある深い音を出す為の大切な動作であり、時間であり、何よりも大切な間もそこ

に感じられるのではないでしょうか？

もう一つ、西洋と違うと感ずるのは、序破急の急（終結）の部分の捉え方です。江戸時代の有名な光崎檢校の代表作「五段砧」を見てみます。ここでは全四八〇小節ある中で終結（再現）部分がたったの六小節しかありません（最初のテンポが四〇に戻る四七六小節目の事をさす）のですが西洋ではどうでしょう？ ヨーロッパの古典音楽においては、終結部分にはいつてからが長いのが通常です。ベートーヴェンの「運命」を例にとってみると、最終楽章（フィナーレ）では、ソシレ、ドミソが永遠に続くかのようです。ドミナント・トニックの繰り返しが執拗に続くのです。この序破急の最初の序の部分が長く最後の終結にあたる急の部分が短い事は、邦楽に限らず日本人の性質にも通じるといえるのではないのでしょうか？ここに湯浅譲二氏の著書「人生の半ば」の十二音技法——時間性への直面という項目——「実際の作曲にあたって、私が潜在的に志向していたものは、シェーンベルク的な意味での、メロディックな動機とその関連的展

開という、いわばヨーロッパの伝統的な、変奏の概念によるものではなくて、十二音のセリー自体の成分から構造的に抽出されてくる、どちらかと言えば、ウェーベルン的な時空の世界であった。きしくも後年になって、私と同世代の観世栄夫氏も言っているが、私はその頃、能の持っている時空と、ウェーベルンのそれとに共有共存するものを見出していた。『七人の奏者のためのプロジェクト』は、短い七つの楽章から成っているが、その一つ一つが当時の私にとっての可能性に対するプロジェクトであった。私はその中で、動機的、形体的、構造的、音色旋律的な工夫など、十二音技法の中の多様な可能性を模索すると同時に、何とかして、私が以前、能や仕舞を通して学び取った、東洋的、日本の時間に立脚する音楽的構造を生み出したいと、苦闘を続けた。例えば、道成寺の白拍子の一調の舞のように、物理的時間で言えば、約二十秒ほどの間をもって一打される鼓の音、言いかえれば『裁断して初めて時となる』時間、非連続的な一瞬一瞬が全き時となるような時間。敢えて観念的な表現をとれば『時の裁断面に直面して、初めて永遠のいま

「がよみがえる」時間、つまり、禪的な、矛盾的自己同一的な瞬間を内包する時間に立脚する音楽を模索したのであった。」

二十秒にわたる長い序の部分があり、時を裁断することで初めて音が生まれ、命を持つ。そこには旋律での終結やテーマの繰り返しなどは存在しないでしょう。時を破った時点で音楽が生まれ、それが全てなのでしょう。以上のことから邦楽は洋楽に比べて「序」の部分に重きをおいた音楽といえるのではないのでしょうか？音響の移り変わり、音の持続の変容の中でいろいろな音楽が生まれてきました。時間の中の音響の推移、変容は邦楽の進行において、時間を支配する序破急の序の部分が西洋に比べ大変重要ですが、終結（急）の部分は西洋に比べそれほど重要性を持っていない。これが邦楽のいわゆる古典の一つの特徴といえるでしょう。

3 邦楽演奏家の海外進出

邦楽演奏家が海外へ行き、両国間での影響を与えあう事例を紹介します。邦楽家がいつから五線譜を使用し始

めたのかを考えてみると明治時代まで遡りません。明治時代、川上貞奴等がヨーロッパへ行った記述が残されています。明治二十七年パリで行われた、万国博覧会に雅楽の楽器・楽譜などの資料が陳列され、その際出品された笙の和音の五線譜による図表からドビュッシーが新しい和声のヒントを得たと記されています。そのドビュッシーの交響詩「海」の初版のスコアの表紙は葛飾北斎「富嶽三十六景」の神奈川沖波浪裏が使用されていました。

互いの国の文化的特徴を理解し、自国の文化に反映させる作業は大変やりがいのあることです。現代において洋楽の作曲家の初演作が発表されることは邦楽界でも当たり前のことになっています。邦楽演奏家に洋楽の作曲家の手による曲を渡される機会も増えました。邦楽の活性化に繋がるのではという期待も込めて演奏家は前向きに取り組んでいるのではないのでしょうか？日々の練習とは別に、洋楽との取り組みと努力、挑戦とその情熱をかいま知り、私達若い世代が今しなくてはいけないことを長期的な視野をもって望んでいきたいと思えます。

（箏曲演奏家）

歌と『ピエールとリュース』朗読の会から

歌い終えて

下 郡 由

選曲は最初、ピエールとリュースの愛好したというド

ビュッシーを、と思いましたが、伴奏して下さる能田由紀子さんとも話し合い、最終的に、ロランの作品に関係のある「クリスマスの歌」、「美しいつばめ」の二曲と、シューマンの「蓮の花」、メンデルスゾーンの「歌の翼に」のそれぞれ愛を歌った二曲にきまりました。親しみのある曲でもあり、「歌の翼に」は聖なるガンチスに近い素敵な地に、歌の翼にのせて恋人を伴い、そこで至福を夢みましよう、という詩で、私には生から解放されてからのピエールとリュースをふと思ひ浮かばせるものが

ありました。

さて、喜寿を迎える身には、発声のコントロール等、歌唱の衰えがとも気になり、何とか自然な歌の流れを聴いて頂けるよう、レッスンに通う傍ら、毎日体調をとのえ、発声の勉強をやり直し、ひたすら練習に打ち込みました。それでも何度か自信をなくし、出演を取り止めようと悩みましたが、「ご自分のありのままを出せばいいですよ」と、宮本エイ子様のお言葉に、何だか慰められ、心の安定を得た思いで、又努力を続けることができました。

当日は満足した出来とは云えませんが、「あるがままに」を心に念じ、一生けんめい歌いました。終演後、来聴者の知らない方から「とてもよかったです」とお声をかけて頂けたのは思いがけない喜びでした。

新聞の小さな告知板の『魅せられたる魂』の文字に導かれ、ロマン・ロラン研究所を訪れて十年、今回はじめて少々の働きをさせて頂けたように思い、うれしうございました。

『ピエールとリュース』をめぐる

尾 埜 善 司

この小説は、一九六六年一〇月の四日間、波多野茂弥・小島達雄の脚色で劇団京都ドラマ劇場が山一ホールで上演した。二〇〇六年二月九日に至り、今藤政太郎作曲、吉行和子朗読で、箏・十七弦・笙・笛・コーラス（四名）により、紀尾井ホールで上演され、関西日仏学館では翌年二月三日当研究所の主催で、五名の女性による朗読会が催され、私が作品を解説した。所持する四〇年前の上演プログラムをコピーして聴衆に配り、R・A・フラン

シス教授の近著『ロマン・ロラン』（一九九九年NY）から、切り込みのよい一節を訳出、紹介した。

「戦時中、一九一八年のバリ爆撃に触発されて迅速に書き上げたのが『ピエールとリュース』である。主人公は聖金曜日にサンジェルヴェ教会内で死ぬ二人の恋人であり、この非道な場でロランの知る若い女性が殺された（『戦時の日記』）。ロランの青年期によく見られる敏感な魅力を持つブルジョア階級のピエールは、熱狂せずに徹

兵を待ちつつ、低層階級出身のリユースと、つかのまの幸福を握りしめる。しかしリユースは彼より現実的で、世間が決して二人を結婚させないと知っている。二人のかよわい出来事は、ドビュッシーに体现されたフランスの上品で優しい面の死の影を映す。二人の大好きな彼は二人と同じ週に死ぬ。二人はどこまでもパリジャンであり、

ロランはいつも批判していたこの街への稀な郷愁に觸れているようだ。彼はこの小説では彼の反戦思想を揚げた誘惑に抵抗し、それは物語自体に語らせる、抑制されて簡潔な作品となっている。」

西成勝好理事の尽力で、京都精華大学中田実紀雄ゼミは、この小説のアニメ化を計画している。

『ピエールとリユース』と今藤政太郎さんと

岩 坪 嘉能子

それは一昨年の秋のことでした。旧友たちが集って、お酒をいただきながら、いつものように楽しい刻をすごしていました。

突然、仲間の一人である今藤政太郎（三味線奏者、作曲家）さんが、「今度の演目の一つに、『ピエールとリユース』をやりますから」と発言がありました。みんなボカ

ンとしていました。私も、ロマン・ロランの『ピエールとリユース』？ 邦楽とロラン？ 一瞬の戸惑いの後は、すぐ期待へと思いは変わりました。常に人間愛をベースに挑戦し続け、進化し続ける人、政太郎さんならこういうこともあるのかと。彼との距離が急にぐっと近くなり、うれしくなったのを憶えています。「私、十数年来、ロ

ラン研究所の読書会のメンバーなんです。」という話しをしたことから、翻訳者故宮本正清先生夫人エイ子さんへの紹介を依頼されました。みずず書房へのコンタクトはすでに終わっていたのですが、研究所の存在を知り大喜びでした。

そして実現したのが、昨年十二月のリサイクルでした。雨の激しい夜、東京の紀尾井ホール（洋楽専門のホール）での演奏会。

吉行和子さんの朗読、箏、十七弦、笙、笛、コーラスなどで構成された『ピエールとリュース』。何とも不思議な温かい雰囲気の中に、戦争の残酷さを表現するというメッセージは十分受け止めることができました。我がことのようにどきどきして、満たされた時空を共有でき、生涯の最もいい思い出になりました。

次は、私達研究所の朗読会のお話です。ロラン研究所設立35周年記念の一環としての〈歌と朗読の会〉をもたせていただきました。初挑戦の朗読は村田まち子先生のご指導をいただき、五人のメンバーが心を一つにして取り組みました。陰で支えて下さった方も含めて、力を合



(財)ロマン・ロラン研究所設立35周年記念

＜歌と朗読の会＞

日時 2007年2月3日(土)午後2時-3時半
場所 関西日仏学館 穂高ホール

ロマン・ロランの作品から

歌 下 藤 由 洋典 鹿田由紀子
朗読 『ピエールとリュース』 アンソロジー 宮本正清訳
作品案内 鹿田由紀子、宮本正清、西尾麻子、宮本エイ子、山本和枝
出演者 安部知子、宮本正清、西尾麻子、宮本エイ子、山本和枝
演出技術 清原幸夫

朗読の原典『ピエールとリュース』(中野実監訳)は『ピエールとリュース』の日本語版で初めて、
ポリティカル・アクションにも関わらずに、その価値を認めることもできずにいます。
原典は、この朗読の原典に「ロラン」の語句、その原典に「ロラン」の語句、その原典に「ロラン」の語句、
原典は「第一歩」の朗読(1944-1947)であり、原典は「第一歩」の朗読(1944-1947)であり、原典は「第一歩」の朗読(1944-1947)であり、

会場 穂高

お問い合わせ先
〒580-8407 京都府北条郡穂高町3-2
電話 075-771-3281
FAX 075-771-3282

わせて一つのものを作り上げることが、こんなにも感動的なことなのか、創造の歓びの片鱗を体験できたことに感謝しています。

お聴き下さった皆様の心にも、つらさやむごさよりも、温かい心が広がりますようにと祈りにも似た魂で挑戦した朗読会でした。

平和を希求することを生涯の目標として、ロランの魂を具現化する行動の一つとして、又チャンスが与えられ

れば挑戦したいものです。

最後に、最高の芸術家今藤政太郎さんにも讃辞とエールを送ります。自分を磨くことを忘れない彼の未来には、東山魁夷の「道」の絵が重なります。終わりのない一筋

の道（芸の道）が輝いてみえます。

朗読をご静聴下さった皆様にも心より御礼申し上げます。

「平和のカノン」

清原章夫

二〇〇六年七月十九日、NHKで「世界遺産 フランス縦断の旅 知られざる聖地ベズレーから生中継！」とタイトルの番組が放映された。ベズレーはロマン・ロランが一九四四年十二月三十日にその生涯を閉じた土地で

ある。しかし、現在では、ロランは日本だけでなくフランスでも過去の人となっている。だから番組でロランのことはとりあげられないだろうから、せめて彼が晩年の六年間を過ごしたベズレーの風景だけでも見ることがで

きたらという程度の関心で番組を見始めた。

巡礼の最初の地としての紹介の後、第二次世界大戦直後の一九四六年に一人の司祭が「かつて人々が目指した理想の世界を築こう。平和のためにベズレーの丘で祈ろう」と呼びかけた結果、イギリス、ベルギー、オーストリア、スイスなどのヨーロッパ中から四万人もの人々がベズレーに集まってきた。その白黒の映像の中に、なんと一年前までフランスの敵国だった四人のドイツ人が、廃材で作った十字架を担いでいる姿があった。この「平和の行進」を見ただけで、この番組を見て良かったと思っ

た。

ところが続いて、二〇〇六年の六月十一日に同じベズレーのサント・マドレーヌ寺院で「平和を祈る合唱際」がおこなわれ、二、五〇〇人もの人々が集い平和の祈りをこめて歌うシーンが映し出された。そして最後にロランの作品にならった「平和のカノン」の合唱が教会に響いた。

ああ、世界はロランを忘れていなかった！ 世界にはまだロランが必要であると、喜ぶと同時に私は、せひこ

の曲の楽譜を入手したいと思った。番組が終わってすぐインターネットで探したところ、「Florilege」というタイトルの楽譜の中に「CANON DE LA PAIX」を見つけた。同時にCDも探したが残念ながら見つからなかった。

さっそく大阪の楽譜屋で注文し、フランスから取り寄せてもらい約二カ月後に入手できた。まず作曲家のFrançois Terralについて調べたが、生没年さえ知る事ができなかった。曲はわずか八小節でソプラノ、アルト、テノール、バスの混声四部合唱である。

「CANON DE LA PAIX」（平和のカノン）のタイトルの下に「Le temps viendra」（時は来たらん）としてあった。「時は来たらん」はロランが一九〇三年に発表し同年に上演された戯曲のタイトルである。ロラン全集を調べてみたところ、「CANON DE LA PAIX」の歌詞は「時は来たらん」の最後にオーエンが歌う賛美歌の歌詞に基づいていることがわかった。歌詞の原文と「時は来たらん」の片山敏彦の訳を以下に示す。少し差違があることがわかる。

Ecoutez, le temps viendra

Les hommes un jour sauront la vérité:

Le lion s'étendra près de l'agneau

Et nous fondrons les piques pour des faux

Et les sabres pour des herbes,

La paix sera notre combat:

Faites que ce temps vienne!

時は来らん。

万人が真理を知り、

剣は交わりて鋤となり、

槍は交わりて鎌となり、

獅子は子羊の傍に臥してあそぶ――

その時は来たらん。

なお「平和のカノン」のカノンは音楽用語で、フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』に「複数の声部が同じ旋律を異なる時点からそれぞれ開始して演奏する様式の曲を指す。一般に輪唱と訳されるが、輪唱が全く同じ旋律を追唱するのに対し、カノンでは、異なる音で始まるものが含まれる。」と解説してある。

二十一世紀に入っても、ロランや六十年まえに「平和の行進」をした人々が祈念した戦争の無い世界は実現していない。世界が本当に平和になるまで、「平和のカノン」は歌い継がなければならないと思う。

半鐘山開発問題 和解

宮本 エイ子

二〇〇六年十二月二十六日、二十七日の両日、「半鐘山和解・大幅縮小」と、新聞やテレビはほとんど同じ見出しで報じていた。住民勝訴と評価された。一九九八年三月六日に始まって以来八年九ヶ月にして、京都地裁（中村隆次裁判長）で和解が成立した。山の周辺部を緑地帯にして、それを市に寄付する大幅な縮小案となり、損害賠償の解決金四千三百万円の支払いも盛り込まれた。開発面積約三三三六㎡のところ、宅地面積は一三八七㎡で42%、緑地面積は一三三五㎡の40%、公園一〇〇㎡、道路三二八㎡の10%、緑地用避難管理道路が一八五㎡の6%となり、酷い開発の顔であった崖上、崖下も緩和される。（和解案図、筆者模写78 P.）

当初の計画（図76 P.）では、宅地面積が二五七六㎡の77

%、道路は六六〇㎡で20%、公園一〇〇㎡で一步たりとも譲れないとした工務店側からすれば青天の霹靂である。「落としどころがよかった」と、和解の報道に呼応して、すぐさまお電話を下さった支援者たちの声はありがたい。

工務店が一貫して高姿勢を見せていたのは、「法律は犯していない」しかし、「もし裁判でいわれたなら……」ということを始終口にしていた。決定的だったのは、やはり〈工事差し止め〉仮処分決定（永井ユタカ裁判長）（二〇〇三年十二月十八日）だったに違いない。すぐさま工務店は、保全抗告を京都地裁へ、さらに大阪高裁へ、いずれも棄却され、自ら墓穴を掘る状況に陥った。その間、平行して業者に求めた損害賠償訴訟が続行しつつ、

裁判所で原告、被告双方に和解が打診されたのであった。世界はますます環境保全の方向に進んでいて、津波のように京都の町の工務店を襲っていったのかも知れない。和解案は次の骨子で進められた。

- ① 半鐘山の周囲をグリーンベルトで囲み、その内側に管理道路を設け、京都市に管理させる。これは、半永久的に緑地として保全し一定の景観を保つ目的。
- ② 隣接住宅の安全性の確保。
- ③ 搬出土砂を最小限にすること。
- ④ これまで受けた被害損害の修復。
- ⑤ 宅地として販売するにあたって風致地区の景観を保つこと。
- ⑥ 謝罪。

一昨年の二〇〇五年八月から裁判所第三民事部で和解協議に入り、(8/26、10/5、2/16、3/16、4/18、5/26、7/6、9/15、11/7)、これらの要件がほぼ満たされた一〇回目の十二月二十六日、和解にこぎつけた。四月に部長の移動があり新裁判長が就任した。長く審理が続いていると、今回で三度目の新旧交替、そのたびに私たち住民に一抹の不安が過ぎる。が、右陪席の森田浩美判事が二〇〇三年九月の現地検証以来、常に熱心に耳を傾けて下さった。もとより裁判所は独立して



1998年案計画

高くそびえ立つもので、裁判官と原告住民は、たとえ和解過程のラウンドテーブルでも直接おはなしするということはない。彼女はそれぞれの確な質問を投げかけながら冷静沈着、しかも女性らしい繊細で温かい眼差しが注がれ、どれほど不慣れな私たち住民をほっとさせたことか。

京都市に対して求めてきた開発許可取り消し請求（原告二百三十六人）は、当初の開発計画は取り下げられたので、許可が取り消されたのと同様状態になり終結した。

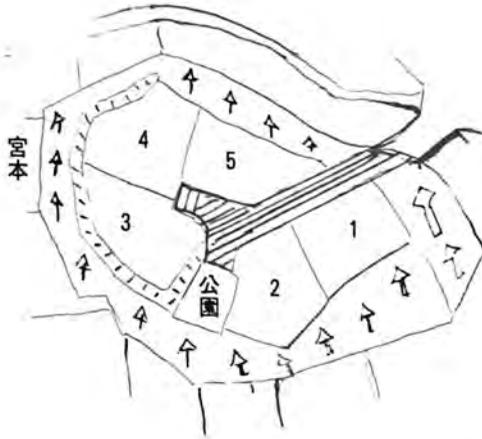
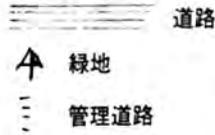
京都市に対しては再三「半鐘山を取得して保全すること」を強く求めてきたが、半鐘山を購入すれば、ほかにも該当の箇所が三十数ヘクタールにも及ぶという理由で受け入れられなかった。では、和解協議の当事者として参加し、謝罪することを申し入れたが、これも拒否された。しかし、京都市代理人の崎間昌一郎弁護士が最後の弁論で「住民には敬意を表する」の一語が残された。

実際のところ、半鐘山の開発はこれからどのようになされていくのだろうか。その基本的な図面を描いたのはほかならぬ私たち住民がこの問題発生以来、検証、証言

をしていただいた土木・建築・地盤工学の専門家集団「国土研」、そのメンバーである幸陶一氏であった。事業主幸田工務店が住民の要望を受け入れ、幸氏に開発図面を依頼することで和解協議が大きく前進した。幸陶一氏のモットーは「生活レベルの安全性」の向上と維持を掲げている。そのコンセプトをここで引用させていたたく。

「生活レベルの安全性」とは、例えば迫りつつある次の地震時における花折・鹿ヶ谷両断層の動きの予測を行い、地盤変形等の結果を反映した開発計画を実現するということや、温暖化の異常気象を予測し、条例に定めている時間降雨量を一二〇から二〇〇mm/時に増量した治水対策を実施する等「天災」とされると考える要素を組みみ入れないレベル（行政の指針も公共交通施設や原発等を除く技術基準）で大地震時に「命が取り留められる」、豪雨や長雨で「崩壊しない崖、水害とならない水路河川、浸水しない床下」を実現して生活の安全を守るグレードの計画となります。

和解案



したがって、具体的計画に言及していく場合には、個人の見解に優先して、関係法令を最大限適用し一定範囲の区域の安全を考えて行くこととなります。……

……開発を促進する法令に従った計画を行っても「良質で安全の計画」は実現しませんので、この上に「和解プランのコンセプト」となる「生活レベルの安全性」の向上を具体化して行きます。

総合的には自然が良いと思う人が多く、近隣の生活実態には関係なく、不特定多数のコンセンサスを得るための常套手段ですが、景観に配慮した治山・治水対策を整備するのは人類の福祉施設のひとつと考えています。今度の機会を利用して、治水機能を高めることや、斜面の安定を高めることが重要であると思います。

以下、各部の具体を表にまとめました。

部 位	目標とする計画内容		コンセプト
南面の崖の構造	<p>宅地と管理道路の段差に低い石積み擁壁を造り、管理道路と擁壁範囲の降雨排水は管理道路勾配を山に下り、擁壁根付けに設けた浸透性排水路で流下する。</p> <p>道路から隣接地は傾斜面に植生し、流砂・崩土の無い法面に仕上げる。降雨は全量浸透させるが、法裾に浸透暗渠を設けて余剰水の排水に備える。</p> <p>斜面の維持管理に労力や費用が最低限となるための樹種選定、排水路構造とする。</p>		<p>自然斜面の時の流砂・崩土を無くし、流下浸水による環境悪化の改善。</p> <p>近接帯を常緑中木、上部帯を常緑高木とし、遠景で森を形成し、近景で落葉被害、プライバシー侵害を防止する。</p>
東面の崖	<p>現状の雑割石積み擁壁を取り壊さない。</p> <p>既存擁壁裏にグリーンベルトを設ける。</p>		<p>山体の安全に都合良い。プライバシー侵害を防止する。</p>
西面の崖	<p>安定勾配の植生斜面とし、中段部に小径（犬走り）を設けて管理用に兼用する。</p> <p>植栽は常緑種中木とする。</p>		<p>斜面崩壊の防止とプライバシー侵害を防止する。</p>

こうして幸氏のプランが和解に寄与したことはいうまでもない。

ここで、お金に関して多くの方が関心を寄せているので少し記述しておく。

長期化した裁判といえ、企業である業者が住民側に損害賠償として多額の金額を請求することがしばしば伝聞するので、そう思われた方があっても当然である。もし、私たち住民が完全に負けていたらどうなったか。考えただけでぞっとする。コピー代でも何百万円と聞いていた。国土研、弁護士への膨大な検証、書類費。工事差し止め仮処分（原告三軒）が決定し、地裁へ銀閣寺前町住民で千二百万円供託していた。そのお金も返らず、経費とともに私たち直近の原告住民が分担しなければならなくなっただろう。そして九年の歳月の空虚と何千万の費用がこれからの日々に重くのしかかっていくことだろう。

幸か不幸か、弁護団の功績で住民側が多くを受け取ったのは、ありがたい。が、他方で人々の誤解の危惧も孕んでいる。何しろお金は魔物。四千三百万円の内二千万

円は地盤改良費に充てるという。その残りは弁護士、国土研、専門家などの立て替え金、住民拠出金などにあてられるようだ。特に留意しなければならぬのは、住民個々の精神的被害はカウントしないこととすべきである。いかなる分配をするのか、はじめにその方式が協議されないまま金額が決まったことがややこしい。弁護士団の強力なリーダーシップによって禍根を残さず解決されることを期待する。

勝者の裏には敗者がある。幸田工務店が負の側に立ったのである。先述したように和解協議で損害賠償金の交渉中の昨年六月、大阪高裁からも工務店へ保全抗告が棄却された。私たち住民には有利に働き、これまでの額が倍増したのを覚えている。

資金的な面で工務店は開発のパートナーを求めて、ついに大阪の不動産業者由利土地株式会社を獲得した。由利土地の社長曰く、大幅な縮小案で緑を保全する環境に優しい開発ゆえに購入することになったと。和解協議の終盤で、経済的基盤が強化されたのは住民にとってマイナスではない。

由利土地は津多屋ともいい、同じ頃、京都・南禅寺の何有荘を裁判所の競売で落札して話題となった。何有荘は約六〇〇〇坪の小川治兵衛作の庭を擁し京都一望の壮大な豪邸である。故稲畑勝太郎旧邸でもあり、その後、複数の手を経て、落札時はなんと半鐘山の続き、小山町を開発した〇氏が所有していた。稲畑は日本映画の祖であり、ポール・クロードとともに関西日仏学館の礎を築いた日仏交流史に欠かせない経済界の重鎮であった。

京都市が昨年十一月に、遅蒔きながら新景観政策を発表した。自然風景保全と風致地区制度を強化し歴史都市京都の保存を打ち出したのであった。京都にある世界遺産一四社寺からの眺めを保護する新条例の制定も謳われている。これは半鐘山が銀閣寺のバッファゾーンに入っているとして保全を強く京都市に促したことで無関係ではなからう。私たちの要請が無駄なく結実したと思えば滑々しい。

今年一月に堺市主催の「ユネスコ特別講演会」が催された。「世界遺産と現状と展望」のテーマでユネスコ事務局長松浦晃一郎氏が講演された。そのなかで「銀閣寺

マンション問題も一般の方の訴えがあり無事に解決した」と話されたという。たまたま参加していた関係者からメールが入った。「私はあなたのことを思った」と。

振り返れば、二〇〇四年、はじめてユネスコへ半鐘山開発問題を訴え、そのきっかけを作ったのは事実である。そして、飯田昭、玉村匡両弁護士とパリまで行き、ユネスコやイコモスへ要請した。持参する書類では伊従勉京都大学教授の献身的な思い入れがあった。フランス人の専門家にも理解を求めた結果、ユネスコやフランスの新聞ル・モンドに対しても動いてくれた。現代絵画の巨匠バルチユス夫人の節子様もユネスコ三十年記念レクチャーで半鐘山問題を取り上げて下さった。住民たちもはがきを書いてアピールした。その後も大谷暢順本願寺法主が松浦事務局長にお会い下さったり内外の多くの方々からご支援をいただいた。

今日、新景観政策が制定されてもなお、京都市内には法的に開発される恐れのある里山や緑地部分が残されているのは気になる。しかし、新景観法に対して京都新聞の世論調査（二〇〇七年二月十五日付）によれば、80%

の人が規制強化に賛同し、関心を持っていることが報じられたのはうれしい。これまで京都市民の無関心さを空しく実感してきただけに、今回のアンケートはもっともなこととはいえ、我が意を得た気持である。今後は市民の厳しい目が古都の景観を監視するだろう。

運動については、始まるときはただひとつ、緑保全と、危険開発を一丸になって訴え、ひとりでも多くの共感を得たいと願った。しかし出口になるとどう出ていくか？

人は産声をあげるときは一樣に同じ顔でも命を閉じるときは個々に千差万別の様相、まるで人生そのものだ。また運動する住民と称しても、立地条件は様々で、鳥瞰的な住居にある人たちの参加も多くある。後半になると彼らの方が直接被害をうける虫の目で棲んでいる疲れた原告たちよりも、いや原告に対しても鳥のようにわめいてくる。

運動に一応の目処がついたのを機にバランスシートで項目別に検討すべきだが、矛盾を克服できないのが住民運動の宿命だろう。鳥インフルエンザを運ばれる危険性もあることを付言しておきたい。

最後になりましたが、読者の皆さま、長い間のこれまでのご理解とご支援に心から感謝申し上げます。今や勝者も敗者もなくスタートラインに立って、京都の東山の景観とその新たな美しい眺望が得られるよう努力してきましたと思います。景観に美しくない「開発反対」の立旗もおろしました。

これから工事が着手されますが、今後ともしっかりと見守っていただきますようお願い申し上げます。

参考までに拙著「京都 半鐘山の鐘よ鳴れ！」いま一度ご高読願えれば幸いです。

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一	5・15	（ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映））	宮本 正清	一九八七	2・10	中国文学とロマン・ロラン	相浦 泉
一九七二	11・27	苦惱のなかのインド	森本 達雄	一九八九	4・20	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤 周一
一九七三	6・24	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂弥	一九九〇	6・9	ロマン・ロラン全集と私	小尾 俊人
一九七三	5・26	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして	高井 博子	一九九〇	9・29	ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命二〇〇周年の記念に	中川 久定
一九七四	12・18	私の人間観	末川 博	一九九〇	11・17	ロマン・ロランとの出会いから	尾埜 善司・今江 祥智
一九七六	6・29	私の通った芝居の道	毛利 菊枝	一九九一	1・27	ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽	新村 猛
一九七六	12・5	ロマン・ロラン没後三十周年記念——講演と音楽の夕べ	佐々木斐夫	一九九一	6・2	ロマン・ロランとガンディー	森本 達雄
一九七六	7・11	ロマン・ロランとゲーテ	南大路振一	一九九一	9・26	『魅せられたる魂』と私	樋口 茂子
一九七六	7・11	ユダヤ民族と西洋文明	岡本 清一	一九九一	10・26	占領時代における日本社会とロマン・ロラン	小尾 俊人
			演奏：玉城 嘉子	一九九一	11・30	ロラン・片山・ヘッセ	宇佐見英治
				一九九一	3・1	ロマン・ロランと私	松居 直

6・4	ロマン・ロランとベートーヴェン	青木やよひ	尾埜 善司・今江 祥智
9・27	ロマン・ロランとデュアメル	村上 光彦	中野 雄
10・25	ロマン・ロランの思想の二面性	兵藤正之助	神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動の
11・29	初めにロマン・ロランあり	岡田 節人	あいだ B・デュシャトレ
6・26	《大洋感情》と宗教の発端	岩田 慶治	ロランとフランス革命
9・25	ロマン・ロランとイタリア	戸口 幸策	自然科学とゲーテ
10・30	ロマン・ロランの革命劇をめぐって	鶴見 俊輔	ロマン・ロランとドイツ音楽
11・27	宮本正清 没後十年記念追悼会		——ベートーヴェン、デューカ他作品
	ピアノ演奏…山田 忍		ピアノ演奏…小坂 圭太
一九九二	静かにやさしき顔	佐々木斐夫	おはなし「ビエールとリュス」と「また逢う日ま
1・29	不思議な静けさ——宮本正清の世界	小尾 俊人	で」 今江 祥智
一九九三	自伝的諸作品について	佐々木斐夫	映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)
1・29	ロマン・ロランの演劇的世界	石田 和男	ロマン・ロランと日本人たち
5・24	ガンディーとロマン・ロラン	山折 哲雄	私の歩んだフランス文学の道
6・23	「魅せられたる魂」を語る(前)	重本恵津子	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺
10・15	「魅せられたる魂」を語る(後)	重本恵津子	岡田 暁生
一九九四			
1・28	いま、ロマン・ロランを語る		ロマン・ロランとの出会いから
			レクチャーコンサート
			岡田 暁生
			鄭 承姫

二〇〇二

4・20

ロマン・ロラン記念スプリングコンサート

ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ

ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ

ロマン・ロランの後継者たち

蛭川 譲

9・11

抗日中国における中仏文化交流

中国の知識人はロマン・ロランをどのように評

価したか

内田 知行

二〇〇三

4・19

ロマン・ロラン記念スプリングコンサート

演奏…ピエール・イワノヴィッチ

郁子・イワノヴィッチ

二〇〇五

1・29

現代の法とヒューマニズム

加古祐二郎と瀧川事件

園部 逸夫

5・10

ロマン・ロランの作品による音楽とレコード

尾埜 善司

6・12

ロマン・ロラン没後60年記念コンサート

梅原ひまり 神谷郁代デュオ

ヴァイオリン演奏…梅原ひまり

5・31

戦争と平和、科学を考える

ブリーモ・レーヴィを語る

ジル・ド・ジェンヌ

解説 西成 勝好

6・25

生々發展する魂

ゲーテとベートーヴェンそしてロマン・ロラン

青木やよひ

11・22

ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える

峯村 泰光

10・29

交差する肖像

ロマン・ロランとクロードル

二〇〇四

5・29

『きょう』を読む『京都、半鐘山の鐘よ 鳴れ!』

朗読とおはなしの会

J・F・アンス

通訳 原口 研治

二〇〇六

11・24

戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン

山口 俊章

二〇〇七

1・20

日本におけるロマン・ロラン受容史

シッシユ・デイディエ

通訳 シッシユ由紀子

琴 笙 ヴァイオリンによる新春コンサート

大谷 祥子

豊 剛秋・増永雑記

2・3

歌と朗読の会

「ピエールとリュース」朗読

尾埜 善司ほか会員

歌 下郡 由

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六一—一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの眞の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、眞に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頹廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

●講演会

●読書会・研究会

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また

●彼の周辺の芸術家たちに興味、

●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感

いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●特典①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員①一般賛助会員は年会費一口五千元。特別賛助会員は年会費十口以上。

二〇〇六年度 賛助会員、寄付者名簿

(アルファベット順・敬称略) * 特別会員

青木やよひ 有馬通志子 安藤 知子 安倍 道子
 シッシュ・D・由紀子 遠藤 剛熙 遠藤 静香
 五島 清子 長谷川治清 福井 友栄 古家 和雄
 * 本郷美智子 林 次郎 日野二三代 池垣 勇
 石原 和子 * 稲畑産業株式会社(稲畑 勝雄)
 石川 梢一 伊藤 博 伊藤 敬子 今江 祥智
 今本満善枝 井上 豊 井土 真杉 伊砂 利彦
 乾 昌明 岩坪嘉能子 神谷 郁代 加藤富美子
 加藤 澄子 狩野 直禎 清原 章夫 木下 洋美
 黒柳 大造 熊木 秀雄 小牧 久時 近藤 脩
 森 薫 松浦さつ子 峯村 泰光 松居 直
 宮内 幸子 村山香代子 村田まち子 村松 敏
 森内富美子 森内依理子 森本 達雄 森本 博子
 中西 明朗 宮本エイ子 森 節子 村上 光彦
 永易 秀夫 西村七兵衛 西村喜代子 西尾 順子
 永田 和子 能田由紀子 西成 勝好 野村 庄吾
 乗金 瑞穂 小尾 俊人 大石 清貴 折田 忠温
 大出 學 大川起示子 奥 和義 奥村 一彦

岡島コレット 尾埜 善司 大谷 祥子
 大谷 史朗 岡部 素行 大谷佳世子 佐々木斐夫
 三友居(山本 勝) 坂谷 千歳 佐久間啓子
 清水 憲一 志賀 鍊三 下郡 由 篠原 孝子
 鈴木 文代 田中阿里子 田代 輝子 田間 千晶
 多田 淳子 竹本 浩典 徳永 勲保 谷口けいこ
 長 美穂 上原 徳治 上原 栄子 馬木 紘子
 上西 妙子 梅原 ふさ 氏家 玲子 植松 晃一
 和田 義之 山下 雅子 山本 信子 八木美佐子
 柳田 基 山下美智子 山本 和枝
 ヴァンチュール・ミシエル 柳父 圀近 安木由美子

あとがき

昨（二〇〇六）年は、ロマン・ロランの生誕一四〇年、また私たちの研究所設立三十五年目にあたり、記念のため、ささやかながら意味深い催しがありました。

本誌はその行事の記録として、研究所講演ほかご覧のような内容を取ることができました。

ディディエ・シッシュュ先生は、現在、甲南大学に職を奉じておられますが、昨年三月十日、パリのエコール・ノルマル（ロランの学んだ学校）で、日本での「ロラン受容の歴史」について講演されました。今回、時間と紙面の都合で、その内容を縮小し、修正したものに補注が加えられ、本誌のためその仏文と訳文をいただくことができました。パリでの講演で最後に宮本正清の「焼き殺されたいとし子らへ」の詩がフランス語で紹介され聴衆に深い感動を与えましたので、「焼き殺されたいとし子らへ」と「わらい」の二篇のフランス語訳、抜粋をそれぞれ表紙裏に掲載いたしました。原詩は省略いたします。パリでの講演は日仏文化交流の上での一つの大きな出

来事でした。

山口俊章先生のお話しは、第二次世界大戦勃発以前の、ヨーロッパの知的状況をロランを中心としてみごとに展望されておりす。

一九三九年の独ソ不可侵条約——これは、イデオロギーとしてみれば、共産主義とファシズムという、絶対に両立できるはずのない二つが組んだわけです。これによって、ロランの「新しい世界」への希望は裏切られ、ロランをして、心のなかで新版『戦いを超えて』の構想を用意させた事件です。まさに前世紀の前半の最大の歴史現象といえると思います。この転換点にいたる知的世界の推移について、山口先生より多くを学ばせていただきました。村上光彦先生の連載では、一九四〇年代のロランの晩年の思想の新資料が紹介されました。「資料30」の〈私の告白〉は、驚くべき内容です。

その深い言語能力の重要性は、静かに多くの人々の心に理解されていくことと思われまします。ここに引かれていくゲーテとの深い絆、その親和性を感じさせまします。

人類の精神の最大の高みに立っているこれら二人の巨

人、それを仰ぎ見ることのできる歴史の現在地点、その幸福感を思わずにはおられません。

さらに、研究所主催の新春コンサートと「歌と朗読の会」からのレポートの記録を尾埜善司理事長はじめ大谷祥子様からもいただきました。

『ジャン・クリストフ』の中国語に訳したのは、傅雷（一九二七年、商務印書館）ですが、その息子の傅聡（フリーフォン）はピアニストとして現在活躍中の方でよく知られております。

驚くべきことは、その傅雷はが文化大革命で、妻とともに自殺（一九六六）したという事実を最近知らされました。その際の遺書、邦訳『君よ弦外の音を聴け』ピアニストの息子に宛てた父の手紙（榎木泰子訳、樹花舎、二〇〇四）も公表されました。文化を荷う心情の高潔とともに、権力者毛沢東の政治の非情を示すもので、改めて、二十世紀という時代の持つ複雑性というものを考えざるを得ません。

編集部 小尾 俊人

（編集部）

小尾 俊人 野村 庄吾

西村七兵衛 宮本エイ子

U N I T É

Numéro Spécial
140^{ème} Anniversaire de la Naissance de Romain Rolland
&
35^{ème} anniversaire de la Fondation de l'Institut Romain Rolland

Sommaire

L'accueil de Romain Rolland au Japon	Didier Chiche
L'Europe de l'Entre-deux-guerres et Romain Rolland	Toshiaki Yamaguchi
<i>Au seuil de la dernière porte: reflexions (suite)</i>	Mitsuhiko Murakami
Fusion Orient-Occident dans l'ambiance festive de la Nouvelle Année	Syoko Otani
Chant et Lecture à haute voix	Yoshi Simogoori
<i>Pierre et Luce</i>	Zenji Ono
	Kanoko Iwatsubo
Canon de la Paix	Akio Kiyohara
La dégradation de l'environnement l'affaire Hansyoyama des arrangements (suite)	Eiko Miyamoto
Activités et objectifs de l'institut Romain Rolland	
Annuaire 2006 des membres et donateurs	
Postface	Toshito Obi

Masakiyo Miyamoto
Extraits de poèmes:

À mes trésors brûlés

*Soixante-et-un jours enfermé,
Soixante-et-un jours tenaillé par la faim,
Le corps amaigri, épuisé
Disloqué,
L'esprit plein de stupeur,
Et le seize août, me voici brutalement sous le ciel bleu,
Me voici rendu à la lumière du jour.
Mon corps et mon esprit ne survivaient qu'à demi,
Mais je n'étais pas mort!
Effrayante liberté!
Je suis libre, crié-je
(. . .)
Je suis libre,
Libre de m'exposer à la poussière tourbillonnante
Et à la saleté de la ville,
Libre d'attendre interminablement
Un train qui ne viendra jamais,
Libre de faire couler toute l'eau qu'il faudra
Pour nettoyer les larmes, la sueur et la saleté de ces soixante-et une journées
Je suis libre
(. . .)*

L'accueil de Romain Rolland au Japon¹

Didier Chiche

Le Japon est depuis plus d'un siècle une grande terre d'importation culturelle: c'est pourquoi Romain Rolland a été très présent dans le monde intellectuel japonais du XX^{ème} siècle. La perception au Japon des aspects les plus variés de son œuvre est très instructive².

L'intérêt porté à Rolland s'inscrit dans le vaste mouvement de découverte et d'assimilation des cultures étrangères accompli par le Japon à la fin du XIX^{ème} et au début du XX^{ème} siècles. Il y a eu alors un indéniable prestige intellectuel de la France. Déterminant est à ce titre le rôle des intellectuels francophiles, et des revues telles que *Chûô Kôron*, revue de réflexion politique et sociale fondée en 1899, *Shirakaba (Le Bouleau Blanc)*, qui contribue à la connaissance de la pensée et de l'art européen, et *Taiyô (Le Soleil)*, dont les 531 numéros sortent entre 1895 et 1928, et qui se consacre, entre autres, à faire connaître aux Japonais les littératures étrangères.

I. Des années 1910 aux années 1930: l'âge d'or.

Tel est donc le contexte dans lequel Rolland a fait son entrée au Japon. Dans les années 1910 et 1920, correspondant *grosso modo* au règne de l'empereur Taishô (1912-1926), on assiste à une certaine démocratisation du pays: c'est ce qu'on a appelé ultérieurement l'éphémère *démocratie de Taishô*.

Ce qui permet au Japon de découvrir Romain Rolland, c'est le travail de remarquables traducteurs (une vingtaine), qui sont souvent beaucoup plus que de simples traducteurs: intellectuels engagés, souvent écrivains ou artistes. Quelques figures me paraissent emblématiques, et je les évoquerai rapidement³.

D'abord, Kôtarô **Takamura** (1883-1956), le plus ancien des «rollandiens» japonais, artiste et poète, et qui a d'ailleurs résidé à Paris en 1908. C'est lui qui a fait découvrir Rolland à ses compatriotes, avec les premières traductions, partielles, de: *Musiciens d'aujourd'hui* (1911) et de *Jean-Christophe* (1913) — plus particulièrement le début du quatrième livre (*Sables mouvants*).

Le deuxième exemple d'intellectuel «rollandien» est peut-être encore plus intéressant. Il s'agit du romancier populaire Jirô **Osaragi** (1897-1973). C'est un bon connaisseur de la France moderne, auteur d'ouvrages remarquables sur l'affaire Dreyfus (1930), sur le boulangisme (1935), et plus tard sur le scandale de Panama (1959). Osaragi a traduit *Les Précurseurs* en 1921, *Clérambault* en 1922 — vigoureux manifeste contre le militarisme —, et *Pierre et Luce* en 1924. Ces traductions suivent de très près la publication des textes originaux. En vrai disciple de Rolland, Osaragi ne fera jamais mystère de ses idées de gauche. Dans un article publié le 28 mai 1933 par le journal *Yomiuri*, il protestera contre l'autodafé organisé en Allemagne par Goebbels des livres condamnés par les nazis, et appellera à la résistance tous les Allemands *dignes de ce nom*.⁴

Autre grande figure enfin: Toshihiko **Katayama** (1898-1961). Par ailleurs poète et grand connaisseur de la littérature allemande, il a joué un rôle actif dans la première association japonaise des amis de Romain Rolland et a traduit en particulier la *Vie de Beethoven* en 1938, ainsi que *Le Jeu de l'amour et de la mort*. Par ailleurs, en 1932, Katayama, à la demande de Rolland lui-même, a donné, en français, une contribution au numéro 112 de la revue *Europe*, consacré à Goethe: *À Goethe — offrande du Japon*.

Takamura, Osaragi, Takamura: telles sont donc quelques-unes des grandes figures qui ont contribué à faire connaître Rolland au Japon.

Une première traduction complète du *Jean-Christophe* sort en 1917 et 1918 en six volumes, publiés par la Société d'Édition des Livres de Poche (*Kokumin Bunko Kankôkai*). Et entre 1920 et 1924, l'éditeur Shinchôsha publie une nouvelle traduction du *Jean-Christophe*, cette fois en 4 volumes, due au traducteur

Yoshio **Toyoshima**. Ce texte, repris en édition par Iwanami Bunko en 1935, est toujours disponible aujourd'hui⁵. D'autres traductions suivront: *Les Loups* (1925), *Le Jeu de l'amour et de la mort* (1926, repris en collection de poche en 1927), la *Vie de Beethoven* (1938), etc⁶.

Les éditions de poche assureront à différents textes de Rolland une très large audience: avant 1945, *Jean-Christophe* aura été vendu à 204 500 exemplaires. Après *Jean-Christophe* vient *L'Âme enchantée*, vendue à 93 000 exemplaires; puis *Le Jeu de l'amour et de la mort* (83 500), la *Vie de Beethoven* (36 000), *Millet* (26 000) et *Les Léonides* (17 500)⁷.

Enfin, pour en revenir à ce que je disais tout à l'heure, il ne faut pas oublier le rôle joué dans la connaissance de Rolland par les revues intellectuelles *Chiû Kôron* et *Kaizô (La Réforme)*, dont le directeur, Sanehiko **Yamamoto**, rencontrera Rolland en France (j'en parlerai un peu plus loin).

Rolland, bien sûr, a su très vite qu'il avait au Japon des lecteurs fervents, et même des disciples⁸. Dès 1915, il commence à correspondre avec l'un de ses premiers lecteurs, Seichi **Naruse**, alors étudiant à l'Université impériale de Tôkyô, qui lui a écrit le 15 avril une lettre émouvante et respectueuse⁹. Rolland lui répond le 23 mai: «Continuez (...) d'apprendre à bien connaître les langues et les pensées européennes, mais soyez imprégné de tout ce qu'il y a de grand dans la pensée d'Asie. Nous devons travailler maintenant à mettre en commun les richesses des deux mondes. L'Europe a autant besoin de l'Asie que l'Asie de l'Europe, j'en ai la certitude. Il faut que ces deux fleuves immenses finissent par unir leurs eaux.»¹⁰ Rien d'étonnant, donc, à ce que Rolland, ayant écrit en 1919 sa *Déclaration d'Indépendance de l'Esprit*, confie à Tagore la mission de la faire connaître au Japon. Par la suite, Rolland entretiendra un dialogue épistolaire nourri avec bon nombre de Japonais, recevant à l'occasion — son *Journal* en fait foi — la visite de certains d'entre eux. Le 9 avril 1923, dans une lettre à Kihachi **Ozaki**, Rolland témoigne un intérêt réel pour le Japon, bien loin de tous les malentendus ou de tous les *a priori* qui ont cours en Europe. Et s'il se félicite des

contacts que les Japonais multiplient avec le monde extérieur, il souhaiterait qu'ils n'accordent aucune priorité aux pays de langue anglaise. «Je crois qu'il a été très fâcheux pour le Japon de ne connaître l'Europe que par l'intermédiaire de la langue et de la pensée anglaises. J'admire l'Angleterre; mais il est certain qu'à l'exception d'une élite, les Anglo-saxons sont, de tous les Européens, les plus incapables de sentir l'âme des autres races et de fraterniser avec elles.» À l'inverse des Anglo-saxons, assez peu portés, selon Rolland, à admettre l'Autre, les Latins, en dépit de leurs tendances nationalistes, ne nourrissent pas de préjugés racistes, et sauront mieux s'entendre avec les Japonais, dont la nature profonde est semblable à la leur. «J'imagine que des Japonais sympathiseraient bien plus facilement avec des Français ou avec des Italiens (ou des Slaves) qu'avec des Anglais ou des Américains. Leur vrai tempérament, sensitif et nerveux, les en rapproche davantage.» Le 16 décembre 1925, Rolland écrit encore à Ozaki: sachant que le 29 janvier 1926, ses amis japonais ont l'intention de se réunir, il leur adresse pour message un extrait inédit, «deux ou trois pages» du *Voyage Intérieur*, tiré du *Périple*.

Mais le disciple avec lequel il échange le plus de lettres, c'est Katayama. Le Japon est mal connu, et Rolland ne peut s'en satisfaire: «Il ne faut plus tarder, écrit-il à celui-ci le 10 mars 1925, à faire connaître en Europe votre pensée du Japon nouveau — (qui reste le Japon éternel). Aucun grand peuple n'est moins bien connu que vous en Europe. On vous admire; mais on se trompe sur l'objet de l'admiration; on le restreint à un côté de votre nature. On est frappé de votre intelligence et de votre énergie. On méconnaît entièrement votre fraîcheur intime, votre profondeur d'émotion, et votre sincérité.»¹¹ Et dans la même lettre, tout en se déclarant heureux de savoir que ses amis japonais ont constitué une association, il met en évidence ce qui le rapproche de ces lointains admirateurs: la solitude. Si eux se sentent encore relativement seuls parmi leurs compatriotes, cette solitude, cet exil, est aussi, là où il se trouve, ressentie par Rolland lui-même. En août 1926¹², Rolland adresse à son traducteur Katayama

une lettre autorisant ses amis japonais à traduire tous ses écrits: «... pour vous, mes amis (le cher groupe d'amis fraternels: Kihachi Ozaki, vous, Hyakuzo Kurata, Takata, Yoshida, et vos intimes, vous êtes toujours autorisés par moi à traduire et publier ce que vous voudrez de mes œuvres, en japonais.»¹³ Dans la même missive, il évoque le voyage au Japon de son ami Charles Vildrac, et dit l'inquiétude de celui-ci devant la montée du nationalisme japonais — tout en se refusant à désespérer de ce pays et de son peuple, sachant que «tout le meilleur d'un peuple est aussi le plus secret.» Rolland parle aussi de ses entretiens avec Tagore, qui a séjourné au Japon qu'il admire, et dont le peuple est pour lui «l'aristocratie naturelle de l'Asie et du monde.»¹⁴

Certains de ses traducteurs, quand ils le peuvent, viennent lui rendre visite. Rolland accueille ainsi, le 8 septembre 1928, Akio Ueda; et le 2 juillet 1929, Toshihiko Katayama lui-même¹⁵. Dans son *Journal*, il évoque cette visite en termes assez précis: même si la conversation n'est pas toujours facile — car pour les Japonais d'alors, on apprend encore le français comme une langue morte, qu'il est plus aisé de lire et d'écrire que de parler —, il s'avoue touché par la personnalité de Katayama, «la beauté morale de cette nature, virile et tendre»¹⁶, en même temps qu'impressionné sa vaste culture et sa connaissance de la tradition européenne: «Il nous est très sympathique, une figure agréable et intelligente. Parfaitement simple, sans gêne, avec une exacte mesure. Il est très instruit, dans tous les domaines de l'art européen, et aussi au courant, sinon plus que nous, de tout ce qui nous concerne.»¹⁷

En octobre 1929 parvient à Rolland le livre d'un jeune francisant: Masakiyo Miyamoto, dont j'aurai un peu plus loin l'occasion de parler plus longuement. Ce livre, publié à l'occasion du soixantième anniversaire de Rolland, s'appelle *Jean-Christophe: une histoire de Romain Rolland*. Rolland fait état de cet envoi dans son *Journal*, à la date du 4 octobre 1929, et à cette occasion confie les impressions qu'il retire de cette missive d'un lointain admirateur: «Masakiyo Miyamoto, m'envoie un volume (je crois, d'extraits) de Jean-Christophe traduit par lui, avec

une préface de Takamatsu Yosie, paru en 1926 à Tokyo. Il s'y trouve de cocasses gravures qui nipponisent mes Rhénans. Miyamoto y joint une longue lettre respectueuse en français (6 octobre). Il a dit qu'il y a 8 ans qu'il la couvait, sans oser l'envoyer. Les livres l'ont fait ami de mes amis japonais Katayama, Takamura, Ozaki, Ueda, Takada, Yosida. Katayama, Ueda et lui sont de la même province; "mais c'est vous, écrit-il, qui nous avez liés dans la ville de Tokyo dans l'amour de l'éternelle lumière, par la main amicale de Jean-Christophe."¹⁸

Une anecdote que lui a transmise Miyamoto peut flatter son orgueil d'écrivain. Peu de temps avant le départ de Katayama pour l'Europe, Miyamoto et Katayama sont allés dans un temple de la vieille ville de Nara. Ils ont demandé à voir une statue renommée qui, en principe, était interdite au public; et pour arracher l'acceptation du moine qui veillait sur cette œuvre d'art, il leur a fallu arguer du fait que Katayama allait voir Romain Rolland. Le nom de Rolland était un sésame qui ouvrait toutes les portes. Ce que Rolland retire de cet échange avec Miyamoto est de nature à nourrir ses interrogations sur ce pays encore si mal connu. Attentivement, il prend note des critiques que Miyamoto adresse au système éducatif japonais: centré sur les connaissances scientifiques, ce système manquerait d'humanité, et ne favoriserait guère l'épanouissement des enfants. Il s'avoue par ailleurs déconcerté par la tendance de la jeunesse japonaise — comme d'ailleurs, de la jeunesse chinoise — à lire en priorité certains ses textes les plus pessimistes (*Aert, Les Vaincus*). Cela en dit long, imagine-t-il, sur l'«oppression morale» qu'ils subissent¹⁹. De cette réflexion il fait d'ailleurs état dans la réponse qu'il adresse à Miyamoto le 14 novembre 1929²⁰. Si la jeunesse japonaise, lui dit-il en substance, apprécie tant *Les Vaincus*, il voit dans ce choix le signe d'un sentiment d'oppression. Mais Rolland voudrait être d'abord et avant tout un messager de l'espoir, et souhaiterait que la jeunesse japonaise ne se laisse pas gagner par le pessimisme. Aussi invite-t-il Miyamoto — et à travers lui tous les Japonais de sa génération — à résister au découra-

gement et au pessimisme: «Pour que mes Vaincus exercent une attraction sur le jeune Japon (. . .), il faut qu'il y ait là-bas bien des tristesses et une lourde oppression morale. Je les ai connues dans ma jeunesse. Je les ai vaincues. Amis, vainquez-les, avec moi! Les forces de l'Âme sont innombrables.»²¹

En décembre 1931 a lieu la rencontre de Villeneuve avec Gandhi. Est présent à cet occasion un sculpteur japonais résidant alors en France: Hiroatsu **Takata** (1900-1988) traducteur par ailleurs de la *Vie de Michel-Ange*. Il sculptera le buste de Gandhi, et celui de Rolland lui-même. Et en 1932, Rolland préfacera la traduction d'un ouvrage de Hyakuzô **Kurata**: *Le Prêtre et ses Disciples*, qu'il a lu en anglais.

Nul doute, donc, que Rolland attache une importance majeure à la diffusion de son œuvre au Japon: ses échanges avec ses interlocuteurs japonais, qu'il gratifie souvent d'une bienveillance toute paternelle²², nous révèlent un Rolland à la fois soucieux de l'altérité japonaise, mais aussi peut-être confusément inquiet de ce que l'avenir pourrait réserver à ce pays et à l'Asie, si le Japon persistait à imiter l'Occident dans ce qu'il a de pire: la volonté de conquérir et d'opprimer. De cette inquiétude, le *Journal des années de guerre* fait état, à la date du 20 juillet 1918, à l'occasion de la visite à Rolland de Naruse: «(. . .) Le Japon professe naturellement le machiavélisme d'État. Il ressemble à l'Allemagne militariste; il en a les pires doctrines, et il les appliquera plus implacablement»²³.

À ce point de mon exposé, je terminerai par une anecdote significative. Un Japonais féru de langue et de culture françaises: Takayuki **Ochiai**, employé depuis 1938 par le Ministère des Affaires Étrangères de son pays, s'était trouvé en France au début de la guerre. Au printemps 1940, il rencontre à Paris Sanehiko **Yamamoto** (1885-1952), créateur de la revue *Kaizô (La Réforme)*. En compagnie d'un troisième compatriote, le sculpteur Hiroatsu **Takata**, celui-là même qui avait été présent à la rencontre entre Gandhi et Rolland, ils décident tous trois d'aller le dernier jour d'avril jusqu'à Vézelay rendre visite au Maître.

Il est intéressant de se reporter au récit que Takayuki Ochiai a fait ultérieurement de cette visite, qui a donné l'occasion de parler politique. Ce dernier évoque en ces termes les propos échangés avec Rolland:

«Spontanément, je lui adressai la parole:

— Dans leur action, lui dis-je, les dirigeants de l'Union Soviétique ont-ils vraiment le souci de leur peuple? J'en doute fort . . .

Rolland posa sa tasse de café et, se tournant vers moi, me demanda: pourquoi?

Et il me jeta un regard plein de bienveillante sincérité, désireux qu'il était de prêter l'oreille aux propos de ce jeune étranger qu'il rencontrait alors pour la première fois.

— C'est que, lui répondis-je, après avoir combattu au prix de leur vie pour le même idéal, ils se sont mis, une fois assurée la victoire de la Révolution, à se soupçonner et à se haïr les uns les autres, allant jusqu'à s'entretuer. N'est-ce pas la même chose que partout ailleurs: des conflits entre politiciens manœuvriers, soucieux avant tout de leurs intérêts égoïstes?

Je parlais lentement, et en pesant mes mots. Le jeune homme que j'étais alors ressentait jusqu'à l'écœurement la laideur de ce monde livré à tant de violence. Le visage de Rolland jusque-là immobile s'anima, et avec un sourire plein de bienveillance il me dit:

— Ce que c'est que la politique, Monsieur . . .

Cette réponse, dans sa simplicité, m'alla droit au cœur, et il me sembla que j'y voyais plus clair. J'eus l'impression que toute la sagesse que m'avait depuis longtemps apportée la lecture de Romain Rolland se concentrait alors en moi et se mettait vraiment à porter ses fruits. Dans le regard paternel de Rolland, je vis comme un encouragement silencieux à ne jamais me laisser abattre et à résister.»²⁴ Le jeune Ochiai était apparemment intimidé par le Maître, et il y a dans son récit un ton de vénération qui donne la mesure de son émotion d'alors. Mais il faut ajouter, à la lumière de ce que rapporte brièvement Ochiai

lui-même, qu'il y a eu vraiment un échange approfondi, nourri, à propos de sujets graves.

Je me suis rendu en mars dernier à la Bibliothèque Nationale, pour voir si le *Journal* de Rolland, inédit à ce jour, ne gardait pas trace de cette visite. Elle est en effet évoquée, et de façon détaillée, par Rolland lui-même, à la date du 30 avril 1940: «Le sculpteur TAKATA nous amène de Paris un grand directeur de journal japonais, Sanehiko Yamamoto, general editor de la revue mensuelle «Kaizo», de Tokyo, accompagné de son jeune secrétaire Takayuki Ochiai.» Petite erreur de détail: Ochiai n'est pas le secrétaire de Yamamoto. «Yamamoto a fait un tour d'Europe occidentale: Italie, Angleterre, France, etc. C'est un homme de 50 à 60 ans, trapu, la face large et sérieuse, sans aucun doute intelligent et libre dans ses jugements: je n'en veux pour preuve que ce qu'il dit de la Chine, où il a fait plus de quarante séjours, où il s'est entretenu avec toutes les personnalités politiques et intellectuelles importantes, à commencer par Chang-Kai-Chek, et dont il dit: — "Il n'y a point de doute que tous ces hommes n'aient une supériorité d'intelligence [d'expérience politique] tout à fait marquée sur tous les hommes d'État japonais": il n'en est pas moins préoccupé de l'issue de la guerre actuelle, pour la Chine comme pour le Japon. — Je me refuse à dire ma pensée sur cette question, qui dépasse trop mes moyens de connaissance, — et d'autant plus que j'ai des amis que j'estime dans les deux pays. — Mais je réponds librement à toutes les questions qu'il me pose sur le conflit européen, — et, en particulier, sur les personnalités des trois dictateurs. Hitler, pour qui j'ai suffisamment manifesté mon inimitié et la nécessité de sa destruction, me paraît néanmoins des trois celui qui a le plus de génie, mais déséquilibré et mal assuré sur ses bases. Mussolini est le moins original, — intelligent, apte à se grimer, à jouer des rôles, commediant, tragediant²⁵. Staline est fait du métal le plus solide, depuis 40 ans, forgé et reforgé sur l'enclume de la Révolution, avec laquelle il s'identifie, pas un seul jour n'ayant lâché le gouvernail, d'une inébranlabilité inconcevable, au cœur d'un enfer de combats et de conspirations. Je parle aussi

longuement de Gorki, de la grandeur de son rôle de surintendant des lettres, des arts et des sciences, et de la profonde affection qui nous unissait. — Yamamoto dit qu'au Japon les intellectuels sont loin de tenir le rang qu'ils occupent en Occident, — même en Italie fasciste, où rien ne semble l'avoir plus frappé que l'intangibilité d'un Benedetto Croce, qu'un Mussolini n'a jamais osé frapper. — Il a organisé, il y a quelques années, la réception au Japon d'Einstein, qu'il vient de revoir en Amérique, et qui lui a dit, avec ce découragement pratique qui m'a souvent frappé chez ce grand esprit qui n'est d'aplomb que dans le monde de ses équations, — que la guerre actuelle était sans aucun but. (Wells n'a guère été plus encourageant: l'avenir humain lui semble se résumer dans la lutte acharnée de 3 ou 4 impérialismes). Moi, j'exprime mon espoir d'une avancée vers l'établissement d'États-Unis de l'Europe (ou de constellations d'États unis, dont l'intime union franco-britannique serait un moyen: car le plus certain qui résulte de l'expérience de ces derniers temps, c'est que l'existence de petits États isolés, indépendants, n'est plus possible: il leur faut se grouper. — Yamamoto m'invite à venir faire des conférences au Japon. — Mes livres y sont populaires. Gide y est lu, et Valéry. Il y a des cercles de stendhaliens; mais, chose curieuse, Balzac n'a jamais pu s'y implanter. — Yamamoto a bien connu Claudel à Tokyo; il va le revoir, ces jours-ci."

Si je me permets de citer l'intégralité de ce qu'écrivit Rolland à cette date, c'est pour montrer que l'entretien n'a rien de compassé. Tous les sujets y sont abordés: les plus brûlants d'abord, ceux de l'actualité (en l'occurrence la guerre), mais aussi des sujets d'ordre littéraire, et surtout ceux qui comptent le plus aux yeux de Rolland et témoignent de son génie visionnaire: l'avenir sera dominé par l'affrontement des impérialismes (ce que nous appelons les surperpuissances); et il faut que l'Europe s'unisse, sous la forme d'une fédération (États-Unis de l'Europe) ou d'une confédération (constellations d'États unis). Tous les périls et les débats de l'après-guerre: guerre froide, divergences sur la construction européenne, sont déjà là.

II. Les années de guerre: les temps difficiles.

Nous sommes, je le rappelle, en 1940: et l'évolution politique va bientôt amener les rollandiens du Japon à connaître de multiples épreuves.

Le raidissement nationaliste et autoritaire du Japon, amorcé depuis les années 30, et son ralliement aux puissances de l'Axe conduisent naturellement à voir Rolland et donc ses lecteurs japonais d'un mauvais œil. Certains admirateurs de Rolland, comme Takamura, vont même jusqu'à tourner le dos à leurs idéaux de naguère; mais en même temps, les épreuves donneront aux plus résolus et aux plus sincères des rollandiens l'occasion de montrer que chez eux, le caractère est à la hauteur de l'intelligence. Car malgré les liens noués entre le Japon et les puissances de l'Axe, le prestige de la culture française demeure intact, et deux institutions contribuent à maintenir ce prestige: la Maison Franco-japonaise de Tôkyô et l'Institut Franco-japonais du Kansai situé à Kyôto, jadis fondés par le grand ambassadeur qu'avait été Paul Claudel. Les contacts que ces établissements permettent, envers et contre tout, de maintenir avec la culture française, sont vitaux pour bon nombre d'intellectuels japonais, mal vus des autorités (un rapport de police met l'accent sur la collusion entre Institut Franco-japonais, «mouvement culturel» et «front populaire» à Kyôto, et stigmatise ses intellectuels polyglottes²⁶).

Ces intellectuels sont souvent des universitaires: parmi eux, Masakiyo **Miyamoto** (1898 - 1982), grand rollandien dont je parlerai un peu plus longuement, car son parcours permet de voir comment l'œuvre de Rolland peut être source de résistance²⁷.

Né en 1898 à Kôchi, dans l'île de Shikoku, Masakiyo Miyamoto a d'abord été étudiant à Tôkyô. En 1927, lorsqu'à l'initiative de Claudel est fondé l'Institut Franco-japonais de Kyôto, il vient participer à la mise en route de l'établissement, et y devient professeur. Passionné de littérature française, c'est depuis longtemps un grand lecteur de Rolland, et j'ai évoqué tout à l'heure

l'échange épistolaire qu'il a eu avec lui en 1929.

C'est dans la période difficile des années 40 que Masakiyo Miyamoto va pleinement s'imposer comme traducteur, puisqu'il sera l'auteur de la première traduction complète de *L'Âme enchantée*. Alors que le pays tout entier est mobilisé au nom de l'unité nationale, et que la censure est omniprésente, en octobre 1940 sort le premier volume de *L'Âme enchantée*, chez l'éditeur Iwanami Bunko, traduit précisément par Masakiyo Miyamoto. En 1941, un durcissement de la Loi sur le Maintien de l'Ordre Public intensifie l'oppression: mais malgré ces obstacles, le professeur Miyamoto poursuit son travail. En 1941 sortent les volumes 2, 3 et 4 de *L'Âme enchantée*, et en 1942, les volumes 5, 6 et 7²⁸, mais avec des passages laissés en blanc (dans le volume 6 par exemple, cinq passages, et dans le volume 7, ving-trois passages ont été coupés, soit par décision des autorités, soit parce que l'éditeur avait jugé préférable de pratiquer l'auto-censure). Exemple de coupure dans l'épilogue de *Mère et Fils*, un passage du dialogue entre Annette et Marc: «Si la guerre venait te prendre, qu'est-ce que tu lui dirais? — Je lui dirais: — «Non!»²⁹. Ce passage «subversif» et qui, pense-t-on, nuirait au moral de la Nation en guerre, disparaît du texte japonais³⁰.

Plus tard, à l'automne 1954, dans la postface à la réédition en poche de *L'Âme enchantée*, Masakiyo Miyamoto évoquera les conditions dans lesquelles il lui aura fallu travailler: «Cette traduction a été faite entre 1940 et 1942, en temps de guerre. Ce n'est pas rien, quand on songe à l'atmosphère qui régnait alors: atmosphère d'exclusion, d'hostilité à tout ce qui venait d'Europe; atmosphère lourde, étouffante. Sous la pression chaque jour plus forte du militarisme et du nationalisme incitant au repli sur soi et à la fermeture intellectuelle, et avec la pénurie qui était une circonstance aggravante, la publication d'une œuvre de Romain Rolland fut en elle-même un grand acte de résistance.»³¹

En août 1942, sort le volume 7 de *L'Âme enchantée*, tiré à 13 000 exemplaires. La même année a lieu ce qu'on a appelé l'affaire de Yokohama: une soixantaine d'éditeurs ou de journalistes, soupçonnés d'être des «rouges», ont

été arrêtés, torturés, souvent condamnés au terme de procès expéditifs, voire pour quatre d'entre eux assassinés dans leur prison. Les revues *Chuô Kôron* et *Kaizô* — qui existait depuis 1919 et dont le directeur, on s'en souvient, avait rendu visite à Rolland en avril 1940 — sont interdites. C'est donc de manière discrète, sinon clandestine, que les admirateurs japonais de Rolland ont, pendant toute la guerre, continué d'entretenir la flamme. Le 15 juin 1945, le professeur Miyamoto (en même temps qu'un professeur français de l'Institut de Kyôto, Jean-Pierre **Hauchecorne**), est arbitrairement arrêté, puis torturé. À sa sortie de prison, le 16 août — c'est-à-dire le lendemain de la capitulation du Japon —, le professeur Miyamoto écrira deux poèmes pour dire sa souffrance, et la joie de la liberté retrouvée. Le titre d'un de ces textes: *À mes trésor brûlés*, fait allusion à tous les documents du professeur Miyamoto qui avaient été confisqués puis brûlés au moment de son arrestation³².

III. La renaissance de l'après-guerre.

La défaite du Japon est aussi une libération du pays: libération politique, intellectuelle et morale. Dans ce pays meurtri par la défaite et qui s'ouvre à nouveau, le message universaliste et pacifiste de Rolland est plus que jamais d'actualité. Conditions favorables s'il en est à la redécouverte de son œuvre. Autre chose, également, a joué en faveur de ce retour de Rolland au Japon: l'action énergique et patiente de l'éditeur Toshito **Obi**, fondateur de la maison *Misuzu*. Ce dernier décide en effet de publier tout Rolland en japonais.

Tâche difficile, car les textes de Rolland avaient une telle force subversive qu'après avoir été censurés par le régime liberticide qui avait conduit le pays à la guerre, ils pouvaient aussi éventuellement être mal vus par l'occupant américain, qui contrôlait tout ce qui se publiait alors.

À force de ténacité, et au prix d'un travail de plusieurs années mettant à contribution toute une équipe de traducteurs, Misuzu est tout de même parvenu

à ses fins.

Une lettre de Rolland lui-même a considérablement facilité les choses. Cette lettre, que j'ai citée plus haut, datée du 1^{er} août 1926 et destinée à Katayama, autorise la traduction et la publication de tous ses écrits, quels qu'ils soient³³. La première édition par Misuzu des *Œuvres complètes* de Rolland compte 50 volumes et s'étale sur sept ans: de 1947 à 1954. Vient ensuite une seconde édition, puis une troisième et dernière, entre 1979 et 1985: cette édition compte 43 volumes³⁴.

Nul doute qu'au Japon, l'énorme travail des éditions Misuzu a donné aux écrits de Rolland un extraordinaire retentissement. Il faut d'ailleurs ajouter que, si ces «Œuvres complètes» ne le sont pas à proprement parler, puisqu'elles ne comportent ni le journal ni les lettres de Rolland dans leur intégralité, certains textes de Rolland encore inédits à ce jour en France sont disponibles en traduction japonaise: je pense en particulier à bon nombre de lettres qu'il a adressées à ses admirateurs ou traducteurs japonais: pour les lire, on a le choix entre consulter le fonds Rolland à la Bibliothèque nationale de France, et les lire en japonais. Les chiffres sont éloquentes: en 1975, *Jean-Christophe* aura été vendu à 554 000 exemplaires, et *L'Âme enchantée*, à 627 900³⁵.

L'impact de Rolland dans les années de l'après-guerre s'est également fait sentir sous d'autres formes: dans le monde de la musique, au théâtre, et même au cinéma, puisqu'une adaptation cinématographique de *Pierre et Luce* — qui a grandement ému le public japonais — a été faite en 1950 par le réalisateur Tadashi Imai. On peut donc dire que les années de l'après-guerre et de la reconstruction sont une véritable renaissance des études rollandiennes au Japon.

En 1949 est fondée au Japon une association des Amis de Romain Rolland; et parmi les intellectuels qui se sont associés à cette initiative figure le professeur Kazuo Watanabe, par ailleurs grand spécialiste de Rabelais, et qui a compté au nombre de ses disciples le futur prix Nobel de littérature Kenzaburô Ôe. En 1948, le professeur Watanabe a écrit un essai intitulé: *En*

pensant à Romain Rolland. Dans ce texte, après le rappel des événements qui ont marqué l'histoire de son pays dans les années précédentes, il invite ses compatriotes à méditer le message de Rolland, pour *ne pas reproduire les erreurs passées*³⁶.

J'ai dit plus haut l'importance de Kyôto dans le développement des études rollandiennes. Cette importance est bien sûr due au rôle qu'y a joué le professeur Miyamoto: après les épreuves de la guerre, de la censure et de la détention, il poursuit ses activités à l'Institut de Kyôto. Il enseigne par la suite à l'Université Municipale d'Ôsaka, et en 1950 se rend en France afin de poursuivre ses recherches — et aussi pour négocier avec Albin Michel. Masakiyo Miyamoto, traducteur, non seulement de *L'Âme enchantée*, mais aussi de *Colas Breugnon*, s'est attaché — jusqu'à sa mort survenue le 16 novembre 1982 — à promouvoir la connaissance de Rolland au Japon. Il a fondé en 1971 l'Institut Romain Rolland, situé à Kyôto, pour qu'après lui les documents qu'il avait collectés sur Rolland ne soient pas éparpillés.



Si le professeur Miyamoto est au Japon le type même de l'intellectuel rollandien, on comprend donc qu'il n'est fort heureusement pas le seul. L'importance de Romain Rolland au Japon est bien la preuve qu'il y a toujours eu dans ce pays, en toutes circonstances, des hommes libres, déterminés et courageux, et chez qui le caractère a été à la hauteur de l'intelligence. La chance de Rolland au Japon est d'avoir été servi par ces admirables passeurs, engagés dans les remous d'une Histoire, qui fut souvent douloureuse, mais sachant précisément — du moins pour beaucoup d'entre eux — faire face aux événements, et traduire leurs convictions dans l'action. Et même si, de nos jours, Rolland n'a plus, au Japon, l'audience qui était encore la sienne il y a une trentaine d'années, sa présence peut encore, à telle occasion, se faire sentir.

J'en veux pour preuve une représentation théâtrale organisée en décembre 2006 par le grand maître du *shamisen*, Masatarô **Imafuji** (qui avait très marqué dans sa jeunesse par la lecture de Rolland). Cette représentation consiste en une déclamation d'un texte reprenant l'histoire de *Pierre et Luce* — texte lui-même adapté, à partir de la traduction de Miyamoto, par Masako **Takeda**; la récitation a été donnée par l'actrice Kazuko **Yoshiyuki**. C'est dire que Rolland continue d'avoir au Japon une postérité. Tout cela témoigne de la présence au Japon, envers et contre tout, d'un écrivain dont le nom est synonyme de résistance.

- 1 Le présent texte reprend, avec quelques suppressions, ajouts et modifications, une conférence que j'ai donnée à l'École Normale Supérieure le 10 mars 2006: *Présence de Romain Rolland au Japon*, pour l'Association Romain Rolland (texte publié en 2006, in *Études Rollandiennes*, 16).
- 2 Je tiens à exprimer ma gratitude à M. Toshito Obi, fondateur des éditions Misuzu, qui a bien voulu me transmettre un texte écrit de sa main (auquel il sera fait référence sous le titre: T. Obi, *manuscrit*) et évoquant, outre les expériences éditoriales de M. Obi, l'historique de l'accueil de Romain Rolland au Japon. Ce texte très riche m'a été du plus grand secours. Ma gratitude va également à Mme Marie-Laure Prévost, Conservateur à la BnF, qui m'a permis d'accéder aux documents inédits (lettres et journal) du fonds Romain Rolland. Enfin, je tiens à remercier l'Institut Romain Rolland de Kyôto pour son aide, en particulier pour m'avoir permis d'accéder aux documents du professeur Miyamoto. Le bulletin annuel de l'Institut Romain Rolland de Kyôto: *Unité*, auquel il est souvent fait référence dans ce texte, est également une source d'informations particulièrement riche.
- 3 T. Obi, *manuscrit*.
- 4 Cité dans T. Obi, *Romain Rolland to Nihonjintachi 2* (Romain Rolland et les Japonais (2)), *Unité* 23 (mars 1996), pp. 32-33.
- 5 Sur *Jean-Christophe*, voir: T. Obi, *manuscrit*.
- 6 Renseignements donnés dans: *Romain Rolland honyaku shuppan nenpyô*, (Chronologie des traductions japonaises de Romain Rolland au Japon), présenté par T. Obi dans

Unité 28 (avril 2001), pp. 31-33.

- 7 Chiffres donnés dans: T. Obi, *Nihon ni okeru Romain Rolland juyôshi, «L'accueil de Romain Rolland au Japon»*, dans *Unité 17* (mars 1990), p. 16.
- 8 Sur la conscience que Rolland a eu de sa présence au Japon, j'ai utilisé avec profit l'article bref mais substantiel de Marie-Laure Prévost, «Rencontres Japonaises», dans *Les Voix*, Kyôto, numéro 51, été 1990, p. 16.
- 9 Lettre citée par Rolland dans son *Journal des années de guerre 1914-1919*, Albin Michel, Paris, 1952, p. 369.
- 10 *Id.*, p. 370.
- 11 Lettre de Romain Rolland à Toshihiko Katayama, 10 mars 1925.
- 12 Cette lettre date du 1^{er} août ou du 9 août — du moins est-elle répertoriée comme telle à la BnF, mais peut-être de manière erronée.
- 13 BnF, *fonds Romain Rolland*, Lettre à Katayama, 9 août 1926.
- 14 *Ibid.*
- 15 BnF, *fonds Romain Rolland, Journal*, 8 septembre 1928.
- 16 BnF, *fonds Romain Rolland, Journal*, 2 juillet 1929.
- 17 *Ibid.*
- 18 BnF, *fonds Romain Rolland, Journal*, 4 octobre 1929
- 19 *Ibid.*
- 20 BnF, *fonds Romain Rolland*, Lettre à Miyamoto, le 14 novembre 1929 . On trouve une traduction japonaise de cette lettre par M.Miyamoto dans: Romain Rolland, *Œuvres complètes*, Misuzu, Tôkyô, 1979, T. 36, p. 473.
- 21 *Ibid.*
- 22 Voir à titre d'exemples le ton affectueux de la lettre adressée par Rolland à Katayama le 4 février 1930, et l'affection paternelle que Rolland déclare à Ueda dans sa lettre du 8 mai 1930. Et dans son *Journal des années de guerre 1914-1919*, Rolland parle avec affection du «petit Naruse».
- 23 *Journal des années de guerre 1914-1919*, p. 1538.
- 24 Cette rencontre est rapportée par Takayuki Ochiai, dans: *Romain Rolland no omokage «Image de Romain Rolland»*, Unité 23 (mars 1996), pp. 48-49.
- 25 Expression fameuse employée par un pape à l'occasion de sa rencontre avec Napoléon.

- 26 Voir: Itsuo Sonobe: *Kako Yūjirō to Takigawa jiken nado* 'Yūjirō Kako et l'affaire Takigawa', *Unité* 32 (avril 2005), p. 9.
- 27 Sur la vie et la carrière du professeur Miyamoto voir *Unité* 16 (novembre 1988), (numéro consacré à la mémoire de ce grand universitaire), chronologie initiale.
- 28 Pour cette chronologie de la publication de *L'Âme enchantée*, voir: Romain Rolland *honyaku shuppan nenpyō*, 'Chronologie des traductions japonaises de Romain Rolland au Japon', présenté par T. Obi dans *Unité* 28 (avril 2001), pp. 31-33.
- 29 *L'Âme enchantée*, Édition définitive, Albin Michel, Paris, 1951 (première édition: 1934), p. 723.
- 30 T. Obi, *Fushigi na shizukesa -une étrange sérénité*, dans: *Miyamoto Masakiyo botsugo kinen kōen -hommage à la mémoire de Msakiyo Miyamoto, dix ans après sa disparition*, *Unité* 20, pp. 54-55.
- 31 *L'Âme enchantée*, trad. M. Miyamoto, volume 1, réédition de 1989, Iwanami Bunko, Tōkyō, p. 476.
- 32 Voir *Unité* 16 (novembre 1988), pp. 2-3.
- 33 Concernant les conditions de la publication dans l'après-guerre, voir: T. Obi, *Romain Rolland zenshū no shuppatsu no koro -le lancement de la publication des œuvres complètes de Romain Rolland*, *Unité* 28 (avril 2001), pp. 18-15.
- 34 T. Obi, *Manuscrit*.
- 35 Chiffres donnés dans: T. Obi, *Nihon ni okeru Romain Rolland juyōshi*, 'L'accueil de Romain Rolland au Japon', dans *Unité* 17 (mars 1990), p. 16.
- 36 Cité dans: T. Obi, *Romain Rolland to Nihonjintachi (2)*, 'Romain Rolland et les Japonais (2)', *Unité* 23 (mars 1996), pp. 36-37.

Bibliographie

- G. Antoine P. Claudel, *Romain Rolland, Une amitié perdue et retrouvée*, édition établie et annotée, Les Cahiers de la NRF, Gallimard, 2005
- J. B. Barrère, *Romain Rolland, L'Âme et l'Art*, Albin Michel, Paris, 1998
- B. Duchatelet, *Romain Rolland tel qu'en lui-même*, Albin Michel, Paris, 2002
- R. Rolland, *L'Âme enchantée*, Cercle du Bibliophile, Paris, 1934
- R. Rolland, *Ces Jours Lointains*, Albin Michel, Paris, 1962

- R. Rolland, *Chère Sofia*, Albin Michel, Paris, 1969
- R. Rolland, *Le cloître de la rue d'Ulm. Journal de Romain Rolland à l'École Normale (1886-1889)*, Albin Michel, Paris, 1952
- R. Rolland, *Colas Breugnon*, LGF, Paris, 1997
- R. Rolland, *Haendel*, Albin Michel, Paris, 2000
- R. Rolland, *Inde*, Albin Michel, Paris, 2000
- R. Rolland, *Jean-Christophe*, Livre de Poche, Paris, 1961
- R. Rolland, *Journal des années de guerre 1914-1919*, Albin Michel, Paris, 1952
- R. Rolland, *Le Seuil* précédé du *Royaume de T.*, Éditions du Mont-Blanc, Genève-Annemasse, 1955
- S. Zweig, *Romain Rolland*, LGF, Paris, 2003

(Université Kônan, Kôbe)

ユニテ

第三十四号

発行日

二〇〇七年四月十五日

発行者

(財) ロマン・ロラン研究所

理事長 尾 埜 善 司

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所

(株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>

E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp